森 有 礼 研 究

第二 森有礼とキリスト教

林 竹 二

序章 森有礼と元田永学

森はクリスチャンであっただけ。
これに特に興味に多く論じられた問題であった。
森の「同情者」は、いろいろの証拠をあげて、森はクリスチャンではなかった、彼らの知る「証拠」に本づけ、そんな程はないと主張した。
だがこれは実は答えるに極めて困難な問題であるのか。それを問題にすることに、殆ど意味はないと私は考える。森がキリスト教徒であったかどうかという問題に意味があるとすれば、それはその信仰が森に何を与えたかにつきる。
彼が、キリスト教に長年こそ起こした人であったことは動かない事実である。森の文部省入試、文相就任に対して、執拗に反対した元田が、森を「信者」であると信じたことには、たしかな根拠があった。
森と元田との対立は、原理的なものであった。この点吉田清成の森の文部省入試に対する反対が、極めて人間的なものであったのとは、著しく異なる。元田はその「與教観」にもとづいて、キリスト教徒と彼の信する森が、文教の府の責任ある地位に聞くことを許せなかったのである。
元田永学の「古稀之記」の記事は、この間の消息を伝えて余すところがない。
（伊藤宮内卿）時々余＝対シテ談論セリ。余其識見智慮＝服セリ。信宗教ノ一国外国
交際上、日々ヲキガルノ事情＝出ルト雖モ宗教ノ害ヲ見ル確信ヲ戦キ難ク、特＝森有礼
参事院議官ヨリ文部省御用掛ヲ兼ネト甚大ヲベキヲ以テ、直＝三条大臣、有栖川左大臣宮
＝至リ、痛切＝森ノ教育＝関スルハ共従来宗教家＝シテ将来ノ国害ヲ招ケ測ルベカラザ
ルノ理由ヲ建言セリ。伊藤ノヲ聞テ余＝向ッテ話論ス。余森ノ宗教家タル其聞ク所ノ微
証ヲ挙テ之ヲ論ジ、且其オノ用フベキハ他ノ官＝転ジテ可ナリ、唯教育＝入ルベカラザ

(1) たとえば本村臣の「故森子爵の追事について」（『国家教育』第22号明治27年1月）。
(2) 原稿森有礼研究第一「森駐米代理公使の就任」（東北大学教育学部研究年報、第15集）、18頁以下参照。
ルノ理ヲ論ジタリ。伊藤皇言ヲ、唯言ヲ、森藤人ノ有力者。吾ノ使用ヲ難シ。且其宗教
モ讃島（尚信）ノ如ク深ク信づル者ニ非ズ。吾ノ深ク信ヘズシテ可ナリト、論終ニ合ハ
ズシテナリ。元田（永学文書）

（訳）T・L・ハリスノ伝記ヲ書ケテカスパート（Cuthbert. Arthur A.）ハハリスノ門下テナリ
20人ノ日本人民ノ中、特に有力ナル（長沢信是別格）ノ如テ讃島ニ信ゾ。就中讃島ノOne
of the truest hearted of themとし、かつその生涯ノ終ノ日にいたるまで心底からハリスハ新
生社ヘノ忠誠ヲ保ツテカレ、ナレテベリ。（同書一九二頁）

伊藤が森ヲ文相ニ起用シヨトトト時ニヘモ、元田ハ反対ヲクリ返シテ、天皇ヲ当惑スルシ
ラズ、それは執拗ナルモノデアテト。森ニ文相ニ就任シト後ニヘモ、元田ハ森ノ宗教ヲ問題ニし
フッテタ。明治20年頃ニテ書カレテト推定シル「森文相ニ対スル教育意見ニ」ハ、彼ニテ
森ニ来フィ不信ニ根拠ヲ明確シス。

⋯⋯足下ノ僕ノ見ル、学学者ヲ海ヲ以テノ目ス。僕見立リ然、然ドモ僕ハ放髪ノ監
理、横井平四郎ノ徒、従来学学者ヲ腐髪ヲタルコトヲ怒ム。孔子ヲ信ズルモ道ヲ仏教ヲ
者ノ演ヲ挙シ賛ヲ信者ノ賛ヲ信ズルガ如キニ非ズ。孔子ヲ教ハ、吾国ヲアリテハ吾君
ヲ愛シ父ノ子ヲナリテハ吾父ヲ愛シテ、孔子ヲ愛セザルヲ以テ吾道ト心得ルヲ以テ、日
本ノ今日ヲアリテハ忠孝ノ大道ヲ其時世時ニ活用スルヲ以テ僕ヲ学問ヲスキルナレバ当
世ノ支那好キ文章家考証学ヲ奴隷ニアラザルヲ。唯一日本ハ日本ノ立日本ノ教育ヲ
行ハントニ熱心ニ塁ヘザルヲ。足下ハ僕ト異ニ、従来学人ニ遊学シテ賛ー派ノ教
師ニ就テ非常ノ学問ヲ学比シト横井ヨリ伝承セリ。賛ー派賛ー教ヲ信セラルコトヲ察
スレドモ、日本ヲ教育ヲ賛ー教ヲ以テ、日本人ニ賛ー吾父ヲ賛ー氏ヲ賛ー心ヲ
惹起シタルヲヨノ精神ハ、曾テ之ヲ賛ー僕トバテハ観ル所アリト賛ートモ、吾国
県人ヲ賛ーハ足下ヲ延ヲ者少ナカラズ。賛ーフニ国家人ニ賛ーモ、必ズ足下ノ宗教ヲタル
ヲ是認スルヲ多カラントクハフルヲ。足下ヲ儒信ヲ所果シテハ如何ノヲ、足下今教
育ヲ全轄ニシテ、文部大臣ヲ、僕ヲ従者ニ足ヲラズト雖トモ、猶非ヲ顧問ニ承ケ、毎
日聖上ヲ前ニ咫尺ニシテ顧問ヲ承ク。国家ヲ為ニ賛ー言ヲハザルコトヲ得ズ。故ニ賛ー
ヲ吐テ之ヲ問フ。足下ヲ賛ー忠忠愛國ヲ誠ヲアラバ希テ僕ニ告グモノヲ以テ賛ー思思
所ヲアルニレ。]

（訳）太政大臣三条実美ニ於ケテ出テルテ澜々ノ書簡（明治18年12月15日附）ラ残セリ
内等、森文相ニ宗信ヲ承認シテ賛シテ、好都合ニス之ヲモ。右ハ兼テ元田ヲサテオ上候ヲ
上にも御配慮ヲ被 максимальトナク、此上ヲ賛ー彼ヲ御上候テハ、上とも御顧問ニ承候間、元田ハ
為ニ賛ー言ヲ不能ヲ故ニ賛ー言ヲ相成スルハ、其然可ス賛ー候。御顧問ニ可有ニ賛ー得フ、気付早々サ上候也

元田ノ森文相ニ立テル異議ニ明かニ後ノ儒教ヲ學術ヲ根ざシテガテタ。元田ガ、森ノ学
政ニどうシテも不信ヲ於ケテ出来なかタナヨリ、森ハ元田ノ教學ヲ思想ニ譲歩シ

* The Life and World-Work of Thomas Lake Harris, Glasgow, 1908.
森有礼研究

ことはできなかった。森がその方法を立てて発表したとして編纂された師範学校用の『倫理書』（明治21年）は、元田が『教育意見書』の中に表記した文根森への『危険』をとりのぞくところか、それを一層よくする内容のものであった。その倫理体系の中では、君臣の関係は、何ら特別の役割を有していなかったのである。

（注）森は師範学校の教科目中から、「修身」を選び、「倫理」をも避けてこれをと代えた。本書はその教科書として編まれたものである。かつ森は、文部大臣になると、従来の儒教主義的な修身教科書の使用を禁じ、修身をすべて教師の口授によらしていた。さらに、西村茂樹が、皇室こそ道徳の源泉にあると言った前半から、普通教育中、儒教のことは皇室自らこれを管理するという構想を打ち出し、宮中関係の有力者たちの支持をえて実現の途につこうとしたとき、森はその職を賜してこれを阻む（西村茂樹『往事録』197-8頁）こと、しかも森は東京大学の改革を企てたい西村にその算理に就任することを要請し、また、伊藤聡理の松を買った西村の『日本倫理論』のために大いに弁護の労をとったこと（同上192-3頁）等を考え合わせると、森の元田や西村との対立はもっと彼等の懐抱する、君けとなるのが天皇の本来の房務とする儒教的な教義観と、原理的に相容れない思想が奮い立っていた結果であると認められるのである。

元田は森の倫理書に対して、再びきびしい批判を加え、その修正を要求した。森が、忠君愛国の精神を養むことや、日本国的人物を造ることを教育の主要とする立場をとっているも、森と元田との教育観における対立はなお解きがたいものであったのである。

……大臣従下往キニ云フ 日本国ノ教育ヲ学芸技術ノニ造ルニ非ズ。日本国ノ人物ヲ造立スルニアリ。故ニ西洋ノ規則ヲモ観ラズ、陸軍士官ヲ規則ヲ断御シ新タニ日本教育ヲ編成ス、共根本忠君愛国ノ精神ヲ外ヲラズトト。是真ニ日本教育ヲ主要ト云ベシ。之ヲ除テニ観ヲレバ、我日本国ノ人物ヲ造立スルニハ我國ノ国民人質ヲ知ラシムルヲアリ。

先ケ君臣ノ大倫ヲ知ラシムルヲ要ス。君臣ノ大倫国民一般ノ腸腫ヲ充実ヲレバ、共他ノ其人ノ才ヲ知テノ彼等ヲ進ムベシ。君臣ノ大倫未タ明瞭ナルサスモノヲ共ノ社会ノ倫理ヲ説キ行為意志ノ區別ヲ精細ヲセストモニ已ニ日本国ノ主眼ヲ味ナルレバ、我國ニ造立スルニ足ラズ。故ニ教育ヲ大巣頭ニ君臣ノ倫理ヲ第一ニ確明シ爾後ヲ遂スニ順ヒテ処々ニ君臣ノ主目ヲ示シ、生徒ヲ師テ目覚然自然ノ感覚ヲ惹起セシメムシク、其徳義ヲ涵養セシメン事ヲ要ス。是故ニ書ヲ就テ大ニ修正ヲ望ム所ナリ。

森は元田の要求を事実上黙殺した。彼に妥協を背けさせなかったものは何であったろうか。森がクリスチャンであったかどうかの閑葛藤はしばらくおくとして、この対立の根拠をさぐることは、森の理解にとっても、日本の教育の歴史をかえりみるうえでも軽くない意味をもつ仕事である。

私は、さらに、元田が森をクリスチャン教徒と信じたのは、たしかに根拠があったのべた。元田は、自ら記しているように森のクリスチャン教入信について、横井小楠から聞くところがあったのである。森と政島が、三年におよぶ英米留学を終えて、明治元年の六月に帰国したとき、小楠は二人を自邸に招いて、英米での経験をきいた。これはおそらくその年の九月上旬の
ことで，この会見は深夜を過ぎて行なわれたと誤でられる。そのときの話題の中心は，T・L・ハリスの人間と思想と事業であった。ハリスについての二人の談話は，小楠にふか
い印象を与えた。彼は在米の二週に宛てて，ハリスについて二人から聞いたところをつぶさ
に書き送った（明治元年9月15日附）である。この記事は，森とT・L・ハリスの交渉に関す
る，もっとも信頼出来る記述であるが，特に私の考察にたいしてそれほどか視のない貴重な
資料である。何故ならそこには，小楠のハリス観が現われるだけでなく，また帰国早々の時
点で森や彼島がハリスをどのように見てきたかをもそれは示しているからである。

前
略……

藤本生歌島説並金之助外国にては，野田恒平沢井履太と改名四年前イギリスに参り居
候内同国人リハントと云者に，出会リハントより啓聞候には，世界人情唯々利害の欲
心に落入り一切天然の良心を消沒致し有名の国程此大弊甚しく有候。必竟は僕之の教
育は失し，利害上にて喰候故人道滅却喰かし乃至事なり。我等も全く僕が入
り居候処，アメリカ国エル・ハリスと云人より初て人道を察り悔いいたし候。此エル・
ハリスも元人は其之教之敬礼にて有盲，24才にて天然之良心を合点致し候。人倫の根本此
に有之事を真知し是より自家修養良心培養に必死にしようと誠に非常之人物当時世界
に比類無之大賢人たり，此人世界人道の誠を喰き専ら当時の僕之教之敬礼候志なり
。ハリント再び云，僕は此教相附下学の長をエル・ハリスに従従し修行せんと欲すと
の喰し有之，藤之両人も驚き遂にハリントと共にアメリカに渡りエル・ハリスに従従
せり，エル・ハリスは退隠村居門人30人余有之，相共に耕して講学せり。其教たるや書を読
むを主とせず講論を貴ばず，専ら良心を磨き私心を去る実行を主とし，日夜修行従断無
之，僕は然るる春風の室に入りたる之心地せり。然しながら私心を挟む人は一日も塚
へがたく，々々驚ひ来りし人も日ならず帰り去者のみにて遂に其堂を嘆ふこと不能，
藤の両人も初中々塚かたりしに僕に接続の力を得て未来心術の學間に入りたり。此
人云世界頃は邪教に落入り利害の私心に渾化せし実に人道の誠然なり。末だ邪教の入ら
ざる処は日本とアフリカ内何とか云国ののみなり，日本は観み有る国ならば，此の尽力を
十分に致したきものと。藤人近頃帰り両三度参り此道の喰し合面白く大に根本上に心懸
け非常の力行験を入り，此のエル・ハリスの見識藤之本意は良心を磨き人倫を明にす
るに在り，然に後世此教を験り如此の利害教と成り行き藤之本意とは雲泥天地の相
違と云事なり。

此段大略中退候，挿々健心的人物不及ながら謂者存念と符節を合せたり。然し道の入処
等は大に相違されども良心を磨き人倫を明かにするの本意に至りて何の異論か有らん。
実に此の利欲世界に懸む可は，此人物一人と存なるも。都合に因りては必ず尋ね訪ひ

* 山崎正義，横井小楠伝，下，149頁参照。
可被申重々存候事（下略）
（山崎正董，横井小楠遺稿，560頁）

本論考における私の仕事は、いわば右の小楠の証言の裏付けと補足だといえないこともない。私は私が国内国外で見出した若干の新資料をも含めて、なるべく同時代の史料によって、彼の英米留学時の経験を、特に森とハリス——又それを通じてキリスト教——との出会いを中心として追跡することにつとめてきたのが、この作業において小楠の証言は、いつも、もっとも信頼すべき導きの糸として役立ってきたのである。

小楠は、キリスト教に深甚な関心をもっていた。その理解のふかささも、当時の日本人としては随一であったろう。「耶穌は神でも人でもなく一つのものであった。死んで磔刑になって初めてこのヤソの事業があがった。磔刑がその人の成功であった」（山崎正董「横井小楠伝」下，148頁）と語ったと伝えられる。キリスト教について、殆ど知るすべもない当時であることをおもむと、この言葉は小楠の洞察のふかさを示すものであろう。なお彼が井上毅との対話の筆記である「沼山対話」（元治元年，1864年）によってみると、キリスト教は仏教ともがって倫理を立てるものであり、その説は仏教にくらべて一入深玄であり、しかも近代にいたるも、それは綬織義理の学と結び付けて、利生安民の事業に寄与するものとなっているとしている。

小楠は、「キリスト教を闇に豪張せしめんとはかった」として暗殺された。明治2年1月5日のことである。森もその20年後に、同じくキリスト教徒として殺された。どちらの場合にも、世間の同情は暗殺者に集った。暗殺は殺されたものへの憎悪を改めてかきたてた形がある。キリスト教への憎悪は日本の社会の根深い体質につながっている。森はその公人としての活動において、終始この種の社会体質への挑戦を敢行していたといってよい。森はその晩年の、「保守家」的色彩を濃くしていた時期においてさえ、ラジカルな改革家としての面目を保ちつつっていた。そのラジカルズムは一面気質的、性格的なものであったが、一面その若き日に、ハリスの社会（この濃密な雰囲気のこめた）の中での、きびしい生活によって、確固たるものになったように私にはおもわれるのである。

第一章 慶応元年の薩摩藩叛逆英使節団の活躍

（一） 五代友厚と富国強兵の主義

薩摩は薩英戦争から大きな教訓を引き出した。この敗戦がきっかけとなって、藩論は大きく開国に向け転換したのである。斎藤以来の開明派乃至知西派の伝統をうけついた松本弘庵（のちの寺島宗則）や五代才助（のちの友厚）の存在が、それを可能にしたといってよい。

* 山崎正董，横井小楠遺稿，397頁一913頁参照。
かれらは、開戦の恐怖をつくった英海軍による薩摩藩船の強奪のさい、船長を捕らえていた。 (1)
二人は部下全員を下船させたり、自発的に英軍の捕虜となった。その真意はさだかでないが、戦後にいたって、この二人の存在が、薩英の接近を促進するのに少くない寄与をしたことは確かである。慶応元年に15名の留学生が英国に送られることになったのは、五代の構想が実現力があった。彼は二次にわたる大規模な留学生団派遣の構想を立てていた。五代の構想によると、第一次の「留学生」は短期で、（英仏各150名）将来藩の要路に立つべきもの、又、各分野の実務の担当者を文明の実況に触れさせることによって、その養を啓き、日本が現実におかれている状況を察して目を開かせ、藩の方針を開国と富国強兵の主義に定着させることにあった。又諸種の機械の実験と購入の事務にも、当るべきものとされていた。第二次の留学生団は、開国と富国強兵の主義が確立され、整財のための緊急な措置が講じられたのちを受けて、本国の富強の根拠を築くため、本格的に西洋の科学や技術を学ぶことが任務で、五代はこの目的のために、年少の生徒560人と、やや年長の人材20余人をメンバーとして考えていた。(2)

慶応元年の薩藩留学生団は、新築と五代と寺島が同行したことによって、多目的的な薩摩の進展団の性格を帯びることになった。五代はもっぱら富国化に向けて少しばし実効をあげるため、整財不利の機械の物色や購入に奔走する傍、藩内の資源開発や貿易振興のため、外人と合弁で商社を設立する計画の実現につとめた。この計画に協力したのがベルギーの貴族モンプランであった。彼は松村淳蔵によると、文久三年池田使節団から日本の情勢をきき、困難打開のためには、大名を倒して政権の帰一をはかる外ないと考え、池田使節にこの策を進言した。この策が容れられれば、仏政府を説いて仏国の兵力を貸して、大名討滅に協力することを約めた。池田は大いにこの策をよくとげて帰国して幕府を説いたが、事は行なわれずにやんだ。モンプランは、これで幕府を見限って薩摩に近づいたのである。（彼はのち条下に伴れて日本に渡った）

ここで一言、五代の懐抱した富国強兵の主義について説明を加えておく。それは薩摩藩の知西派の代表的意見であるとともに、反幕的開国派の意中に入ったものが何であったかをよく示しているとおもわれるからである。

五代はヨーロッパにおける国家の基本は「インデストレードとコンメンシアール」（すなわち産業と貿易）であると理解する。インデストレードとは「賑々の機械を用いて万物を隨

(1)「タイムズ」1865年10月29日付は「これらの紳士は、無抵抗に藩船を敵に委ねたも、上陸するようは、英提督に一歩を委ねる道を択んだ」と報じている。
(2) 薩藩海軍史（中）、なお、「日本フォーラム」（1964年 6月）64頁参照。
(3) この計画は頼る膨大なものである。薩藩海軍史（中）933頁〜976頁を基に。又石井孝「明治維新の舞台裏」71頁以下参照。
(4) 松村淳蔵洋行談（薩藩海軍史（中）902頁）
森有礼研究 105

意に製作して蓄財の基とすること」であった。 彼が富国強兵の主義を説くときには、いつも富国
の根拠を堅くする努力を欠いた。 近世的、直接的な軍事力の強化に奔走する政策にたいす
るきびしい批判を含んでいた。 だから、横須賀製鉄所建設その他の、仏国政府の協力
を得るために渡仏した柴田日向の使命に関連して、「幕府も決して富国を知らずに強兵が
出来るものか。 段々の愚論聞くに忍びざるなり」とこれを嘲った。 これは小栗上野一派の幕
権更張論者の軍事力偏重の主義への批判につながる。

彼の富国強兵の主義の実現のためには、「国家の全力をあげての開国」が絶対の前提であ
ったが、「戦っても開けてもついに開国の外なし」とする見通しとともに、 日本の「人質強
慢にして地球上の広を知らず、 国内の動揺に空しく年月を費す」ことへの絶望感をも持って
いた。 彼はこの事態からの突破をさらに大規模の「留学」計画に求めた。 ただし、 彼がヨ
ーロッパにきて、 新に到達した結論にしたがえば、 現在日本が必要とするのは、 彼がはじめ
その構想の中で説いた若い多数の留学生の派遣ではなくて、「関鎖を論ずる公家方、 諸大名
をはじめ列藩の政治に関係する全権を挙び、 あるいは攘夷の巨魁を共にヨーロッパの形態を
見せしめ、 我彼れの国体政務の得失を目下に決論」せしめることであった。 これによって彼
は「天下藩志を一にして国政の大变革を起こす」機運を促そうとするのである。 その上で、
普く緩急の別を立て 富国强兵の基本を守って国政を振興するならば、「10余年の功を待たず
(日本は) アジアに渡る」ことが出来ると彼は信じた（慶応元年10月12日附栃右衛門宛五代
書簡及び同年秋日附未詳の野村宗七宛書簡による）

（注） その理由は、たとえ西米に留学したものが功を収め帰国しても、 一人立つ為政者が愚味であれ
ば、 その他に欠けないからである。 人を仮に欠くとこれは出来ないからである。 人材の調え上愚
なフランス人がよい例で、 このような事態は社会不安の本になる。 だから日本においてとるべきは、
（注） 支配層の啓蒙によって「上より下を聞く」措置があるとする。

五代は、 若い留学生を送る計画の中止を進言すると共に、 薩摩の太守自身がまず、 海外に
渡ることを要請した。 率先して上から下を聞く範をたてることを望んだのである。 しかし、
同時にかれはその立場が開国派であると、 藩国派であるとを問わず公家といわず列藩諸侯と
いわず、 全国的にこの前例が倣われることを要求する。 それは「御国許（薩摩藩）のみが相開
け難では、 普く（富国の功を） 皇国（日本全国）に及ばすこと能わず」という詰詰に立って
いるからである。 この段階における開明派の意識においても、 勿論藩の利害を中心とする思
考はなおよいが、 これはもはや藩的エゴイズムに終始してはいない。 藩という「拠点」を
はなれて ナショナルな目的を追求する条件は欠けていたけれども、 富国強兵の主義とナショ
ナルな立場との結びつきは、 すでに成立しつつあったのである。

(1) 薩藩海軍史（中）944頁—947頁。
(2) 同書、648頁—949頁。
(3) 薩藩書（中）946—7頁。
五代の構想する日本政治改革の方策は、典型的な平和革命の路線であった。それはまた、「深刻な封建的危機に直面して、騒乱、暴力、流血、の中絶的期間なしに市場の拡大に資するような改革をおこないたいという」英国政府の希望にも合致するものであった。ヨーロッパ諸国を視察して再びロンドンに戻った五代は、10月12日附査右門撰の書簡中に、「ヨーロッパの形勢とそこでの国政の大意を次のように記述した。これは彼の強調する富国強兵の主義がかなりに幅の広いものであったことを示している。

仏国は下に人材が多く在いて国政を論ずる事多く、国政甚だ不容易、仏仏国は私式の才力を以て動じなかったも、英国は難動、是を以て英仏の情体を御検覧破滅彼下度歴。其他一般欧羅巴の形勢、国政の大意と云ふもの、富国強兵の順序を相守、詳に出入を計りて事案に及す。国政公平にして貴賤を不論、高論あれば則も是非を用ひ、人を挙るに愛憎を以てせず、才力を論じて各共機を以て専任して仕ふ。海軍は海軍局に学び、陸軍は陸軍の学講に入る。他の講学と云へども、各隨意の学講等に学ぶ。又は貧人は貧院を立て養ひ、病院は病人を救せしむ。捨子は義院に養ひ、馬鹿院卒子院を立て適宜至当の職業を教へ、罪人と云へども無益に縁倖する事なく、共局中に配置て各得意の職業を以て種々の製作をなしむるの類。実に至らざる処なく、政理並諸州に於て尤も公平なる仁政は、第一英国第二「ウェルギー国」也。

二 寺島宗則の対英外交工作とその背景

慶応元年もおしっまった12月26日（洋暦では1866年2月11日）にマルセイユを出帆して五代と新納が帰国したあと、寺島はなお5ヶ月の間、英国にとどまった。これは、寺島が、なお果され残っている任務をもっていたことを示すものである。彼には、事実五代とは異なる使命が託されていた。

我々は英国外務省文書の中に寺島が英国到着後間もなく、外務次官レイヤード（Layard, Sir Austen Henry）と会見した記録を見出すことが出来る。それは、1865年7月28日のことである。五代もそしておそらく新納も、一緒であったろう。英外務省で作成したメモがランダムによると、この会見の主題が薩摩藩との間に英国外交貿易の道を開く件にあったことがわかる。ブリティッシュ・ミュージアム所蔵のレイヤード宛のオリファントの手紙はさらに、詳細に寺島の使命を明らかにしている。かつて、「日米フォーラム」（1964年6月号）に示された国際「幕末海外留学学生」（その4）に紹介したことがあるが、薩摩藩の意志をもっともよく示しているものだから、全文を再録しておく。これはオリファントが寺島等のために書い

(1) 石井孝「明治維新の国際的環境」（旧版）437頁。
(2) F.O. 46/61—234f
た添書である。欄外に異筆で、
Mr. Oliphant
July 28/65
と書き込みがある。おそらくレイヤードの筆であろう。

親愛なるレイヤード

此の状持参の日本紳士は、すぐれた知性の持ち主で、また注目すべき人達です。彼等は覚
書きを御覧に入れるはずですが、それによって貴君は、この使節団（Mission）の目的に
ついて、大体の理解が得られるでしょう。英国の政府が瀋藩の政府と直接の関係に入り
こむとか、幕府の意にやぶず港を開くとかすることは、不可能だろうと存じます。しかし,
それが彼等の望んでいたことなのであり、条約に規定される港が、幕領（Imperial
territory）に限られているあいだは、大名たちの間に不満は絶えないでしょう。大名た
ちは今日は貿易の利益が幕府の手に入っており、幕府はそれを独占しつつあることに
気づいて、何とかして彼等もまたその分け前に与りたいと切望しているのです。何とか
して、パークスを通じて、「大君」に入、大名の領地内に港を開くことが、彼の利益なのだ
と思わせるようには出来ないでしょうか。また「大君」との間に、藩地に港を開く
ことを希望する大名の妨害をしないような取り撮れを結ぶことは出来ないでしょうか。
このような路線を好ましいとする理由は沢山あります。勿論私はただ参考までにこれを
申し上げているので、少しくこれらの日本人と話し合われれば、貴君は、彼等の値うちを
評価することがおできになるでしょう。

28日 貴君の真実なるエル・オリファント

（註）この会見の際の英外務省側の記録によると、薩摩は差し当り、琉球諸島の一港の開港を希
望している。この段階では、薩摩は、この問題で幕府とトラブルをおこすことに対して極めて慎
重であった様子が見られる。

この外国と直接に通商関係を結ぶことを希望していたのは、決して薩摩藩だけではなかっ
た。その情報は在日英国領事たちがキャッチしており、且、その情報は、寺島・レイヤー
ド会談が実現する以前に届いていた。英国領事ラウダーは、長州が下関を幕府に奪われるこ
とをおそれ、何とかして下関開港について、直接英国政府と条約を結ぶか、それが出来なけ
れば英国が幕府に圧力を加えて下関に関して長州の希望を容れるようにさせることを望んで
いることを報告している。

のみならず1865年5月3日附の、当時帰国中であったオールコック宛、英領事ダーヴーの私
信によれば、長州の一高官が、幕府の貿易独占を攻撃し、長州はかねてから自藩内の港を外
国に開くことを希望しており、これに成功すれば、薩藩その他は直ちにその例に倣うであろう
と断言し、その交渉のため長州が英国に使節を派遣する件について外相ラッセルの了解を
とりつけるよう、代理公使ウィンチェスターに手紙を書くことを要望している。この長州の
一高官というのは高杉哲作で、彼はこの時伊藤春輔とともに英国に赴くつもりで藩主の許しも得ていた。これを覚える。この時点において藩のようないたな反幕体裁が具体的に国のために行動していたことは明らかで、このような国際政治の状況の中で、薩摩の留学生は、慶応元年3月21日羽島を飛って英国に向かったのである。

さきに引いた英国の領事グラーの「私信」（1865年5月3日即旧暦4月9日）には、この一行の出帆にふれ、グラバーがその出発を見送ったことが記されている。のちに近く、彼はその手代ライル・ホーム Ryle Holme をわざわざ英国まで附せわせて、万端の世話に当らせたのである。この手紙を受けとった薩摩体裁で帰国中のオールコックは、ラウダーの手紙をも同封、自分の意見を添えてこれを外相ラッセルに回附した。その手紙の日付は1865年7月19日である。留学生一行がロンドンにいたのは、洋暦で6月21日だが、それから1月あまりたった7月28日に、寺島や五代は、外務次官レイヤードと会見したのである。したがって、英外務省は、オリファントによって、薩摩の意のあるところを承知したのでなく、日本駐在の二人の領事と、暗号帰国中の駐日公使オールコックからの情報とその意見を併せて知りえていたのである。オールコックは、長州その他の有力大名たちは、外人を撃退する努力の空しいことを悟って、今度は、幕府の貿易独占の体制を打破して、藩内の港を開いて外国と直接の通商関係に入ることを希望している。この努力に対して彼等は外国の協力を求めてい る。彼等はロンドンに大使館を派遣しようとしている。彼等の申出にどう対処するか、彼等の利害と願望が我々と一致しているだけに真剣に考慮する価値がある。大君をしてその貿易独占の体制を改めるように仕向けることは困難であることを考えると「勧誘と主要大名達の十分な合意の下にもっと十分な開国に導く可能性」 the possibility of opening Japan more fully under the highest sanction and with the full concurrence of the chief Daimios は考慮に値する。むしろいは断乎とした行動に出るべき時期だ、これがオールコックの意見であった。ここで積極的に、外国と直接に貿易通商関係を樹立するために行動する意志を示しているのは、「長州その他の有力大名」だが、グラーのオールコック宛の書簡によれば、前記のように高杉は長州がその藩内の港を開くなら、薩藩その他は直ちにその例に倣うであろうと断念していた。またラウダーは長崎で諸藩の重役たちと接触して、この種の願望が長州だけのものでないことを発見したと書いている。ある肥後藩士は、彼にたいして、「革命に訴えてでも真に全国を外国貿易と交通にたいして開放する要求が、有力な諸大名の間につよくなっておることや、英国は幕府でなく『ミカド』に使節を送り、真に開国を保証する新条約を結ぶべきである」という意見をのべたとも記している。

(1) F.O. 46/61—196—208 7月21日にはこれが受理されている。
(2) F.O. 46/61—129
(3) F.O. 46/61—201
オールコックは、長州がこの有力な諸大名のリーダーであると解しているようてもまれ
る。事実、高杉晩作は伊藤春輔と共に、藩侯の命を受けて、下関開港の協議をとげるために
英国船にのって長崎にガワーを訪れ6日間その邸内に泊り、そこで交渉に当たった。尤も高
杉ははじめは、ただに英国に赴いてこの問題の解決に当る意図をもっていたらしい。
（註）ラッセルはこの肥後藩士から聞いた真の開国のために努力している大名のリストを図紙に認
め、これを同封してオールコックに送った。オールコックはこれを、安戸利馬邸において杉作から得
た情報であると訳注して、ラッセルに送付している。そのリストに挙げられている開国派有力大名
は、薩摩、越前、肥前、柳川、小倉（筑後）加賀、芸州、久留米、島原、肥後、福知山、（Kihitsu），
土佐、長州、宇和島の14藩である。

高杉が長崎にガワーを訪れたのは、慶応元年3月21日であった。これはまさしく、薩摩の
留学生たちが、英国に向けて羽鳥から船に乗ってこんどの日である。薩と長という反幕二雄
藩が同一時期に、同一の目的を追求していたことは興味深い。もっとも長州の場合、それ
は高杉という個人の奔放な、孤立した企画であったのだが、薩摩においては、それは明確に
藩の方針にもとづいた、藩の行為であった。
（註）高杉のこの行動は、彼のいわゆる「大割れ」実現のための「五大州中えだ防長の旗を揚げて大
細工を仕出す」ためのものであったことは明らかである。この行動は極く一部のもので外でく秘密に
されなければならないなかった。（中原邦平『東行先生略伝』97頁）

寺島は、その「履歴抄」の中で、英国にいたってオリファントの協力を得て、英国外務省
にたいして、工作を試みた頃末を次のように述べている。

…………余此人に日本外交のことを語じ同氏の好意を以て英政府の外務大臣「カラレントン」
に説かさむ。其略に云ふ、我朝外国と条約を結べばは、幕府にかえど、方今諸藩共権を
剝ぎ之を京都なる帝室に復せんとす。故に諸藩士顕りに外交をもてとし、幕威の及
ばざることを知らしめんが為に、魯人を殺し、英公使を襲ひ、其他陸地ならざる所を
あるも、皆幕府に叛くが為なり。且日本国国物連の生ずる所多くは藩地にあらんと各藩
士をして自由に貿易せしめざるが為に、外人広く貿易をなし難し。故に英国政府も外
日本政権の王室に帰する事に助力して其条約批准の主を王室に移す時は、各藩の服従せざ
る幕府と条約を締結する今日の知る異議ある事なく、内外全美の処分なり。今日の如き
幕府に対せる条約は日本真主の約する所にあらず。永く之を保続して、両国の益と為す
可らざるものなり与々。「オリハント」云ふ、其言語sand普及、宗則も同行して外務大臣に
面謁せば、我之を説かんと。翌日外務省に同行して「カラレントン」に謁し、「オリ

*（慶応元年2月）23日附、大田市之進、佐々木男也、山縣一輔、片重十郎、福田良輔、林半七、編纂
五郎、赤川敬三、其外諸君宛高杉晩作書簡。
ハント」より前議を述べ、更に議院に至りて同人に、建言する事例度にして、外務大臣大いに同意し、時の在日英国公使「パーカス」に帝権復興に助力せよとの命を発したり。此時よりして、英国公使は蔦人に接する事態なり。翌年「パーカス」鼠城に来り、小森帯刀西郷隆盛に見へ勅王の事を誤り。余此時未だ「パーカス」に英国外務大臣より日本条約締結の権は玉室に居るの意を労賀せる指令の達せしことを知らされども、後に至り之を聞けり。

寺島の自記に精確を欠く点のあることは、石井教授の指摘する如くであるが、その成果はたしかに小さいもでなかった。そしてその成果はオリファントの協力に負うところが極めて大きい。

寺島や五代がはじめてレイヤードと会見したとき、添書を書いたオリファントは、それから8ヶ月ほど経って、寺島・クラレンドン会談を実現させた。レイヤードはラッセル外相の下で次官を勤めていた人だが、オリファントの年少の知己であり、ラッセルとオリファントとの間に、特別な交渉の関係があった。彼はラッセルの庇護の下に政界入りをしたのだから、彼を在日英国公使官の書記官に推したのもラッセルであった。オリファントは東京事件で重傷を負って帰国するという出来事がなければ、オールコックの帰国中代理公使をつとめることになっていた。ラッセルは英属オリファントを密使として外人を派遣して外交上の情報収集に当っていた。寺島がクラレンドン外相と会ったのは、このラッセルが首相の任に住っていた時である。

寺島・クラレンドン会談の行なわれたのは66年の3月20日前後であろう。とすると寺島が始めてレイヤードに会ってから8ヶ月が経過している。寺島が五代や新民の帰国したあともなお英国に滞在していたのを、やりかけた仕事に目を背ける為であったに違いない。8ヶ月の間寺島は何をしていたか。この8ヶ月の間に寺島の提案内容にかなり重大な発展があった。それはこの滞在が実に多のものであったことを示す。オリファントの協力が与えて力があったと思われる。寺島はオリファントを通じて英国外務省に情報を集めたり、また提出したりして、意志を英政府に通ずる努力をつずけていたと考えてよい。その一つの証拠となるのが慶応元年11月10日付け（洋暦1866年12月28日）野村宗七宛の五代の手紙である。この手紙の中で五代は「パーマストンが死んで外相ラッセルが首相となったことを報じ、この交替によって英国の対日政策に変化が生じたことを明かしているのである。オールコックはかねてから、「兵権を示さずしては日本は開かれない」と信じ賀衛国との間パーマストンに進言したが、用いられなかった。ラッセルは活発な性質であり且、外相として日本の内情を熟知していたから、オールコックを信用していたので、パーマストンに代って首相となると直ちに、列国共同して

(1) 石井孝 前掲書（旧版）432頁参照。
(2) 野村宗七 史（中）946―952頁。
日本に軍事的圧力を加えることによって兵庫開港の実現をはかる方針を決め、ロシア、ブラジル、オランダ、フランスに協議をはじめたというのである。「勿論様々な難事は、その職掌の外には、決して不相容事の由候処、幸にして承得申候」を五代は書いている。オリファントを除いてこの情報の出所は考えられない。英外務省とこの情報を流したことが十分考えられるが、いずれにしろこの一例は、オリファントを通じて寺島と英外務省との間に終始間接の接触が保たれていたことを示唆する。

寺島の対英外務省工作の成果の評価はここで問題ではない。それについては、石井孝教授の精細な考証がある。1865年8月23日付で、外相ラッセルは、パークスにたいし、幕府の態度に疑義を表明し、薩長の貿易関係への意欲を高く評価する訓令を発した。ウィンチェスターやラウダーやガワーの通信（その背後に長州の高杉の働きかけがあったことは先に述べた）と相まって寺島の努力が大きい役割を演じたと見てよい。

私は、この8ヶ月間の間に、薩藩内に対外貿易権を聞くという諸レベルの問題提起からはじまった寺島の提案が幕府と外国との間に結ばれた条件を朝廷との条約に結びなおすという国レベルの問題にまで高められているの興味をひかれる。オリファントが寺島の正確な意見を伝えたため、クラレドンに書き送った手紙（1866年3月25日付）には日本は有力な大名は天皇によって、京都に大名の会議が召集されることを望んでいる。その会議には御三家、18の国持大名その他天皇がその助言をうることを望んでいる大名が参加する。そこで天皇の承認した条約に大名が署名をする。もしこの手続きを踏まないで（すなわち貿易から大名を締め出した体制のまま）幕府内に新しい制が開かれるようなことがあれば、内乱はさがたいだろうという趣旨のことが記されていたのである。大名たちは天皇による大名会議召集のため条約諸国の圧力が幕府に加えられるのを希望している。大名たちは貿易から申し出ている形での「開国」体制を真の開国に切り替えることは、英国にも貿易規模の拡大のための計画的な一歩を進めることとして歓迎された。しかし薩摩にとっては、幕府が大名が外国貿易の利益の分かれる与仁を聞くことであるだけでなく、幕府が国家権力を独占する体制に顕著な修正を加えることを意味していた。外圧を利用して、朝廷召集の大名会議を開き、条件を結びなおすという外交上の措置を通じて、政治体制改革の突破口をつくるということは、元治元年9月の御・西郷会談以来、薩摩の側に追求していた政治目標であった。

条約諸国の艦隊の摂海進出を背景にして明総督の会議を開き、幕府と外国の間に結ばれた条約を朝廷とのそれに切り替えられたことが出来れば、日本の中央政府としての幕府の地位が否定される。これによって、諸侯共済の政治の体制がつくられるというが、勝（その背後

(1) 石井孝、前掲書（旧版）432頁。
(2) 石井孝、前掲書、503頁。
には横井小楠がいた。 西郷との間に意見の一致を見た日本支配の構想であった。 西郷が「朝廷より異人処置彼為持侯は幕府はその範囲にてくずれ可申」と言ったのは、元治元年10月8日のことである。 寺島が、はじめから外交上の一つの使命を与えられて英人に赴いたことは、前年に引いたオリフェントのレイヤード宛の添書からも明らかだが、そんですれば、彼が薩摩の政治改革路線として定着していたこの政策について、知らなかったとは考えられない。 寺島は、大任を果して、英国を離れて帰国する船中で、日本の政治体制の改革に関する構想を盛った建議案を起草した（履歴抄）。その内容は勝つ大久保や小楠が構想し、西郷が現実政治の中に生きつとまとめた「共和」の政治の構想と軌を一にするものであった。寺島や五代の活動を留学生たちは人気した。特に寺島はその活動の歴史とするところを学生たちに説えて英国を去った。学生の一人松村淳蔵は、寺島の別れに臨んでの談話を次のように記録している。（薩藩新軍史C[中]904—5頁）

寺島氏帰国際、夕夜晚餐の席にて釈迦に語るには、日本の情事を見るに幕府の衰運を早くうらざるや、今日の攘夷に見込まないし、然し改革をなさされば済まず。仍ては外国力の国と相結び、共の力を借りて国力を伸ばすの外ならん。故に帰国の上は、此意見を当方に勘めて回るところあらんとふとの計画ありし、其の後成行は一々聞かざりしも、後に聞くは英使「パクス」が薩摩に来咪懇意を受けし物語ありしは、果して寺島氏が外国に親誼を結びて一朝有時の助とせんとは言わせしにや、計図せられしことならんと察ぬ。

留学生たちは、体制改革の事業に挺身している先輩の志をついて、その事業を補完する重大な任務が自分たちの肩にかかっていることを否応なく意識させてくれたにちがいない。

一方英国の間でも、この度の「日本からの訪問者たち」が今まで幕府から派遣されてヨーロッパを訪れた使節団といえば体質的に相違したものを持っていることを鋭く感じている。1865年8月28日附の The London and China Telegraph は Our Japanese Visitors と題する記事をかかげて幕府派遣の二つの使節団と薩摩のそれを（この記事はそれを Satsuma Expedition ともいうべきものとよんでいる）との間に大い相違のあることを指摘して、薩藩の使節団と留学生に大きな期待を表明した。要旨を紹介しておく。

幕府から派遣された二度の日本の使節は、西洋世界の興興に関する知識を日本人民の間に弘布することにたいしては非常に寄与するところがなかった。最初の使節は失脚したばかり、消息を聞くかなかった。二回目は、与えられた政治的使命を達成しきなかったとして罰せられた。一方彼等の得た知識は、幕府だけの利益になるように深くしまいこま

(1) 撮影「幕政改革と共和政運動」（増丸書店版「明治維新」所収参照。
(2) 大久保一誠寫西郷隆盛論稿（元治元年10月8日）
(3) 寺島の建議の内容に関しては石井孝、新高義526頁補訳参照。
森 有 礼 研 究

れてはいる。だが、薩摩侯から送られた訪問者たちからは、我々はよいものが期待出来るだろう。薩摩の「遠征隊」の三人の高級メンバーを新納、五代、寺島を指すものであろうともしい報告は、自由で、開明的な薩摩の藩公に好ましい効果をもたらし、すでにその利益が理解されている外国貿易と交通にたいする欲求を一層よめるにちがいない。

だが高い知性をそなえた多数の若い日本人がこの国で教育を受けることからはそれよりももっと偉大な成果が予測される。また彼等の言葉が自由になれば、日本の国内の政治や経済や社会の状態について十分な情報を入手する便宜をうるだろう。それはこの国との将来の国交の上に大きい価値をもつ。数年後の間我々の間で生活したるえで帰国すれば彼等は自分の「経験」を語ることが可能になる。それはもはや旅行者の土産物ではない。我々の生活様式、仕事や習慣・特異点などについて、上すべりした観念以上のものを彼等はたったえるだろう。彼等は数年わたくって、その間でくらしていた国民の偉大さと、高い文明についてのふかく根をおろした確信をもたかえり、それを人々の間になしろげるだろう。それは藩主と臣下との間に、我々にたいする尊敬と信頼をたかめるにちがいない。

これにもまさって望まれるのは、彼等がキリスト教の諸原則を学び、また社会生活と国の政策にたいしておおよばしている、その好ましい影響をも観察する機会をもつことである。それほど最も熱心な宣教師の働きも超えた、ふかくかつ永続的な効果をもつことになるであろう……

寺島は、1866年5月13日（慶応2年3月23日）に村橋直衛およびライル・ホームの弟と共に帰国の途にいた。その帰藩は、慶応2年5月24日（洋暦7月6日）で、新任英国公使パークスの鹿児島訪問の直前に当たった。彼はただちにはげしい国内政治の渦の中にまきこまれていった。

五代と新納はその5ヶ月前に帰国していた。薩摩の遠征隊の「三人の高級メンバー」の帰国によって、薩摩の藩政改革の機運は大いに促進された。我々は模並小楠が在米二月に送った手紙の中に薩藩の「藩風一変」についての次のような証言をよむことが出来る。手紙の日附は、慶応2年12月7日である。

藩州は自国取り壊め、国論一定いたし弥いて富国強兵に取り懸け、西洋器械も大抵取り寄せ、洋人も四五一五呼び寄せ操練等甚盛大に相成候。家中若者共は、大抵洋服裁縫いたし候。是故国中旅人は厳禁之処鹿子島内は勿論、何方もさし許仮赦、諸国商人も通々入込、城下などは日々に至はび候。国論大にうち替り、智術計策にて行われざる事も合点いたし、何も誠心平直之处に一統帰候由。
第二章 薩摩留学生とトマス・レーグ・ハリス

(1) 森有礼における新しい学問への志向

英国に派遣された薩摩の学生たちの留学目的は、多かれ少なかれ軍事に直接結びついた「技術学」であった。しかし英国に到着して直ちに近代国家の「実体」にふれてみて、学生達は彼等の計画が如何に空疎なものであるかを知らされた。この間の消息を伝えて、「薩摩海軍史」は「留学学生は各科の学術（軍事的諸学科）を研究する目的をもって派遣されしといえども、ヨーロッパに着し西洋文明の様子を見るに及んでその意向は次第に揺れ、おのおのの新たに志す方面に目的を変うるに至った」と記している（同書「中」943頁）。それぞれに日本が直面している問題に対処するために、より緊要な、あるいはより根本的な学問と信ずるものに転向したのである。

たとえばはげしい攘夷思想の持続であった吉田清成にたいして、英国社会の与えた衝撃は一時にして彼を富国論者たらした。その結果彼はその志望を一変して機械学を志したのである。五代は野村宗七に宛て、慶応元年11月11日附の手紙の中で、彼の転向について、次のようになされている。

……愛元書生中にも迫々攘夷相開げ懸論全し、何れ富国強兵ならでは国家難保と云ひ、各富国強兵の譜論多し、顕る攘夷家将兵家と云ふ巨量なる吉田（清成）如きも御国強兵足の折は、速に海軍講学して軍艦大砲を求めて征夷するの譜論なりが、英著の上は、暫く内に譜論一変して富国論となり、富国は諸器械の道不相開しては不相成と機械学をとるの相談聞きたき。

森の場合は、変化はある意味で一層意識的であった。それは内面に及んだ。彼は「西洋文明」の根拠に、東洋とは異質の人間観、倫理観が横たわっていることをかなり早い時期に予感しはじめた。慶応元年9月1日附の兄宛の一箇は、これを示唆している。

……何れ人間一様に宇宙遊覧されずば、十分の大業遂げ難しと懸念仕居申候。私にも了想像を頓とえ不申候得共、此越渡海以来魂鬼大いに変化して自分ながら驚く位に御座候。私に於て第一学問する所、人物を研究するにありと考へ終きを用ひ汚魂を洗濯仕居申候。

この「人物研究」の意味するところを、正確に捉えることは難しい。しかし、着英後の3ヶ月の生活を通して、森は「魂鬼の大いなる変化」を経験した。そしてこの変化に伴って、第一に学ぶべき「学」——もっとも根本の学、あるいは一切の学問の根拠をなす学を、その「人物の研究」であることに思い到っているのである。これは森が全く新たに「人間」とは何かを問い直すことを要求される状況におかれたことを示す。道徳における東洋の優越の素朴な確信が、ゆらいはじめているのである。この新しい根本の学への志向は、汚魂洗濯の意
森有礼研究

森は、この意味での根本学は別の、末の技学から区別される意味での「本の学」の要求があった。彼は、大幅に人間を外在一を覚え、近代学に興味者数多い学者が、皆その末の技学に走りて本を知らずという。

とする。彼は、学術の要は四書五経に止るとところからその上に出る学問に志すべきで、その種の世界の歴史と、さらに東西法制の比較研究にしたがうべきであると考える。彼は「法制の学」こそ国際の学であり、末の技学にたいする「本の学」であると考えた。それが国際の学とされるのは、国のあり方を根本において決定するのは、法律制度であるとする思想から来する。彼にこの思想を植えつけたのは、英国の社会である。我々は彼が滞在した1860年代が、まさに「ペンダミズムあるいは、立法を通じての（紛争主義的）改革の時代」であったと、ことを記憶する必要がある。だがこの問題の考察は他の増に読む外ない。ここでは森に自己を新にする学と共に国際社会を根本から新にする学問への要詔のあったことを示す、森自身のことばを引用しておく。

法は国の大本、法不明にしては治国安民の事決して出来難し、たまたま日本伝来叶ひし法は立屈候（共）多く是苛酷の法にして人情に違し、無きに勝るの法さきにしもあらず。外国の法と雖又同じ。併私愛に着せより以来已に一層にみち、共間耳目に触る所の英の法に於て骨で不目の法なく、我国の法と比較を為せば反て我が法は不理解人情に違きのみにして僅に懲罰に堪へ不申膚、所の弊法に於て皆に改良を許し得。故に今若し元之に応じ、今より万国の法歴を御学得あり日本伝来の言法と折衰さされ、新に公平にして不抜の大制度を御築立有之候得ば、天下万世に至りも誰か共沢を蒙らざらん。併言に対して「万国の法制」の比較研究をすすめた手紙の中で、森は米国の制度が「わづか200年来的目新にこそとももすくれたもの」であるといい、それにつづいて「仏国の人制もすぐ


注  この手稿の中で、右の引用につついて森は、この種の學問に従事するものは如何にその學の奥底を究めることができ、かつこれによって国家に寄与したとしても、学者によって今日格段の栄誉を得ることは不可能である。しかし、学者としては名誉を求めるところが重きをつぐと人間として生を受けた者に報われる所であるという信念を抱いている。この時期の森は兄とともに学者として生きる意志をもっていたことを窺わせる。明治9年1月有司公使として赴任した森が、保有師で孝章を共学した際、学に欧州において学びた「学術」を問われてこれに答えた彼の言葉は、この時点で一つの信詣となる。それは次のようなものであった。「学学の現状からず、故に何の学術をも修め得ず。これ現に閣下の親授する如く公務のため心身を役せらるる所以なり。」
れ候由」とのべている。（1866年7月26日兄弟手稿）この米国の政治体制については、同年6月3日附の手稿で更に詳細にその勝れている所を明らかにしている。

先に引いた英米の国法に関する発言を思合せると、英米の一年は、森の中に合理主義、ヒューマニズム及びデモクラシを、西洋文明の美点と認めの観点を育てていることに気付くのである。そして、領土的野心の有無がこれに加わって、アメリカへの好感とロシアへの不信が動かないものとなったと考えられる。

米国は今間国を去ること数200年、国家の政大小もなく、悉く万民と謀り、公平正大の政事をなす……西洋人皆云うに、後世起るとも米なりと、殊に英人は米人を詐み候ほどこれ亦同説なり。

しかも米国には領土的野心がない。ここから森に「ともに親交を結び有無を通ずはこの国なり」と結論する。これとまじしく対比的に森の反覆と警戒の対象となったのがロシアであった。

我国人多く露国を指して義団という。これ何ぞ汚るの甚しき。すなわちトルコ奪職の企て、先年ポーランド国を取りし事跡。またスイスシーランド国の速奪を奪略せし事跡。ちかくは対馬の件、不義不法の傷き数えがたし。そのうえ露の国政皆国論にあらず。一切帝より出ず。故に不公の政多し。帝明かれば治国、暗れば国乱る。みなその国人帝を以て神とす。何ぞ愚かた不義の甚だしきや。（1866年6月3日兄弟手稿）

この手紙を書いたとき、あるいは彼はすでに実地にロシアを見る計画を立てていたかもしれない。いつれもせよ本書にロシア旅行に出る直前に書かれた。慶応2年7月26日附の手紙は、森をロシア旅行に赴かせた動機の一端を示唆している。

その一つはこの世界の随国を真にその目で見る要求であったろう。この「世界の邪魔物」はまた「西洋での田舎」であった。この国について法の立て様を見る要求もあったかもしれないと万国の法制の学得」と「我国制度を暗知すること」と、その一を欠いても立法を通ずる国家の改良は不可能だというのが20才になった森が抱いた確信であった。

（註）我国の制度早く暗知せばれば、各国の制度と比較出来がたし。法の立場はその国の呪に従い立てざれば、反って書になるべし。故に我を暗知して外を知り、その両法を折衷して風土に従いたる制定にして立てば全く公平にしてその節を得んか（1866年7月26日附書稿）

彼は実地にロシアの土地を踏んでみて、英国において形づくられていたロシアのイノーチが、事毎に裏付けられるのを感じた。しかもその後進性の中に、彼は東洋に通ずるものを見た。たとえば、

この国は政法同ならず単にとつ竜り、米英等と同目的をなず。はじめこの
国に入るや、国王の大禁を周りに、政事の談論を切に禁ずと、その他諸多あり、記しがたし、この国では事々物々皆帝の意にかまは。人民また帝を尊ぶこと神仏の知く殆ど和漢の風習とひとし、国の開けざること知るべし（『航魯紀行』248頁）

森が松村と共にロンドンを出発したのだが、慶応2年といっても実は洋暦の、1866年8月1日で「我國に帰る心地」でロンドンに帰着したのが同年9月10日である。航魯紀行はこの40日を及ぼ旅行の記録である。我々はこの紀行の中に、半に40日に及ぼ旅行の記録を読むだけでなく、森の彼留在の第一期の結論をよみとることができる。就中、彼が英国をはなれる前ニューキャッスルで過した数日間の「経験」中にそれが圧縮されて表出されている。ニューキャッスルで森は聴聞院、病院を視察した。そこで手話点字による教育が行われ、更に生業を得しめる為の訓練がおこなわれているのを見る。この施設が与えた感動を森は、「航魯紀行」の中に、次のようにかき記した。

鳴喚喚なるかな、西洋の開創なること。かかる聴聞盲等の人をも随に捨てず、よく人間の事を教へ之へ生活を安書保たしむるは盛なりとゆべし。余の事は随って知るべし。

初めわれ此等の事を日本において聞しかど靶て信ぜさりき。今現然これを観て感驚殆んど記し難し。

人間が人間として尊重されるエトスが、森において、やがて一国の文明と不文明を分つ基準となっているのである。森はしかし、このエトスを支えるものが何であるかの問題に、まだ打ち当てていない。キリスト教は、故国にいたときと同じように邪宗門であることをやめていない。少なくも彼は「無心」と称してそれに背を向けている。この心の状況は、同じくニューキャッスルの経験について語る彼のことばの中に、まざまざと示されている。彼の乗船が荷積の関係で五六日出帆があのたため数日を過すことになった、ニューキャッスルの町の上の宿屋で、彼は女主人の、遠い異国から来た旅人にたいする親切にうたれる。

亭主は女にしてMillieと名をとび形は玉縁位と見へたり、此女は持病あって容体甚だ難済に見へたりけれども、倶分送者にして朝夕家事をとるへ、客へ迎へて共養をして今日のくらしとす。

ソーシテ非常に親切丁寧の天性なり。感動するに余りあれり。且此は一日れされわれに話している。旅の空では物事皆不自由勝なり、況や今夜遠海を過て来られし御方が更なり。ゆへに少しでも不満足の事あらは必ずお辞して知らせよ。力の及ぶ丈は尽すべき。それ世の中人間の交は互に助け合て人も己も隔なくするが本上書の此人周歩を他物と異り斯る数名を生し物し御心などと、真情を明かしてかたされり。かくの如き正直の人物然してまた一方には耶禪教を信じし鬼神の説をとく事甚だ切也。過へ日曜日などには

(1) 前掲書、245頁 (2) 前掲書、244頁
是非同伴して お寺に行かんと誘引百方を以ず。然るに無心のわれわれたらこれを辞するにまた骨を折れり。

この女亭主の説くところは 明かにキリスト教の信仰に支えられた薫の人間のモラルである。それは同じく人間であるという以外に、何ら特別のきつなでつながってない人間にたいして、愛の行為を義務づけている。その前提には、凡ての人間にたいして造物者であり主である神がある。森はこの理を説く女亭主のことばを日記に書きつけてゐるけれども、このモラルの根底をなすものは、彼の理解を越えていた。彼は女亭主の親切を彼の女の天性に帰する。そしてこの美しい天性をそなえている彼の女が、「一方には耶蘇教を信じし鬼神の説をとくこと末だ切」であることをいぶかっているのである。

（2）薩摩の留学生とコオレンス・オリファント

慶応元年の薩藩留学生団のメンバーは、その一人であった松村淳蔵の「洋行談」によると次の19名である。1から15までが本来の留学生で、16から18は英国新聞紙のいわゆる senior members, 19は通訳である。

<table>
<thead>
<tr>
<th>返</th>
<th>名</th>
<th>実名</th>
<th>役名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>上野 良太郎</td>
<td>28歳</td>
<td>明成所首大目付 学頭</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>杉浦 弘蔵</td>
<td>23歳</td>
<td>当番頭</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>永井 五郎介</td>
<td>21歳</td>
<td>明成所句読師 蕨学者</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>田井 孝平</td>
<td>21歳</td>
<td>明成所訓導官英学にて</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>沢井 鉄馬</td>
<td>19歳</td>
<td>有礼</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>松村 淳蔵</td>
<td>24歳</td>
<td>奥御小姓。開成所へ入塾</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>松元 誠一</td>
<td>31歳</td>
<td>開成所諸生</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>塩田 頼之丞</td>
<td>19歳</td>
<td>藩頭</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>澤水 兼次郎</td>
<td>15歳</td>
<td>藩頭</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>三笠 政之助</td>
<td>21歳</td>
<td>当番頭</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>塩橋 直輔</td>
<td>23歳</td>
<td>藩頭</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>岩尾 虎之介</td>
<td>23歳</td>
<td>藩頭</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>浅倉 省吾</td>
<td>23歳</td>
<td>開成所諸生</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>吉野 清左衛門</td>
<td>25歳</td>
<td>藩頭</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* 薩摩藩史（中）696—899頁。順序は必要にしたがって変更した。
森 有 礼 研 究

15 長 沢 鼎 13才（橋 永 彦 助）関 成 所 英学
16 石 垣 銘之助（新 納 刑 部）大日付御軍役日勤対照
17 出 水 泉 詠（松 木 弘 関）御船奉行 教育掛
御船奉行番組寺院
18 閣 研 詠（五代才助 友厚）蒸気船看護観察
19 高 木 政 次（堀 壮次郎）英 通 弁 場

年少のためアバディーン（スコットランド）のグラバーの家に預けられて、グラマースクルに入った13才の長澤鼎をのぞいた14人が、ロンドン大学のユニバーシティカレッジに入学した。同校の1866—67年度のカレンダーを見ると、16名の日本人学生の名が見える。その中二人は長州藩の留学生である。その一人 Nomura (1863—64) は文久3年すなわち1863年に伊藤博文、井上馨、山尾庸三、遠藤謙助と共に渡英した野村弥吉すなわちのもの井上勝である。伊藤と井上は故国の急を聞いて急遂帰国し遠藤は学業不良で帰国、山尾は当時スコットランド造船局で研究中であった。Minami は南貞助で、彼と一緒に渡英した山崎小三郎は空しくロンドンで病死したことが伊藤博文と高杉晋作の手紙に見えてき。南は高杉晋作の義弟で、のち、ハリスの従となって薩藩留學生たちと一種の同志関係を結ぶことになる。

（注）伊藤博文伝上（280頁—284頁）にこの2通の手紙が引用されている。この手紙は英国渡英を企てた高杉が、伊藤春柳を伴って長崎に渡った際、高杉から木戸井上に、また伊藤から井上に向って書き送ったもの、ともに慶応2年3月28日付である。高杉の書簡に左の如き一節がある。

隆に家老新納刑部、五代才助先日英より帰り、日々外国の事に手を附す様子に御座候。既に昨夜もメリーケに五人書生を遣せしも、金も余裕ある様子、不敬顧。是我邦所不及。○倫師より書簡到達、遠藤は今年正月頃出立し此節帰国の様子なり。ここに可驚一事あり、義弟（南貞助）同行山崎生（山崎小三郎）倫師にて病死す。是、金などもなく寒食より病を起し返り様子なり。可悲可懸。是亦国家恥辱の一端なり。

と嘆きながらも、このようにはじめて西洋に骨を埋めた「名臣」あるは、国家隆盛の兆であると誇っている。ここに言及されている慶応2年に米国に送られた5人の「書生」は、仁礼、江夏、種子島、吉原、湯池の5人で、モンソンの学校(Monson Academy)に入った。この人達はのも、ハリスの新生社に入ることになる。

この2人をのぞく14人が薩摩の留学生である。すべて1865年—66年次の入学生である。その姓を原経りのまま写す次のようにある。比定のほとんど難しいものもあるが、私の推定を前掲リストの順序に合わせて記しておく。

(6)と(7)のどちらが松村で、どちらが松元であるかは実は決まらない。特に10から13はこのローマ綴から日本名を想定することは不可能という外ならない。

私は日本人名の比の異様なローマ字の綴りをしていた、別々の歴史をもって発達した二つの異質の文化が、はじめて接触した際、その相互理解に、如何に今日では想像もつかない困難を伴っていたかをまざまざと見せられる思いがする（実は本質的には今日も変わっていないのかもしれないけれども。）

ニューヨーキャリエの1866年―67年次のカレンダーの日本人学生として名ののっているのは、長州の2名の外は、Soogivoora, Nagai, Noda, Sawai, Matsumulaの5名だけになっている。故国の動乱のため学習がつづかなくなって約半数が帰国したためである。慶応2年夏までに町田民部一人を残して他国に帰る保しさした。もっとも長沢はアパディーンにあり、浅倉、吉野は、フランスに残っていた。

藤摩の留学生たちの訪れた変化は、半数ばかりの仲間が帰国を余儀なくされたということだけではなかった。この大きな変化をもたらす原因となったのは、1866年夏に、永井五十五介（吉田清成）と野田仲平（鶴之助信）がオリオントと共にアメリカにゆき、トーマス・レーグ・ハリスに会ったことである。彼等は、当時ニューヨーキ州アメニに入った新生社のコロニーの生活にふれ、一際でハリスに心酔して帰った。そして彼等の報告は他の学生たちについての印象を与えた。木村らによると森は、「彼等の言によって、ハリスを信じた」という。この「信じ」の内容は何であったかはなお吟味を要するが、この二人のアメリカ訪問が、留学生たちの進路を大きく変えるきっかけとなったことはない。ある意味でそれは留学生たちの運命を狂わせた、少くとも永井や杉浦（出山義成）にはそう感じる日がくる。

沼井（森）や野田はそう感じなかったかもしれない。しかし、あれば、それだからこそ、彼等にはハリスの許での経験と、そこで身につけたものがあるとあくまで彼等のうちに生きつづけ深い痕跡をのこすことになった。殊に森の場合、彼の思想や生き方に、これは決定的な影響をもった。木村もそう見ており、私はこの見方は正しいと考える。しかしながらその影響は、どのような点に認められるのか。私は本稿ではハリスの思想やその事業についての立ち入った考察はさけたい。その用意が十分でないことも一つの理由だが、それよりも余り超自然的な奇異な要素をもつハリスの教義の詳細をのべることは必ずしも当時の日本人留学生のハリスへの傾倒を説明するのに役立つみたい、却ってそれを妨げるおそれがあるからである。

ただハリスのつくっていたコミュニティあるいは、コロニイ——それは将来実現されるべき理想社会のモデルであると共にその実現のための戦いの拠点でもあった——について一言しておくことは必要であろう。日本人たちは、ハリスのこのコロニイを見ることによって、彼とその教えを信じたと考えられるからである。

*「故森子爵の適事に付て」（「国家教育」第22号、29頁）
たしかに、ハリスとの出会いは決して仕合せなものでなかった。前にも述べたように、ロンドン大学での最初の学年が終わるころになると、留学生たちにもヨーロッパの文明の輪郭がようやく把握され、森についていれば、その文明の根拠にあるものをさぐることが、彼自身の問題となりはじめていた。まさにこの時期に、吉田と鯨島を通じて彼等はハリスの存在を知った。この時から彼等とロバレンス オリファントとの間に新しいふかい交渉が生まれた。それまで英国の社会や西洋文明への道案内の役をつとめていたオリファントは、この時点からハリスの開示する新世界的道案内となったのである。オリファントにとって、ヨーロッパ世界は救済しかたく、陥落した旧世界と旧文明で、オリファントはこれからその脱出に全存在を賭けていた。そして留学生たちはこのヨーロッパからの脱出の道連れに選ばれた。不幸はこの事実のうちにあった。彼等はオーサドックスのキリスト教や西洋文明の諸原則を確かにつきとめる前にその批判を教えられることになった。キリスト教の諸原則が如何に英国の社会生活の中に生きているかを見極める前に、ハリスの理解にしたがって、独自のキリスト教の原理にてそして、キリスト教や、キリスト教社会や文明にきびしい批判を加えることを学んだのである。我々はそのあらわれを、留学生たちがモンプランスで用いて政府に提出した意見書の中に見ることが出来るであろう。それはとてもかくとして、オリファントは、ハリスの教えと事実の中に、新しい世界と文明の絞りを見ていた。アメリカはこの意味で、約束の地であったし、またこの事実の中で日本は小さくない役割を受け持つはずであった。オリファントはエディンバラの友人ブラックスウィッド（the Blackwood Magazineの発行者）に宛ててこう書き送っている。

人類の最高の希望は米国の——そして日本の将来にかかっていると私は信じています。この二つはひどく異質のものですけれども、ここでの革命は政治的でなく道義的なものです。私がそれを敢てするすれば、私が語りたいと考えるのは、ただこれ（道義の革命）についてです。私は今私は真実と感じた真実であると知っていることしか書くことが出来ないのですが、それは世界がそう信じているものとはおそらくすかけ離れたものです。

ロバレンス・オリファントは日本の英国公使館に書記生として赴任早々東亜海事事件（文久元年5月）で永戸波士の襲撃にあい、重傷を負って帰国し外交官たることを断念し、1865年下院議員選出された。もっともこれは彼の多年的宿願であった。彼は以前から、文筆活動によって名声を得ており、またジョン・ラッセルはじめ政界に有力な背景をもており、その才能と、国内及び国際政治の知識によって政治家としての将来を期待されていた。またその才気と人間的魅力度によって社会界の寵児であった。しかも彼はその成功と名声の只中にあ

* Margaret Oliphant, Memoir of the Life of Laurence Oliphant and of Alice Oliphant his Wife, 1891, vol. II p. 63
って、次第に政治への絶望を深めていった。それは彼が社会と人間のシーリアスな問題の解決に政治が役立っているない。否、解決に責任をもとうとさえしないと感じたためであった。

オリファントの伝記を書いた彼の従姉妹のマーガレット・オリファントは、当時のオリファントの内生について、こう語っている。

手をふるわすべてのことに成功を収めていると見える人間が、実はその内面においてそれほどよい満足感を感じ現在の生活が堪えたいものになり、それに慣っていたという

ことは、もっとも理解に困難なことであった。

この外目に何もとも舞い高い、しかも自分自身には堪えがたい空虚な生活の中に立ちすくんでいたオリファントの前、T・L・ハリスが出現したのである。オリファントはこの人の中に、真実の「人生を生きる」道を指し示してくれる師を見出したと信じたのである。

彼はすべてを捨ててこの師に従う決意を堅めた。それは1865年中のことであった。彼がはじめてハリスを見つけたのは、1860年のことだから、ハリスに従学する決意を一歩にしてつくられたものではない。

その背景には、彼の前半生の目的であった政治の現実と、彼が政治に長い間期待していたものとの間にある深い違いがあったことに関係があったにちがいない。彼が最後に議会を捨てて決心を堅めたのは、1867年の選挙法改正をめぐるディズレリーとグラッドストンとの政治的賭け合いが与って力があったとも伝えられている。

（注）グラッドストンの提案した進歩的な選挙法改正案が議会で否決されたため、自由党内閣が倒れ（1866年）ダービー卿を首相とする保守党内閣が成立した。ディズレリーは改革の阻止すべきからざることを知って、やむなくグラッドストン案そのままの改正案と議会に提出した。今度はグラッドストンがこれに反対し、成立を阻止しようとした。オリファントは少数の党の同志と共に、ディズレリーの改革案に賛成票を投じたが、彼はグラッドストンの政治的賭け引きに劣らず、ディズレリーのそれにふかい誠意と絶望を感じたのである。Margaret Oliphant; Memoir II, p.11f, 15f;又Trevelyan; Illustrated History of England, 1956 p.657ff, 又Schneider-Lawton, p.69ff参照。

ハリスの教は単に個人の救いだけを問題にしていなかった。オリファントは社会が当面している諸問題が真に解決される道がハリスの教と運動の中に用意されていると感じたにちがない。このスピリチュアリストはまた、ラディカルな社会主義者であり、そのコロニーは一種の共産体であった。スピリチュアリズムはある意味でそれ自体支える力であり、人間と社会が直面しているもっとも現実的な問題の解決のための要請であったといってよい。オリファントは、ハリスを信じて自己のすべてをその事業に賭けたのである。留学生がオリファントに会ったのは彼が名声と成功の賭けにたからから、その世界からの脱出の意志を堅めつつあった時期に当っていた。1866年夏オリファントが、吉田と飯島を伴って米国にハリスを訪ねたのは、実はハリスのコロニーに入る許を得るためであった。この時には彼の切願にも拘らずハリスに許認可を求めるためであった。
リスはオリファントを拒んだ。英国上流社会の養成と放任と怠惰の生活の中で身についたもののが如何に脱却に困難を知っていたからである。オリファントは実行によって過去の一術と余別意志の堅さを実証しなければならなかった。ハリスは彼に議会内でのその発言を禁じた。彼は、オリファントに「議会における失敗」を要求したのである。これがオリファントを新生社に受け入れるための条件であった。新生社には更に、肉体の上に加えられるきびしい艱苦の生活が待っていた。彼はその生活をどうこで生きなければならなかったのである。オリファントは第一の試練に堪えた。この選択は、留学生たちを驚かせた。小楠が二階にあった手紙の中でいうように、それが彼等のハリスへの傾斜を決定的にした。小楠の文章をもう一度引くと、

フラハント再び云、私は役事相戦（下院の長を勤めたりし由）エル・ハリスに随従し修行せんと欲すとの嘘を有、薩の両人と謳驚き送にフリハントと共にアメリカに渡り、

エル・ハリスに従学せり

とする。小楠はこれにつづいて、ハリスの「耐忍」をのべて「エル・ハリスは退隠村居門人30人余有。相共に耕して講学せり。其教たるや書を読むを主とせず、論説を賛ず、事ら良心を磨き私心を去る実行を主とし、日夜修行間断なし」という。これはハリスのコロニーの生活の輪廻を略々正確に伝えていってよい。ハリスのコロニーは、その中で人間が再生をとげる組織であると共に、神において再生成兄弟が、その任務（Use）に服しつつ、社会の再生のために働く場点でもあった。ハリスのコロニーのメンバーはコロニーをthe Useとよんだ。そこでは、きびしい労働とハリスにたいする絶対的順の生活が課せられる。それを通じて、自然的自己と欲望の否定が行き詰まる。きびしい労働は、「肉体を十字架につける」行為であり、それは智慧と神における新生にいたる道であった。神を文字通りに「主」としてこれにしたがう生が、人間を真の兄弟にする。地上にこの「新生の兄弟たち」の国を築く、これが新生社The Brotherhood of the New Lifeの追求していた目的であった。

（註） "The Use" は神が地上に建設しつつある「彼」の「新なる王国」である、あるいはそのvital germであると新生社のメンバーは信じていた。

新生社にたいする the Use という呼称は、明らかにスプエンボルグの用語をかりたものである。次の項目は、スプエンボルグの「天界と地獄」からのものだが、新生社のコロニーは、スプエンボルグの「天界」を地上の現実にする組織であったといってよいであろう。

天界は単一の人として、したがって一個の人として、主によって支配されている。そこにある者は、「用」（Use）に従って結ばれており、従って共通の善のために用を遂げないものは、異質ものとして、天界から放逐される。用を遂げるとは、共通の善のた

* Oliphant to Cowper, 6th Nov, 1868.
めに他の者に喜ばれることを意志することであるが、しかし共通の善のためでなく、自己のために他の者よりこぼされることを意志することは「用を遂げる」ことではない。後者は、自己を何者にもまき散って愛する類の者であるが、前者は主を何ものにもまき散って愛する類のものである。ここから、天下にある者が一個の人として行動することが生まれており、この事は彼らは自身からなさずに、主からなしているのである。なぜなら、彼らは主を唯一の者、あらゆるもの源泉と仰ぎ、主の王国を、その善が求められねばならない全的なものとして目指すからである。

（島田四郎氏説による。1,2ヶ所字句を変えさせて頂いた。お宥し頂きたい。）

この「用」の思想の前提には、文字通りに解せられた「人類一体」の思想がある。人類社会が一観の有機体として遂えられるのである。ハリスにおいては、人類社会の有機的連帯性がより具象的に、宇宙を貫く「一大人体の観念」において遂えられるのである。ここには、ハリスの門から出た新井英遜（後述）が、それについて説くところを引用して、ハリスの教義の一班を窺うことになる。

宇宙の宇宙を貫通して、無量に織り立ちたる一大人体あり。我等この地球にあるものも——現状の歴史あるに拘らず、——我が先天的程度において素より各々その分子たり。故に、我等は、新生命に由りて、この大人の体制において統一せらるるに及んで始めて人格の完全を得べし。

それば、我等の中に一人邪念を懐き、暴行を為すあれば、宇宙の大人は直接間接の点からすと離も、これが為に其の程度において栄耀を欠くに至ると。而して私が主キリストは常に直接に之を感じらる。これキリストは宇宙の被造人と異り必ず通貫して面して超越する所なり。

人類社会の連帯性は、自然的事実でなく、キリストを信ずるところになじめて回復される事態であり、コロニイはその回復の組織であり、一つの「小世界」であり、スピリチュアリズムは、これの体現（embodiment）の方法であった。

新生社のメンバーとなったものは、その旧名に捨てて社名名 the Use name を与えられた。旧い「我」をふり捨てることにつながるものであろう。はげしい労働は自然的自己を否定する行であるとともに、「用」の遂行であった。それにたいして、報酬はない。それはただに「社会」 Community のためである。したがって、必要なものは、その働きと無関係に社会から得るのである。社中では、「私のもの」はない。それは、一種の共産体をなしていた。

（註）新生社のメンバーは、ハリスをもっぱら Faithful という社中名でよかった。オリファントは Woodbine（忍冬）である。彼はクーバーの "Mr. Olyphant" という呼びかけに拝聴して、"オリ

* スウェデンボルグ、「天界と地獄」第8章63—64
 фаントはもう死にました。生きているのは、小さい愛すべき Woodbine です」と述べている（1868年4月3日附書簡）

鰤島と吉田を一遍でハリスに傾倒させた秘密を解く最大のかぎは、the Use によられていたハリスのコロニイの生活にあった。彼等はそれを見ることによって ハリスの教が真実であることを「信じた」のであり、また彼等の「言によって、森もハリスを信じた」のである。

我々はオリンピア・オリファントの手紙によって、ハリスのコロニイの生活にふれた日本人をもっともよく打たけたものは、そこを領している愛の気（Sphere）と労働の生活であったことを知ることができる。オリファントは日本人の心の「開いていること」が、心の「閉じている」一般の西洋人が感じることのできない精妙の「気」をいちはやく感じ取り受けとめることが可能にするのだと解釈しているが、コロニイの生活を支える「用」の思想そのものが、日本の武士たちにとって、受け入れやすくもあり、又強く訴える力をもっていたことも忘れられてはならないだろう。

吉田と鰤島は夏休み一杯を、アメニヤに過ごしたと思われる。その間に彼等はハリスの今日のキリスト教についての仮借のない批判をきいた。又日本の大いに厳しい禁教政策も話題にのぼった。さらに日本の風俗習慣と共に、当然日本の現状が政情が問題になったであろう。こうして二人のアメニヤ滞在が機縁となって、ハリスの日本にたいする積極的実際的関心が生れ、そこで具体的な「日本の問題」が成立した。藤原の留学生とハリスとの関係が、ハリスの宗教的であると同時に極めて実際的、政治的であってある日本への関心のふかさみの中で、深められていったことは留意されなければならない。

鰤島や吉田が一向にしてハリスを信じたのは、彼のなかにまじしく生ける孔夫子を見たものと信じたのもの理由の一つであったろう。だが、それ以上に、彼等を強くとらえたものは、ハリスの教の中に、「Only protection for Japan against the foreigners」を見たと信じたからである。外国に立ちむかうために日本は一つにならねばならない。それを可能にするものは、愛と協同の力 the power of love and of co-operation である。そして彼等は、この二つのものの具現をハリスのコロニイに見たのである。それを見ることによって彼等はハリスを信じた。そしてこの感動がロンドンに帰った二人から他の留学生たちに伝えられて、彼等もまたハリスの徒となったのである。

(3) 藤原の留学生とトマス・レーグ・ハリスとの出会い。

オリファントと共にハリスのコロニイを訪れ、ハリスに心酔して帰った鰤島と吉田の報告は、留学生たちの間に、ハリスにたいする深甚の関心を生んだ。海門山人は、彼等がはじめ

(1) 木村医「森先生伝」30頁
(2) Oliphant to Cowper, 29th Sept. (1867)
(3) Oliphant to Mrs Cowper 13th June (1867)
てハリスを知り、ハリスの従となった経緯を次のように述べている。

翌年、慶應3年、西郷1868年に夏休業を利用し、見聞を広めようとしたが、森及び松村淳藤は、大いに渡り駄に遊び、セントペテルスブルグに至り、一ヶ月にして帰り、此時蛟島、寺島（吉田の誤り）両人はオリファントと伴ひ、米国に出発。船中談義徳宗教の事に及ぶ。両人孔府子を宗とする謡を聞く。オリファント曰く、孔府子既に去って亡し、只其遺書あるのみ。今日宛然生孔府子あり、ハリス先生といふ。米のニューヨーク州在り、子等を見んと欲せば、予之を紹介せんと。両人大いに喜び、米に着くに及び行にて之を見たり。二人帰りて之を森に語る。森等亦た、之を見んことを願へり。翌年、慶應3年、仏国巴黎大博覧会あり、ハリス米より行にて之を見る。帰途英に遊び倫敦に至る。森等由てオリファントの所謂生孔府子を見に得たり。彼等其徒弟となり、耶蘇の門に入り、アーメンの声響する熱心なりき。

この急速な傾倒は多かれ少なかれ留学生の全部に見られたことであった。オリファントは、この夏休みの訪米以前には、おそらくハリスについては何も語ったことがなかったであろう。しかし二人の仲間が、直接ハリスにふれたことがきっかけとなって、留学生たちの間にハリスへのつよい関心が生れたのを見ると、オリファントは、積極的にその機会を捉えた。かくして、オリファントと留学生の間に、新しい関係が生れた。留学生はハリス教の求道者となった。そして、オリファントはその求道における彼等の指導者であった。

こうして1867年春、留学生たちは、十分な準備をもってハリスを英国に迎えた。ハリスの英国滞在は、自著出版の用件もあって、かなり長く、9月頃までに英国に止まっていた。その間留学生たちは、熱心にその教をうけたのみではなかった。彼等は、後にのべるように、薩摩藩の使節、岩下方平やその随員たちを彼に引き合せている。松村もその「洋行談」の中で、ハリスが、英国に来たとき、岩下や野村市来に面談したことをのべている。その面談の内容にふれていないが、それは、蛟島吉田がはじめて米国にハリスを訪ねたときに、ハリスがキリスト教について二人に語ったことと、関係があったことを示唆している。松村の「洋行談」はいう。

蛟島吉田の両氏は「ハリス」と面会して英国に帰り来たり、時に同氏の談に日本は耶蘇を排斥し、同宗の弘布を好まざるに似たり。成程今日の耶蘇教は乱れて、正しき教とは言われず、之を容れて国信を乱すは不可なりと云々と語られしより、後「ロンドン」府に来られ岩下、市来、野村の諸氏にも面談させられたり。頼みとあれば日本にても行きたいとの望ありとしも聞けり。同宗弘布の下心もありしらん。

極めて簡単な記事だが、ハリスに日本行きの意志があり、そのことにふれて岩下とハリスの間に会談がおこなわれたことが推定されるのである。松村はハリスに「宗教弘布の下心」があったのであろうとのべているが、その宗教弘布が単なる宗教の問題でなかったことを彼
も亦知っていたはずである。

木村は「ハリス氏は日本の国風を愛し、その鶴鳴等に会するや、日本の風俗習慣を開き、かつ、現今のキリスト教に浸染せざるは日本及びアフリカの某州あるのみ、日本も亦今日において、その侵入を防ぐの計を講ずるべからざるを説いた」と述べている。

ここに語られているのは、キリスト教の日本侵入防止の計であるが、しかし実際に留学生たちが、ハリス、オリファントと真剣に討議を重ねた主題は、まず日本を守る問題であり、それとの関連において神による人間の新生についてのハリスの教が追求されたのである。ハリスの教義においては、信仰は単に個人の内生にかかわる問題ではない。それは現実の社会と世界のあり方を決する力でなければならなかった。ハリスが日本行きを希望した際、それが「同宗弘布」のためであったことは当然として、ハリス自身の表現にしたがえば、それは「個々の日本人の再生と、全体としての日本の再生」regeneration of the Japanese individually and of Japan collectively のためである。その再生は、神による人間の新生であるとともに、政治的・社会的な日本の再編成をふくみ、しかもハリスはある程度具体的に日本変革のプログラムを用意していたのである。このプログラムを明らかにしたのが、「日本の予言」 A Prophecy of Japan である。これは1867年7月2日の日付をもつ。明らかにロンドン滞在中にハリスの起草したものだが、これが書かれた背景に、ハリスの、人間と世界の再生についての教説と共に、日本が現実に直面している諸問題が、ハリスと日本人留学生の不変の真剣な話題になった事実が考えられるのである。

「日本の予言」の内容の検討に入れるまえに、薩摩の留学生がハリスの徒弟となった時期についての考証を加えておく。

中井弘の「航海新説」(明治文化全集第16巻、外国文化篇)の中にその時期を示す興味ある記事があるのである。本書は中井が慶応2年10月15日、土佐の結城幸安を伴って英国にふけて長崎港を出航してから、英国に到着（同年12月14日）して、翌年の春英国を去り、町田久成、野村宗七等と一緒に帰国したその旅行の記録と感想である。

本書の第一部は、杉浦、松村と共に St. John's Hospital を見学した12月26日までで、この部分だけが日記の体裁をとる。それに日付を欠いた第二部がつづく。「龍動（ロンドン）新報」「帰途の概略」の二章から成る。問題の記事は、この「帰途の概略」と題された一篇中唯一の日付のある記事、「4月8日」（この日彼はパリに到着した）の条の前がきをなす文章である。

市来(政清)野村(宗七)吉野(浩左エ門)ノ三士倫同(ロンドン)ニ来ル。先是、余及び
比上野氏(町田氏部)ト共ニ帰朝ノ意アリ。今日諸友ノ説ヲ聞クニ、野村氏ハ沢井、長

* 木村弘「森先生伝」29頁
井、吉野ノ三ヲ伴テハリースフル先生ノ寓楼ヲ訪テニ二百里外ニ発車セリ。市来氏ハ吉野ヲ伴テ今仏国ニ発車ス。余ボーハル（フーバーの訛）ト共ニケンノスツリート火輪車ヨリニ七十リ余、直仏国ヘ渡海ヲシタリ。今朝未明ニ上野、野村ニ二士ハ仏国ニ趣キタリ。

市来、野村ハ巴里大博覧会ヘ仏摩ノ使節、岩下公平ノ随員としてヨーロッパニ来タ。当時フランスニ仏摩ニ中野ガ二人を案内してロンドンニ来タのである。彼等ガ、巴里ニ着イたのは、慶応3年1月2日（洋暦2月2日）であった。

市来ト野村ガ英国ニ訪問シ、留学生ニト交ヴェンニハ、洋暦3月ニ来タのであったら、そうすると野村ニ市来ニ前後してロンドンニ到着セント中井ガパリニ着イテ4月8日は、洋暦ニ来タニ見た者が適當であろう。野村ガ国許ニ帰りガたのが慶応3年5月ニいわれるノモノ洋暦ニ有利益ニシテ。そうすれば中井ニ英国ニ滞在ハ約3ヶ月ニシテ、そして彼ハ1867年春ニ台灣ハハリスニ送簡ヲ交フロンドンニサク1ヶ月ニ在たがたニ期間ニヨリロンドンニ離れたト見られべし。しかも、中井ニロンドンニ在ハニトニ、留學生ニタガ、ハリスニ従ヘ度シテ来たトシテ示ス証言ニ見出シテ見出しかつ出來るもののである。

前引ノ「航海新報」ニニ記載セントニ、野村ガロンドンニ離レタニ前に、沢井、長井（永井）、吉野ト共ニ、「ハリースフル」先生ニ訪問セント。このハリースフル先生ニはすなわチ時モロンドンニ滞在中ハハリスニ見タトシテ。そしてこれニ記載セントトハ、留學生ニテハニテ、Faithful ト呼べていトシテ示挙セントのである。この呼称ニ、英語ニ解シテ、中井ニ手デハリスニソノ社名「フェイスフル」とが奇妙ニ合成セテ遂ヘト結果ニ相違ニナイ。この解釈ニ正シテナル、（それ以外ノ解釈ニ不可能トと思われる）ハリスニこの時期ニ留學生ニテハニ間トシテ中名ニヨリ「フェイスフル」とよばれてカトシテナリ、これはこの時期ニすでに留學生トハリスニテヘニ師弟ニ関係ニ成立セテカトシテナリト示スものでシテ、我々ニ1868年代ニ、ブロックトニ「新潮社」ニ日本人ニ間デハリスガ日本風ニ「誠懇」、オリフィアトニ「忍冬」とよばれてカトシテナリト知るモデリ。（京都大学国史研究所蔵、吉田（清成）文書2595参照）

「日本の予言」ハハリスノ日本変革ニ構想デアル、そのうちに岩下方平ニ野田、永井ニテヘニ言及び見られる。松村ニ「洋行談」ニ木村ノ「森先生伝」ニ中にぶくれられている情報、さらニロレンツ・オリフィアト書簡ニテ参照シホムニテ、この文書ニ成立スル背景デアル、ある程度まで推測スル。それによって我々ニ1866年夏休みニ後デ仏摩ニ留學生ニ消モトニ従ヘトシテカトシテ、それは森ニ伝記ニ空白ニ至カトカ埋めるニ役立ヲ、我々ニそトニ彼ハハリスニ従ヘト、はじめてキリスト教ニ導かれテ信服シてイタト従ハ時ト観カトシテカトスルモノデアル。

ハリスハ「日本の予言」ニ「私はこのように＜日本の問題＞を解決シテ」ニテ言葉ニ書き始めトシテ、そして「日本」ニハリスニ具体的ニ問題ニナルトはおそらく、1866年夏オリ
ファントに伴われて薩摩の二人の留学生がハリスのコロニーを訪問したときにはじまる。ハリスの訪英目的には、そこで残りの日本からの留学生に会うこと、また「日本問題」について、もっと具体的な検討を加えることがふくまれていたであろう。私はさらにハリスは、岩下がフランスに来る、あるいは来たという情報を入手していたかもしれないと考える。「日本の予言」の内容から判断すると、ハリスははじめ岩下との会談に、かなり重大な期待をかけていたようにおもわれるのである。ハリスと岩下との会談は、おそらくは留学生たちのつよい希望で起こされたものであったろう。彼等はハリスの日本再生構想をきいたとき、当然薩摩がその事において中心の役割を引受けるべきだと考えたにちがいない。だから岩下の訪英を好機としてこの二人の会談を推進した。野村や市来をハリスに、会わせたのもこの会談にたいする予備工作であったのではなろうか。中井の「航海新説」の4月8日の条の前書き中の野村、市來のハリス訪問は、その前にいくつかの会談のあとを受けて、二人が英国を辞去するに際しての挨拶であったかもしれない。

岩下にたいする期待は、しかし、裏切られた。ハリスは岩下が代表する薩摩の旧時代の政治家たち（older politicians）を見限る。そして「日本の若い者たちに希望を与え、（「日本の予言」）日本变革を準備するために、これを教育しようという方針を立てに至ったのである。ハリス・岩下会見の時期はわからない。しかしそれは「日本の予言」が書かれた1867年7月2日に先立つそう遠くない日の事であったろう。

薩藩の博覧会使節の名目で渡仏した岩下の主目的は、実は五代が渡欧した際、モンプランとの間に締結した、藩内の産業開発及び対ヨーロッパ貿易のための商社設立契約に正式に調印することであった。さらに岩下はモンプランを薩藩へ政治顧問として招聘する任務をも帯びていた。岩下がこの任務をはたして、マルセイユから帰国の途にいたのは、慶応3年7月29日（洋暦8月28日）であり、モンプランと数人の仏人技術者が同行した。薩藩とモンプランとの間にこれだけ立入った関係がつくられていた以上、岩下が若い留学生たちの夢のような計画にまとは取り合うはずはなかった。「日本の予言」の書かれた7月2日には、留学生たちはまだ岩下説得を断念していない。野田と永井は彼に何嘘かの手紙を書いた。しかしハリスは、岩下が彼等を「裏切る」ことを見越し、岩下と一切係りを断つ方針を定めた。薩藩藩の要路と結んでの日本改革策を拝領したのである。モンプラン登用に関する留学生たちの岩下に対する抗議によって「薩藩政軍史」（「中」978頁）は「岩下は白山（モンプラン）と商社の協定をなされ、留学生等はこれに関して甚だ不安を感じ、岩下等の渡英を機とし、その不可ならを建議せるも、岩下はこの際如何とも為しがたいを諦めてこれに応ずず。依って留学生は建言書を大久保利通等におくり藩庁の反省をもとめたり」と書いている。しかし留学生にとって、問題は、根本においては、五代—モンプランの富国強兵路線と、ハリスの指導下に薩藩の再生を求め、そして再編された薩藩を「中枢」（nucleus）として日本「国
家の回復」 The resurrection of the nationality をはかるという路線との間の選択にかかわっていたのである。少くとも「日本の予言」によれば、ハリスの拡張された日本改革の構想は、このようなものであったらしい。

留学生が薫広におくった建言書の日付は1867年7月10日になっている。この時までには、彼等に岩下と交渉を断つ方針が立ったと考えてよい。これはまた彼等がアメリカに渡ってハリスに従従する意志を最終於に断めた時であると見たよいであろう。ロイレス・オリファントも6月中旬には「新生社」入社を許され、ハリスから出発の指図を与えるのを待機しつつあった。この「建言書」は全文を引用する価打ちがある。これは薩藩留学生の英国留学の決算書ともいうべきもので、ヨーロッパ文明にたいする評価には、1866年夏における無条件的渴仰とは大きな違いがある。ここにオリファントとハリスのつよい影響があることは、明白である。「建言書」中の「或る翁」はすなわち、トマス・レイク・ハリスにはかたらない。この「建言書」の背後にはハリスがいた。この時点では、薩藩留学生の行動の背後にはいつもハリスとオリファントがいたといってよい。

薩摩藩に提出された留学生の建言書

微臣等粛敬之説，且即今之世態をも不明にして建言仕候等，或恐多奉存候得共，存付譲義を国口仕居候等著と如何で奉存，衆議之趣並承得候事情書等相添，左に申上候，何卒御放せ被故下度参願候。

此節「モンブラン」並数多之仏人岩下家弁御同船，御国之揺出格仕上之段承り，如何成趣向を以斯く速路へ労を不願隠越候斯をめ疑感に存降居申候処，幸岩下家弁御入丸相成委細承知仕候，此節自能之趣向に於て前へ罷出御居に天下之事情，且同社中散経等之件を建白可仕との段承申候，就如は私共最初より，白山の尽力に付ては一向信用立兼候故，始終注意仕居候得共，只今に至り其真意を見留不得，唯彼の言と有御国之為に尽力すと之趣，数々承得候共，彼比義之貴感大なくして何故暹之為尽力可仕哉，況我義之臣と相唱可申哉，実は決て左に他御坐間敷を奉存候。又何上志は左もあるにせよ，国内之事情に貫通せずして，誰か其国政之一枚を任せらるべき理更に有御坐間敷奉存候。最初より私共承知仕候には，白山へは万事国内之形勢等一相通知无之候之段，然れど如何して彼の議論之当度すべき道理更に有御坐間敷奉存候。真実「モンブラン」御国家之為に尽力之意夢々無覚東奉存候。故に私共申談彼等之航を相止度，岩下家へ御義論に及申候処，途も此節彼等の航行に相止候候実に六ケ敷，勿論万事只今迄委任相成居候時になれば，此節無理に抵抗して議論に及び候ば，全経之外有之まじく，故に何分此節御国へ来著之上，断然之御所羅被相立候外手書無之との段承り，無和理黙正居後次第御坐候，先違で「ガラバ」対面之折，白山へ「ガラバ」の言はるは，汝多財を薩に貸すといへども当時薩国頃

* Oliphant to Mrs. Cowper, 13th June (1857)
に彼被害し速も返賄義即今無覚害などと云々。然に白山言らく，若者之返賄せぬ時は，
早速仏之軍艦を横浜より彼地へ相向可事に全く恐るる処無之と云ひしと、「ガラバ」
之直唱しを承候。英人より承賄次第御座候。実に可忍之期に御坐候半，抑彼等来著之上
は大小となる預事数すべきは當然にて，臣等之恐懼する候は当時御国許において，
白山余程名誉具一御国家之為に無二之尽力すとの段相関得居由承賄故，
若も不通情之件数
多有之，乍恐不図御動揺彼れの建立を御許容相成候も難計奉承，実に寢食をも不安，御
聴慮を以当御斟酌有御幸度千万奉祈極候。

別紙にも良々古今の事実を記載せし通り，欧士之人宇宙に災害を流布せし事，實に難数，
唯未昔一人の欧人己の利を思はず人の為に赤心を尽せる例，古今之歴史に不見得と或翁
の説を称り，尤私共も夫等之処は至極注意仕候候共，未だ嘗て見聞に及び不申候。
就中仏之歴史等を聞むに，判欲敵顧の余は帝に反し，或は流罪し，父母兄弟離散し
友を棄て，甚きに至っては帝を斬罪し，高位の徒を悉斬罪就罪に処せず数多なり，況
んや当時之仏帝においてをや，吾帝を追放し，4年を限て誓詞し，大統領となり，其際
の終へる期にあたって，彼を以，良臣を追払い，万民を押へ自ら号して帝と称す。仏都
に止り詫問せしものを悉く砕割の姓となし残ず道路は血流せしとなら

私共当国へ到着仕候願は，朦朧たる耳目的為に舞れ，萬端落泊のにみ相願き居候処，日
を経るままで恐避すべきの鎌散く相願，當時に至り一の友を求得，欧羅巴州は勿論米
地の風情を委細承り，唯取るべき小なると避疾すべき大なるを理解せしあ第に御坐
候。英の政府之形態も外風は是を公平なる故に惑候は相見得候へ共，反て左にあらず，
皆技巧権能のみと此の英人の話説を承り，實に共通之事御座候。己を利せんには全く道
を打忘れ，諸州諸職を奪掠し，友弾抗弱は欧州米州之質也を。

別紙二通内一通は右英国人「オリハント」氏乞求て彼れの直筆より荒増翻訳仕候。一通
同断事実之留，

右之通牒暴之文面を以乍恐奉申上候間，御披露被成下度奉摺候，恐々謹言

67の（慶三）
7月10日
大久保一蔵箇
伊集院左中箇
永井五百助
野田仲平
沢井鉄馬
松村淳蔵
杉浦弘蔵
第三章 新生社において薩藩留学生が驗したものです

（一）トマスレーガハリスの「日本の予言」と
薩藩留学生の渡米

1866年夏、アメニヤを訪れた永井と野田は、おそらくはその夏休み一杯を新生社で過ごしたのであろう。彼等はそこでふれた愛の「気」（sphere）と労働の生活に打たれて、ハリスとその教への傾倒を動かないものにした。同時にハリスは彼等を通じて日本への関心を深めた。ハリスの意識の中でいわゆる「日本の問題」が次第に重みを増してゆくその発端は、この時期に窺うと見てよいであろう。

これが1867年春のハリスのロンドン訪問と、ここでの薩藩留学生とハリスとの出会いの背景にあった事実である。ハリスはロンドンにゆく前に、日本問題についての一の「処方」をもっていた。それを薩藩留学生と共にもっと具体的に検討することも、彼の訪英の目的の一つであったかもしれない。薩摩の重栄岩下に会見することも、予定されていたのであろう。その前提には、薩の首脳と絆で薩藩を再組織することによって、これを日本再生、あるいは国家回復の事業の中核（拠点）とするという構想があった。だが岩下との会見によって、この計画がおこなわれるか否かをハリスは知った。「日本の予言」は日本再生に関する修正計画（第二の構想）であった。

「日本再生」の事業は、いまだもなく、ハリスの新生社の運動の一翼であった。彼は人間と世界の再生、あるいは全く異質の新しい文明の創造を追求していた。日本はこの運動の拠点としてハリスに選ばれたのである。

ハリスのメモ「日本の予言」は、次のような言葉で書きはじめられている。

「私は日本の問題を次のように解決した。
事の成否は、その遂行に当る大名が見出されるかどうかにかかっている。この仕事を引受けれる大名がなければ、日本の崩壊と滅亡は急速であろう。

（注）ハリスは、日本の封建制は心の錫まで腐っていると見る。その全体の覆滅から、ある一つの籠が救われるに日本の再生—国家の回復の可能性がかかっているとハリスは考える。新生の真理にしたがってその籠が再組織されることによって、それが新しい日本の核（nucleus）となるというのである。問題は一つ——手を養けるべき場所を信頼できる大名を見出すことである。ハリスの日本再生のプログラムは大要次のようなものであった。

（注）ハリスは岩下を通じて、薩摩の旧政治家たちの道義的頑固の中に、具体的にそれを見たのであ
に疲弊し彼も返財義即今無覚束などと云々、然るに白山言らく、若様が返財せぬ時は、早速仏之軍艦を横浜より彼地へ相向可申放に全く恐るる処無と云ひしと、「ガラパ」之真言を承ひ。或人は承時承承次第御座候。実に可歎之期に御坐候半、零彼等来著之上は大小となく建白申すべきは当然にして、臣等之恐懼する今は当時御国許において、白山余程名名且し入御国之為に無二之尽力すとの段相開得居由承時敬候。若も不遠情之件数多く有之、乍恐不岡御動播彼れの建議を御許容相成候も難計奉存、実に寝食をも不安、御聴察を以次御指詰有御坐度千万幸祈伏候。

別紙にも段々古今之事実を記載せし通り、欧士之人宇宙に災害を流布せし事、実に難数、唯未嘗一人の敗者己の利を思はず人之為に赤心を尽せる例、古今之歴史に不見得と或者之説を承り、尤私共にも夫等之処は至仏注意仕居候者共、未だ嘗て見聞に及ば不申候。

就中仏之歷史等を略記するに、利欲欲断の余には郎に反し、或は流罪し、父母兄弟親故し友を棄て、甚甚に至って是帝を斬罪し、高齢の徒を恶新罪流罪に処せし例数多なり。況んや当時之仏帝においてをや、吾帝を退故し、4年まで計等し、大統領となり、其限の終る期にあたって、安を以、良臣を追ふり、万民を抑へ自ら為して帝と称す。仏都に止し延択せしものを悉く砕剣の性となし遂と道路は血流せしとなる。

私共当国へ到着仕候候は、朦朧たる耳目之為に奪れ、万端欲息にのみ相観き居候処、銘を絵をままで恐避すべきの傾斜く相顧、當時に至り一の善友を求得、欧米邦は勿論米地の風俗も委細承り、唯取るべき小なると避急すべき大なるとを理解せし次第に御坐候。英の政府之形態も外面は成程公平なる故に蒙員には相見得候へ次、反て左にあらず、皆抜抜権杖のみと此の英人之説を承り、実に共通之事御坐候。己を利せんに於く遠を打忘れ、諸州諸島に奪掠し、友誼拒絶は欧州米州之質也。

別紙二通内一通は右英国人「オリハント」氏を求て彼れの直筆より荒増翻訳仕候。一通同断事之留、

右之通篤暴之文面を以乍恐奉申上候候、御批篤彼成下度率候、恐々謙言

67の（慶三）
7月10日

永 井
野 田
沢 井

五百助
仲 平
鉄 鳥

松 村
杉 浦

大久保一蔵卿
松 蔵

伊集院左中卿
松 蔵

弘 蔵
ろう。彼等は愛国の念を欠き、雑調図数をかって政治を借している。それは、殆どいわゆるクリスチャンが信仰を借する（ profess religions）如きものだとする。

ある大名が新生を受け容れる。彼は新生の真義を受け容れつつある「進んだ日本人」 The advanced Japanese を用い、軍のカレッジ a Military College を創設する。彼は全財源をあげて聖護国軍 a Japanese Divine Army の組織に当る。そして十分な力が養われるのを待って、領内から神的秩序に反する一切のものを駆逐する。新生の真義によるに藩のラディカルな再組織である。それによって何者も抵抗しえない力をそれは備え、国家回復の拠点たるうるるのである。ある時点で、軍のカレッジは「知ることの望ましい一切」を教える「学校」と成る。

ハリスは岩下と会見して藩藩の主闘部と結び藩藩を日本再生の事業の拠点とする計画が捨てられたことから、どこか一人の大名を見つけることが第一の問題となった。その大名は全国覚書をもって事に当る人でなければならない。そして彼の任務の中心は、ハリスの悪との戦いの中で他に変らない支持を与え、これを助けることであった。ハリスは、自己の教養した「進んだ日本人」とともに日本に渡ることを期していた。日本にも新生社 The Brotherhood of the New Life が結成される。これが個々の日本人の再生に全力を挙げることによって、日本の全体としての再生のための真の拠点となるのである。

ハリスは、新生を受け入れた大名が、全力を挙げて神護国軍を組織することを期待しているが、これは軍事力によって敵対勢力を制圧して国家の統一を図ることを考えたのではないかように見える。その大名は、国内の凡ゆる抗争にたいし中立政策を堅持する。その中立政策の裏付けとして「国軍」（藩の軍隊でない）が組織されるのである。ハリスは人間再生を通じて日本が変革される過程を次のように記述している。

その大名は一兵士として自己を訓練し、一切の養えをえて、すべての資源を力とを人民の福祉のために用いる。人民の心の中に智がきかれて、急速に彼をつよくする。同時に真の政策が示されることによって、国内の愛国勢力（patriotic element）が彼の周囲に結集される。すべての成長が中心からおこる……。

松村はハリスが岩下に会ったのは「同宗弘布の下心」があってのことだろうと記しているが、ハリスは日本をキリスト教によって侵されていない土地として注目したのみでなく封建制が崩壊しようとしている日本の歴史的政策的状況が、新生の真義が一潮を再生させることを通して、直ちに国家を再生させる力として機能する可能性を秘んでいると判断していた。だからこの事業にとって決定的なことは、「一人の大名」が見出されることであったが、実はその直前に、新生の真義を受け容れる「進んだ日本人」が養成されていることがこれに劣らず決定的な重要性をもつはずであった。彼等の第一の資格は、何よりも、「義しい人間」であることであった。ハリス的な意味で「義しく」あるためには、その人において「私己」
と「旧我」が否定されていることが必要であった。彼等は新生をつくる仕事にも、軍のカレジを創設維持する仕事に、その軍のカレジが切りかえられたのちの学校の教育にも、藩主の側近としての仕事にも、また新しい国家のための政策樹立にもそれぞれ関与する。彼等は極めて多忙な仕事に手を付けてたずさわることが予定されていたのである。ハリスはオリファントをこの日本問題に専念させる意向をもっていた。彼はそのためしばらくアメリカにおける任務を免除する。「彼は日本人ともに住む、あるいは行く」と記されているのは、その時から彼はアメリカで日本人の教育に当り、時が来たとき一緒に日本に赴くという意であろう。ハリスも同行するはずであった。

この修正された日本再生の計画は、藩藩留学生には、はじめ若干の抵抗を感じずにはまずないものであった。彼等は当然藩こそこの事業の観点であるべきことを期待していたのである。しかし新しいプログラムは、任意の一藩において、その藩主を中心としてすすめられるものとなったのである。

だが、このふるい藩意識はやがてのりこえられていた。（Internally they are about done with Satsuma in their old relation.）

「日本の予言」にのべられた日本再生の計画との結びつきにおいて、藩藩留学生の渡来が実現したことは、疑う余地がない。彼等を米国に渡航させた動機は、必ずしも一様ではなかった。しかしこのきっかけがハリスのすすめであったことは、松村（「洋行談」910頁）も海門山人（18頁）も一致して語るところであった。我我さらに米国滞在中の杉浦（畠山義成）が1869年に書いた手紙の中に、はっきりとこれらの記事を裏付けること名を示すことができるのである。杉浦は、ハリスの飛ばして強い関心を抱きながらも、同時にある批判と留保をもってこれに接していた。この点、無条件の傾倒を示した永井、野田、森とがっていた。この手紙はのちにほぼ全文を引用する予定だが、まずこの渡来動機に関連ある部分を引用しておく。（158頁の中略部分に当る。）

其時ハ「ハリス」為人善悪正邪之間ヲ明白ニ見察スルコトヲ於テ甚ダ難シ。何分「ス ウイデンバールデエン」トヘ見ナガラ、奇異無形（紙）ヲ於テ理会シ難ク何分理会ナ シ＝彼ノ教ヘヲ 我国＝引入ル事モ出来ズ、又ハ退クルコトモ相則、テ様不首尾之有 ヨリヘハ驚惡ヨリ嫌へ第一となれば、米行 question フ 「ハリス」ヨリ受候仰、何レ ペンノ理會スル＝於テハ米行＝若クハナシト存ジ、一同米行＝凌シ候次第ナリ、……

この時点で少くも杉浦が、ハリスの教を我国に引入れるか退けるかの選択をせまられていることは明らかである。私の目的にとってこの文章の要点は、「奇異無形の説」が掲げられてハリスの教をそのまま受け容れがたい心境にあった杉浦にたいしても、これを退けることも許されないと感じていた事実である。ハリスの教こそ only protection for Japan
森 有 礼 研 究

against the foreigners である。と説くオリファントと、このようなものとしてハリスの教を信受し、その講演にしたがって日本再生の事業に身を捧げることへの期待の高揚を否定するだけの十分な根拠もまたもたない杉浦の心の状況を、この文章はよく示している。杉浦はこの疑念に決着をつける、あるいはハリスを日本に迎える問題に彼なりに納得のゆく結論をうる為に、ハリスの勤めるままに一同志ともに米国ゆきを決意したというのである。

英国を去った薩摩の留学生がアメリカに落ちついたのが、何時だったか、正確なことはわからない。木村izio、「慶応3年7月英国を去って米国に航ず」と記している。海門山人も同じくそれを7月のこととした。何に向かったかは不明だが、これは正しかっているようにも言われる。洋暦になおすと1867年の8月中ということになるが、あるいは状況から見て、彼等が英国を離れたのは8月中旬以後のことと見てよさそうである。

オリファントが、議会と英国をすて、リバプールを出帆して米国に向った7月27日には、彼等はまだロンドンに残っていた。オリファントは、当時なお英国に滞在中であったハリスの秘書、Miss Jane Lee Waring（社中名 Dovie）に宛てた7月27日付の手紙の中で、彼等が独力でロンドンを離脱する disentangling themselves from London ことは困難であろうとして、彼等を助けるために、同じく英国に滞在中であったレクア Requa をロンドンに派遣することを希望している。その困難がどのようなものだったかはわからない。しかし、オリファントが、新生活の希望に大きく胸をふくらませながらも、彼等のことをおもって声を放って泣かずにはいられなかったのは、彼等が直面していた困難がかなりシーラスなもので、あったことを示唆するものであるかもしれないと（訳）

(訳) 「私は Steadfast (Requa の社中名)がロンドンに出向いてそこから日本人を助け出す方がよいと思います。彼等は人に迷惑をかけることを嫌い恐れており、彼等が気がすまないと考えれば、彼等は決して彼に来て欲しいとは思わないので。だが、いかに神の導きと護りとがあるにせよ、彼等は余りにも世間を知らないすぎます (They know nothing of the world and its ways)。彼等がロンドンを抜け出すという難しい仕事を独力で、やりおおせるとは恐れわれません。ロンドンを離れるとき、私は彼等のことを思って、声を放って泣かずにはいられません。」(I could hardly help crying about them when I went away.) 彼等はそれほど真実で愛すべきかつ誠実な人たちです(2)

オリファントの日本人への愛着は異常なほどだが、それだけなら間もなく会うことのわからっているしばしばの別に、オリファントも「彼等のことをおもって」声を放って泣くことはなかったであろう。

だが、おそらく9月はじめまでには、彼等はアメリカに到着した。そして直ちにきびしい肉体労働と、ハリスを「父」と仰ぐ「共同体」の生活と秩序を通して、根本から自己をつくりかえるので、あるいは再び生れる (regeneration) 道の実修にふみかきしていた。オリファント

(1) Oliphant, do. 1st Dec. (1867)
(2) Oliphant to Dovie, 27th July, 1867
は、藤森藤たちが「毎年、喜びに満ちて輝かしながら、きびしい労働に従事しているのを見ます」とクーパーに書き送っている。

（註）ハリスはオリファントにきびしい労働と極度にきびしい生活を課しただけでなく他のメンバーと話すことも禁じた。彼は愛する母とも日本人とも会うことも話すことも出来なかったのである。彼の倉庫の中で空き箱をベッドとしてもデスクとしても持っている。起床は5時、7時から10時間はきびしい農耕労働に従う。プロジェクトに移ってからもこの生活の規律は変わってなかった。彼はこの年のクリスマスに2年も会わなかった母とはじめて会うことを許された。だが、この時もハリスと親しく話ることはまだ許されていない。

「新生社」はその中で人間が文字通り新しく生まれ、あるいはきびしくかえられる場——協同と訓練の組織（System）であった。この機能が追求されるかぎりにおいては、それは徹底的な閉鎖的な社会でなければならなかった。共同体は文字通りに「有機の一体」であることを求められた。そのため、外部との交渉をきびしく規制されるのみでなく、個々のメンバーの「内態状態」internal stateが共同体——特にそれの枢軸pivotであるハリス——にたいして悪い影響を及ぼすと判断されると、（判断するのはいつもハリスである）他者の部分との接触を断された。せっかきは、共同体からその人が排除される場合もあった。オリファントが他のメンバーとの接触をきびしく禁じられたのには、久しく英国の上層社会の放蕩の中に生きた彼が、その意識的努力にもかかわらず、その内態的状態が「旧我」に濃厚にまつわっていっていることが、彼にとっての問題であるだけでなく、共同体やハリスへの重大な危険と判断されたのである。

新生社は、しかし藤森留学生たちにたいしては、はじめはオリファントや、のちにふれる新井奨軍の場合のように、纯粹なきびしい訓練の課程を課さなかったように思われる。あるいはこの段階では、彼等はまだ正規のメンバーとしての扱いになっていなかったかもしれない。いずれにせよ、新生社の生活にはいったばかりの野田のモンソン訪問は、新生社の訓練の方法からすれば明らかに例外的である。それは、ハリスの「日本の予言」の中の一部である。日本再生計画の一環として、一人でも多くの日本人を新生社に誘引し教育しようとするハリスやオリファントの希望につながっていたと見てよいであろう。日本人を「狩り集める」とこの種の努力は、1867年の6月7月頃と推定されるオリファントの幕府留学生への働きかけに至っていた。さらに後に藤森の留学生への接近に、すでにその目的があったと見られるかもしれないが1866年の夏にはオリファントはまだ新生社入社を許されていなかった。それよりも重大なことは、オリファントと共にアメニを訪れた藤森の二人が、おそらくハリスが会った最初の日本人であったという事実である。ハリスの日本への関心は、彼等を見たことによって具現性をもつにいたったのである。日本問題がハリスのつよい関心事とな
あるいはそれ以後のことである。オリファントは日英修好通商条約締結のため訪日したエルギン卿の秘書として安政6年（1859年）に、また在日英国公使館附書記官として（彼は実はオールコックの賜暇帰国に伴う代理公使をつとめることになっていた）文久元年（1861年）に日本を訪れ、日本と日本人を知っていた。安政6年の訪日時の経験をもとにして書かれたLord Elgin's China and Japanは、ヨーロッパ人の日本へのロマンチックな興味を呼びおこすに与って力があった。その頃から彼は日本ビキイであった。日本人のもつ特別な資質が彼の真摯な関心を惹いて、ハリスの許に日本人を同伴する気持を起させたのは、主として、若き留学生たちの影響であったが、新納や五代や寺島のような人々の示した、すぐれた資質や意欲や能力も与えて力をあつしたろう。これがオリファントとハリスに日本への夢を育んできたと思いえよう。彼等は日本問題の解を模索しはじめた。それは個々の日本人の再生（神における新生）の問題であると同時に、国家回復（The resurrection of the nationality）の問題であったのである。かくしてハリスに日本の青年を教育することへの熱意が生じ、オリファントにハリスの許に一人でも多くの日本人を集めようとするつもりが生まれた。日本の青年たちを教育することは彼においては日本の再生を準備することであると同時に、この世界がかつてみたこともない高い文明のために一つの礎石なく事業だと信じていたのである。

（註）幕末から明治にかけて、日本公使館附書記官として活動したアーネスト・ショウが日本に心をひかれるきっかけとなったものの再版である。上述はこれを「館末附書記官の日本」とよんでいる。
「一外交官の日清維新」（岩波文庫版）上，31頁。

（c）日本人留学生を新生社に誘引する試み

（1）オリファントはクーパーに宛てたアメニャからの第一信の中で、野田がマサチュセットのカレジにいる4人の日本人に会いにいったのを報告している。この手紙には日附が欠けていている。しかし幸いに京都大学国史研究室所蔵の吉田（清和）文書中に、モンソンの二人の薩藤生久松・島田からアメニャの、英国から移った6人の薩藤留学生に宛てた手紙がある。この手紙の中では、野田の来訪（御見舞という語が使われている）にたいして謝意を表し、挨拶の延引を詫びたうえで、休暇に次第アメニャに赴いて先生（ハリス）の高論をうかがうのをたのしみにしていることをのべているのである。この手紙の日附は、9月15日であるが、宛名が6名の連名であるところから、これが1867年のものであることは疑いない。

（註2）吉田文書の中にはかなりの数ある慶応元年の薩藤の遊英留学生たちの書簡がふくまれている。英国時代のもの、米国時代のもの。特に、少数だが、ハリスの新生社に入っていた時代の日本人メンバーの消散、また後にふれる分裂事件（12人の日本人メンバーのうち、吉田清和や石田義成など8人が新生社を脱退した事件）直後の、脱退した者の記録の残されている点で、これは貴重である。

(1) 詳しくは Oliphant, L: Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan, 1866
(2) Oliphant to Cowper, Ist Dec.（1867）又「日本フォーラム」1964年7-8月号の摘稿（60頁）参照。
私はミンシピア大学のパトリック書房所蔵の Harris-Oliphant Papers の中、ヘリスの計に手を出した大有礼と飯島尚信が帰国際して脱退したメンバーに宛てた別書（後述）を含む、いずれ、ヘリス側の資料を発見したが、吉田文書中の一選の書簡が見出されたことで、薩藩留学生とヘリスとの交渉の歴史を踏まえ双方向側から明示する道が開けたのである。いずれにしても、本文書は、幕末の海外留学学生、直接には慶応元年の薩藩留学生に関して Columbia大学の Harris-Oliphant Papers とともにもっとも重要な根本資料を含んでいる。これはまた、後に引用する桜山書簡に見られるように日本キリスト教史の研究においても、ユニークな、重要な意味を持つことを指摘しておきたい。

（注2） 番名は杉浦、沢井、永井、野田、岩本、桜並となっている。最後の2名については、表名が知られていなかったのである。1865年にはまだ彼等は英国にいた。1868年6月上旬に野田と沢井が帰国したあと、この6人中でなお新住社に残っているのは、桜並（長沢連）1人だけであった。

アメニヤに到着早々の野田のモンソンゆきは、彼等がなお英国に滞在中にこの計画が練られていたのではないかという推察を求む。モンソンの5人が、慶応2年8月頃（1866年9月から10月に当たる）英国に到着、それから米国に赴いたことは松村の“洋行談”にも見えている。これが野田永井がアメリカにいてヘリスに会って帰った時期に当るから、ヘリスの名は彼等にも知られていたかもしれない。彼等がモンソンに落ちついてからもロンドンの薩藩生との間に連絡が保たれていたにちがいない。モンソンには彼等の外に木藤という薩摩藩士がいた。野田のモンソン訪問にオリふスマントは大きな期待をかけていた。彼は野田のモンソン訪問にふれて

彼は彼等に一部始終 the whole matter を説明した。彼等は全面的に受け容れ、学期の終る11月には、私の仲間に加わることになっている。

とのべている。のちに彼はこの表現を修正して「残りの5人は11月になったら Faithfulに会いにくくなる。勿論実際に来て見なければ彼等が受け容れるかどうかはたしかでない」と言い直した。「残りの5人」といっているのは、6人いたモンソンの日本人の一人、木藤市助が、野田のモンソンを訪れ2週間ばかり前に自殺した事件に関連していわれたのである。この5人の名前は、仁礼平助（景範）江夏社助、種子島敬輔、吉原弥次郎（重俊）島湖治右衛門（定基）である。彼等も米国では、変名を用いていた。吉田文書によって、木藤十郎、吉田彦蔵、大原令之助および久松、島田という薩藩留学生が1867年から8年間にかけて、モンソンに住んでいたことがあるのである。このうち大原が吉原の変名である以外、誰が誰であるかわからない。おそらくこの5人が慶応二年の薩摩の米国留学生であろう。野田のモンソン訪問の目的が彼等を新生から誘引することにあったこと、またそれがヘリスの了解の下におこなわれたとは疑いない。

これはヘリスが「日本の予言」を書いたときにすでに新生社の中に日本人学校を開設する
計画が、日本再生の計画の一環として、立てられていたことを示唆するものであろう。事実、このモンソンの日本人にかぎらず、米国英国にある日本人留学生にたいして実に熱心に、オリンフントは、野田と永井に協力をもって、彼等を新生社に誘引するために、百方手をつくしているのである。英国の場合はクーパーがこの仕事に協力した。

11月になるとモンソンの五人が約束通りハリスに会いに来た。うち三人（江夏、仁礼、湧地）はそのまま新生社に止まった。永井（吉田清成）によるとこの三人は、

倉石之進論文が、500余の豪気を不快、信者来りけるニその大徳に感じ、立野・門弟たちらを敬し、終に其意を得、倉石之進を最も尊し

と記している。モンソンの学生たちがハリスに会ったのは、アメニヤでなく、同じくニューヨーク州だが、はるか北辺の、エリ湖畔の村ブロックトンにおいてであった。ハリスはここに広大な土地を買入れ、新生社をここに移そうとしていた。ハリスはその準備のため、10月末にオリフントの母（Lady Olibumph）と秘密のダビ及び二人の日本人を伴ってこの新しい用地に移したのである。この二人というのは野田と永井で、彼等は日本人留学生中の活動家であり、またもっともハリスの信頼が厚かった。ハリスははじめから、ここでモンソンの日本人と会う予定があって彼等を伴ったのかも知れない。ブロックトンに居在が用意されるにしたがって、11月はじめから週末メンバーの移転がはじめられた。11月末にオリフントもブロックトンに移した。アメニヤの日本人が全部ここに移って、モンソン組と合流したのは、12月末であった。

（訳１） オリフントの手紙によると、11月20日までに5人の新らしい日本人が新生社に加わり、12月1日には彼らの同居する家族も決まって引き立ちはじめている。これはモンソンの5人の築基生と見てもよい。しかし12月29日に日本人学区が開設されたときの日本人の数は11人である。この中アメニヤから移ったのが8人だから、モンソン組は3人前引、永井書籍にある江夏、仁礼、湧地がこれにあたる。

（訳２） この時購入した土地は2000エーカーにおよぶもの（1エーカーは4046、8㎡）で1820年71年にはさらに、購入地を買収して拡張した。この土地購入の計画はオリフントの入社の際の献金をどう使うかという問題がキッカケとなって立てられた。25万ドルにのぼる資金の半分がオリフント母子から出たもので母は相続に与ったというよりも発案者であったのだが、オリフントは全く何の意見も求められず、ブロックトンにおいても、聾聵たる労働者として農場で働いていたのである。

序で、新生社のメンバーの数を明記しておくと、小橋によれば30人余だが、新生社の最盛期には75人から100人くらいのメンバーを擁していた。内、成人が6、70人そのうち4、50人が女性であった。ここに入るのは、原則として家族ぐるみであった。

アメニヤの新生社は、モンソン組の参加にさきだって、2人の日本人の訪問を受けた。藤原の洋学諸生で江戸表に留学中の谷元兵右衛門と野村一介である。2人は脱走して来国に渡った（松村「洋行談」914頁）のである。彼等はカリフォルニアでモンサンと連絡をとり、そこでアメニヤの新生社と、そこにいる藤原生について情報を受けたのである。この2人の照
会にたいし、アメニアの薬藩生は、ハリスと新生社について説明し、改めて指示を待つようにと申し送った。だが、

彼等は待ちきれないで、連絡を待たずに訪ねて来た。「フェイスフル」は不在だったが

彼等は我々の労働の生活とここを顧している愛の気（sphere）に打たれて、「フェイスフル」の教は真実にちがいないことを確信して、「フェイスフル」の帰りを待つ決心をした。

こうオリファントは書いている。彼等がアメニアに到着したのは、1867年9月26日である

が、その夜彼等の夢にハリスが現われた。ハリスは一人に Die to self といい、他の一人に

Be humble といって自分で洗うことを命じた。朝になって二人は「この生活を受け容れる」決

心を堅めた。彼等は日本での過去の生活は悪夢であったことを知った。彼等はいま衣類の洗

濯ベッドづくり、皿洗いその他の卑しい仕事（uses）を習っている。これがオリファントの

手紙に見る「カリフォルニア経営で日本から来た2人」が新生社に来て、そこに住みついた

経緯である。

この二人は身の振舞方に窮していた。前に引いたモンソンの久松、鳥田の手紙の中心の問

題は、実はこの二人の身の振舞方に関することであった。モンソンの留学生を代表して大原

令之助がアメニアに手紙を書き、「谷（元）、野村の一条について」相談した。これに対して

アメニアから、ハリスとも相談の上、二人を引受ける用意のあることを知らせて来た。この

返書との前後はわからないが、野村のモンソン訪問があり、それに対する挨拶を兼ねて9

月15日附の久松、鳥田の、アメニアの六人宛の手紙となったのである。モンソンの留学生に

も、この二人を新生社に引きとって貰う以外の解決は考えられなかった。二人が「先生」

の

世話に成ることが出来るのは「是して赤面の至りには御座候へども、実に大幸此事に御座

(2)

候」と書かねばならなかったのである。

谷元、野村がおかれていたこのような状況を考えると、誰でも、彼等が「この生活を受け

容れる」動機となったという、夢の中でのハリスとの問答に何か作業の跡を感じずである

ろ

う。だがオリファントも永井も二人の告白を疑わなかった。また、彼等のおかれていた状況

がどうであったかは別として、実際にハリスのコロニーにふれた彼等は、1866年9月の英國

で、野田に永井の言にとってハリスを信じた森に比べて、ハリスを信じるためのたしかな動

機をもっていたことを認めなければならない。この生活を見たことのない人には、ハリス

の教を本当に評価することではないというのが新生社の日本人の共通の意見であった。オ

リファントは、それ（コロニーの生活を見ること）は、日本人にたいして、他のすべてにまき

(3)

って多くを証明するとのべている。日本人の「開いた」心がコロニーに渗透する愛と純潔の

(1) Oliphant to Cowper, 20th Sept, (1867)
(2) 前引久松鳥田信（吉田文書2537）
(3) Oliphant, do, 6th Oct., (1867)
「気」sphere の影響をつよく感じとることを可能にする。それに反して普通の西洋人はその心が閉じているため、その精妙な力を感ずることができないのだというのがオリファントの日本人評価であった。

（訳）「去年9月（洋風）に来、野村之氏が、もまたに来（くもも泰山）の直接原乃大徳乃幸せ爾の門下＝到り共風化乃至＝語せなるを見、即先生乃短くたる知を切望す、先生為に之ヲ背し愛者有る実＝切るかり」（1859年1月9日、兄宛永井五百介書簡、吉田文書、2453）もっとも洋人であっても、英国ドンカスターのクーコー族のクラスの命の例は、日本人の場合とよく似ていた。彼はその町の名望家に生じた真摯な人物で、社会の信用を欠けていた。従来の新社と何かの見えない人であったが、米国の友人を訪ねる途次、ふと立ち寄った新社の生活にふれた。そんなしきりに英国に帰らず兄弟も学界上の共同者をも捨てて「丁度音の弟子がすべて捨てて主に生したか」テーブルの人となったのである。（Oliphant to Cowper, 3rd Jan. 1869）

オリファントがハリスの了解を得て、はじめて英国にいる日本人留学生を新社に誘引する事業に、クーヘーの協力を要請したのは、モンソンの5人の日本人がブリストンを訪れてきて新社の日本人は13人になったので間もなく学校開かれるだろうということを報せた。1867年11月26日付の手紙においてであった。新社の中に日本人のための学校をつくることは、「日本の予言」にのべられていた日本再生の計画の一環であり、さらに世界が、かつて見たことのない文明の根底を築きて事業の一翼として理解されていた。オリファントの意思の中では、日本人を狩り集める（hunting up）仕事は、「主がその困いの中に『彼』の小さきものをを集める」仕事としてもうけとられていたのである。

（訳）オリファントはこの事業に協力することによって、The great cause we all have at heart の利益をおかすることになれるということをいう。その内容が、世界が見て見たことのない高度の文明の根底を築くことなのである。

オリファントが上記書簡の中で記すところによると、舘の留学生と同じ年にロンドン大学に入った長州の内田は、当時帰国中であった。帰国の目的は、長州の藩主を説いて藩主自身の渡米を実現させるにあたった。ハリスの許で彼に新生の真理を学ばせたいという大望を南は抱いていたのである。明らかに新生を受け容れる一人の藩主を見出す努力をみてよい。オリファントはまた、グラーにこの計画実現に役立たせため、クーヘーの影響力の行使を望んだ。さらに南は、当時スコットランドのアバディーンに留学中の長州のDokie とHatori の渡米を実現するため藩主の許可（命令という言葉をオリファントは使っている）を得ることをも期していた。この二人は、ハリスの許されて新生の真理と清浄の生活を生きる道を学ぶことを切望して、手紙を新生社に寄せたのである。オリファントによれば、Dokie は長州藩主の甥であり、Hatori は「下の閣のプリンス」の家老の息子であった。

この二人がロンドンに移る前後に、さらに3人の長州藩の留学生が渡英した。Otomi、Yosiyama および Nagami である。オリファントはクーヘーを通じて彼等と接触をはかっていき、その際、士佐のYukee と Obah を「役立てる」ことができること、また彼が彼等のいわゆる「偉大なる教師ハリス」の弟子であることを明らかにすることによって、この三
人を信用させ、助言にしたがわせることができるのはもちろんである。当時の英国に到着して間もない留学生の間においてさえ、ハリスの信頼が大引きかかったことを、さらに土佐のYukee や Obah（彼等もまたハリスに会っていたかもしれない）がつよくハリスの影響下にあったことが知られるのである。長州の二人もすぐにでも「フェイスフル」の許に到ることを望んでいるとオリファントは書いている（3rd Jan. 1868）。

この Yukee が中井弘に伴われてロンドンに来た結縁幸安であることは十分に想像がつく。その推定を裏付ける証拠はががて明らかになる。結縁にたいするオリファントとハリスの期待と愛着は、並々ならぬものがあり、藤原藩士との間にもかかわらず交渉があった。オリファントは、土佐の二少年についてこう述べている。

彼等は「フェイスフル」の教を、彼等が知っているかぎりで全面的に受け容れている。
そしてひたすら、彼等に純粋で、善良な生活を送るのを可能ならしめる道（System）を履むことを欲しています。あなたは特に結縁が温かで愛すべき若者であるのを見放出しよ。彼等はすべて優秀で、感性のゆたかな人間です。そして「寄した」心の持ち主であるため、我々よりもはるかによく人間をその気（sphere）によって判断することが出来ます。またつねに愛の気をよく受けとめます。

さらに、オリファントは彼等の『彼』（神）にたいしてなされる絶対の自己犠牲と『彼』にたいする愛は『彼』を知ることの久しい我々を恥じ入らせず、また狼狽させます」と書いている。これは直接には Yukee と Obah について述べられたことだが、オリファントの目には、多かれ少なかれこれがすべての若い日本の武士たちに共通の資質として映っていたのである。1867年の11月には Yukee と Obah の渡米は、現実の問題になっている。しかし彼等の監督者クーバーが渡航費の支出を拒むことが予想されていたので、オリファントはクーバーが必要な経費を提供することを要請した。その手紙の中でオリファントは

我々はいづれぞれを土佐の藩士から出して貰うことが出来るでしょう。彼は我々がなしきえたことを是認するでしょう。彼がクーバーにたいして立腹するだろうと考える十分な理由があります。

ということいる。彼は長州や土佐の了解をとりつけることについて、かなり楽天的である。
そこに彼の接触した日本人たちの考え方がある程度反映していると考えてよいであろう。

すでに述べたように、1867年12月1日の手紙で、オリファントは、Yukee と Obah の渡米費用についてクーバーの配慮を要請した。米国渡航を現実の問題としているのである。翌68年の3月はじめには Yosiyama, Ottomi も書を新生社中によせて遅滞なく（without delay）アメリカに渡りたいと在嘗した。ハリスはこれにたいし、近くラクロスト一家が渡米することを告げ、それに同行するように指示させた。そのとき Yukee も一瞬に来ることをハ
リスは望んだ。ラクストン一家は4月5日前後に来国に向かった。だが、YukeeもYosiyamaもOtomiもこれに同行することは出来なかった。

1868年4月12日オリファントは英国にいる日本の少年たち、特にYukeeの到来を待ちかねながら、Our dear Japanese are such precious treasures to us here.と書いた。そのとき社中の日本人は12人で、ラクストン一家The Ruxtonsが、到着次第彼等はこの一家と一緒に住むことになっていた。

(2)

1868年も押しつまった12月29日に、新生社の日本人が全部ブロックトンに集まったので記念して、さまざまな茶の会が持たれた。日本人は11人、「西洋人は私１人だけです」とオリファントは誇らしげに書いている。11人の内訳は、ハリスに従って10月中旬に最初にブロックトン入りをした、野田と永井、それに11月中旬に新生社にはいったモンソンの夏江、仁礼、湯地の三士と、それまでアメリカに滞在していた沢井（森）杉浦（藤山）松村（市来）、長沢（僕永）の四人の藩藩留学生と、「カリフォルニア経由で日本から来た」谷元、野村の「両雄」である。この六人が、その日ブロックトンに到着したのである。オリファントは、これは11人の日本人が一緒にすごす最初の晩だと書いている。

(注) 1875年にハリスはブロックトンを去り、新しい土地を求めてカリフォルニアに渡り、サンタローザ近郊のファウンテンタープに新生社の新基地を開いた。そのとき彼は、もっとも信頼していたメンバー3名を同行した。その中2名が日本人（長沢と新井秀雄）であった。日本人への信頼の厚さを示すものである。1867年にブロックトンに同行した野田と永井は、日本人中もっともハリスが信頼し、かつ活動家であった。オリファントの日本人への親しむかげる協力者は、いつもこの二人であった。

この集まりは同時に日本人学校の発足を祝う意味をもこめていたと思われる。オリファントは「彼等はすべてその研究（studies）をはじめた」とその手紙に書いているのである。この日本人学校の開設については、彼は、11月末に、新たに5人の日本人が加わって、13人になった。さらに何人かの参加者が見込まれており、「間もなく学校が開設される予定です」とクーパーに書き送っていた。この新たに加わった5人の日本人はモンソンの5人と同じよ。その中の2人（種菓、吉原）が一旦モンソンに帰ったのであろう。そのうちの一人もやがて新生社に入れたと思われる。しかしこの11月末という時点では、新生社の中の人となった日本人13人の中、6人はまだ他のメンバーと共にアメリカに残って、ブロックトンに住む家が用意されるのを待っていた。沢井（森）もその一人であった。この残り6人が、ブロックトンに到着するのを待って日本人学校が開かれたのである。オリファントはその中で、当然重要な役割を与えられたと思われる。

(1) do, 29th Dec. (1867)
(2) do, 1st Dec. (1867)
翌年（といってもこの茶の会が持たれてから10月余りしかたっていないわけだが）1月9日附で兄宛てにかかれた永井の書状（下がり）が吉田文書に残っている。この手紙によって我々は、前引オリフィントの手紙にいう「さらに参加の見込まれている人々」が誰であったかを知ることが出来る。それは(1)土紀、服部、音見、芳山、永見であり、(2)結城、大庭であり(3)花房、柘植であり、(4)種子ケ島、吉原であった。(4)は江夏、仁礼、湯越の仲間であるモンソンの留学生であり、(3)は当時の所在は確実でないが、1688年6月にはボストンにいた。花房は岡山藩士である。柘植もおそらく同藩の留学生であったろう。(1)、(2)は1686年1月の時点では、英国に留学中であった。それぞれ長州及び土佐藩の留学生である。

（註）永井の本書籍中の語を借りれば彼等は、「先生の意を慕うて来らんことを切望すといえど、未其意を識るもの」であった。なお、大蔵省の各国留学生調（明治4年9月現在）を見ると英国の留学生（官費）の中に南堅助と音見官兵衛の名が見える。南は明治三年藩公使同じ船で米国にゆき、そこから再渡英したのであろう。さらに同文書によると、米国の官費留学生中に、杉浦弘蔵、松村常蔵と共に、鹿児島県人谷元兵衛門、湯地治右衛門および野村助（これは官費）の名が見えている。さらに山口県人として、服部一三（官費）の名が見えているのは、ここにいう服部と見てよいのではなかったか。とすれば、彼はその時期は不明だが、英国から米国に移ったと考えられる。服部一三はラトガース大学1872年の入学生である。

永井五百介のこの書状の中に現れている日本人の名は11名にのぼる。この外候国中であっ
た南堅助は純然たる新生社の同志であった。これにはすでに新生社の中人になっていた慶応
元年と二年の藩藩留学生10名および日本から来た二人は含まれていないのであるから「日本人
学校」は最大23名ばかりの学生を見込んでいたわけである。南をふくめ12人の参加予定者
の中9人にたいしてロアレンスロオリフィント或は学監はそれを新生社に誘引する努力を試み
た、そのあとを我々はフーパファ婦歓のオリフィント書簡集の中に辻りが出来るの
である。それだけではない。オリフィントは1867年の、おそらくは7月から7月に至る時期に
、慶応2年の幕府の英国留学生にたいしても、神による新生の福音を説いてハリスの許に
彼等を誘引する努力を試みているのである。彼は取締役という名でこの留学生団に加わって
いた中村敬輔（正直）に会い、ハリスとその教を説いたのである。オリフィントのこの努力
にたいして中村はどのような反応を示したか、中村正直のライフヒストリイの中の全く知られ
ていないかった興味ある一頁を、我々はオリフィントの手紙の中に読むことが出来るのである。

慶応二年の幕府の留学生がロンドンについたのは同年12月28日、すなわち1867年2月2日
であった。一行は14名、取締役として川端太郎（聖護の嫡孫）と中村敬輔が付き添い、留学生
に外山捨長（正一）、箕作要秀、同大六（極地大斎）の兄弟や杉徳二郎や林桃三郎（林譲）
福沢諭吉の弟英之助という名義で特に一行に加えられた彼の門下生中澤藩士の和田慎次郎や
御軍艦頭取完治弟安井真八郎などがいた。

彼等がロンドンについて2日後の2月4日（洋暦、以下同）に永井は一行をホテルに訪ねて
いる。この時どんなやりとりがあったか、それは不明であるが、この訪問は後のオリファントのこの一行への接近に道をつける役を演じたかもしれない。一行は英人 Lloyd と一つの家に同居し、彼の監督下におかれていた。ロイドは英国の艦隊附牧師で、彼等の世話にたいして年 3000 ポンド以上の手当を給せられていた。本務にたいする給与は 300 ポンド以下であった。だから学生が英語上達のため分宿を望んでも、どこまでもそれを阻止しようとしたり。留学生たちは彼が政府（幕府）に訴えれば切腹を命ぜられることにもなりかねないというので、ひどくロイドを恐れていた。彼はオリファントが彼等に接近するのを嫌ってきびしくこれを警戒してた。彼の言う分はオリファントは薩摩藩士たちと一緒にになって「大君」にたいする謀反を企っているというにあたった。オリファントが彼等に接近した目的は、勿論彼等をハリスに導くことだった。彼の努力はいくらか報いられそうになった。

会員 14 名の一一行の中、全面的に「この生活」を受け容れたのはただ一人だけです。彼は我々の許（ブロックトン）に来たがっています。彼にあつた手紙を同封しておきます。彼の名は Fakuzawa（福沢英之助）です。この一行の上級メンバー 2 人（two seniors）すなわち Cuwaje（川路太郎）と Nakamura（中村敬輔）にも私は話をした。彼等はふかい印象を与えように見えた。彼等は注意をかく耳を傾けた。だからせんせの彼等は福沢にこういったそうですね——彼等が非常に善良な人々であることは疑いない。また彼等の語るところはすべて真実であり、「フェイスフル」は非常に偉大な教師にちがいない。だが彼等のところにゆくのは無用だ。何故なら、彼等は不可能事のために戦っているのだから、と。だが福沢の意見はちがいます。彼はたてしてみるつもりです。彼の友人の Yassui（安井真八郎）も、彼と同じ見解のようには私に思われます。

ロイドの警戒がきびしいので、オリファントが会うことの出来たのは、2 人の上級メンバーと福沢だけで、しかも彼等はロイドの目を盗んでそっと訪ねてくる、とオリファントは書いている。又彼は福沢が夜おそらく英国人の友人を訪問したという理由で、1 週間の間彼を寝室に監禁したことを記している。この事件が留学生たちを怒らせ、ついにロイドから独立を獲得し、分宿に成功した頃末が、外山捨八の日記に詳記されている。この友人がオリファントでなかったとしても、オリファントへの警戒がおそれらくロイドをしてこのきびしい処置をとらせたのであろう。この事件のおきたのは、1868 年 7 月 3 日であった。この頃にハリスは『日本の予言』をかいた。またその 1 週間後には、薩摩の留学生たちはモノプランの事に関連して、藩政府に建言書を書いた。彼等は、ハリスの教が彼等に保証する「愛と協力の力」だけが、日本人を外国人の手から守ることが出来ると信じて、ハリスに従学するため米国に渡

(1) 原平三，桜川幕府の英国留学生（『歴史地理』79—8035頁。
(2) Oliphant to Cowper, 1st Dec. (1867)，なお彼は英国の外務大臣から「日本人14人の世話」を命じられていた（前引原平三論文34頁）
(3) 原平三，前掲論文，38—40頁
る意志を堅めていた。これはまさにそうした時期の出来事であったのである。

この「大君の日本人」にたいして、もう一度接近を試みようという気持をオリファントに
おこさせたのは、「将軍一個体」が辞職したという報道であった。このニュースが新生社に
伝えられたときの社中一同の歓喜の顔を、永井は次のように書き記している。

将軍には辞職政摺 国家を拱し奉り賢明之諸侯等之公会相開候議当国新報に 相見得一統
欣然躍舞仕候次第、成ニ難尽筆紙候へば我信之契兄「オリファント」氏ニも折柄同席ニ
面、余ニ欣賞ニ時を移せる形勢。ハリス先生ニハ此新報を見、余り嬉しく幕謁ニ及ばれ
し次第其切崎御親察被下かし、……（1868年1月9日附元丸、吉田文書245）

このようにして、オリファントは12月1日附で直ちにクーパーに手紙を書いた。その
手紙によって我々は、幕府留学生に関するオリファントの経験を迎ることができるのである。
同じ手紙の中でオリファントはクーパーのために彼の日本人観と、彼等に接近する際に注意
すべき事項を書き送った。日本の青年たちが、このような資質と精神をもつ人間であると知
ったことがハリスとオリファントに日本を、「世界がかけて見たことのない新しい文明」を
築く事業における拠点と計算させたのであった。日本人の資質中彼を惹
きつけた第一のものは、彼等の人間の内の状態から発する「気」sphereにたいする素直なとよ
い感受性であった。さらに単純で気高い性質と、よく生きようとするつよい意志と、真実と
知りえたことを行いと生活の中に活かそうとする勇猛心であった。武士である彼等の身につ
いた徳のうちに、かなり多くハリス的倫理の主徳に通ずるものがあったことは、ハリスやオ
リファントの彼等への傾倒の秘密をある程度まで説明するのである。しかし教義にわたるこ
とは、彼等をひとりでに迷惑させる。日本人に近づこうとする場合この点を十分に考慮に入れる
必要をオリファントは強調した。

功をいそがず慎重にすすんで下さい。求められたときに、彼等の状態に合わせて、ハリス
の考えを取捨して話し示して下さい。何よりも、ハリスの考えによってのみ「愛と協同の力」
が彼等の間に確保される、そのときはじめて外国人にたいして日本を守ることが出来る
というものを力説することが大切です。

次に引用するオリファントの手紙の一節はハリスとオリファントを通じて、はじめてキリ
スト教に接した若い日本の武士たちが、どのようにこれを受けとめたかを示す興味ふかい記
録をふくんでいる。

深い謙遜と己れの絶対的な殺滅の必要性の観念は、彼等は即座に受け入れられます。またど
うすればよりよく生きられかを学ぶことを彼等はよろこびます。だが、動機とか信仰に
よる義理とか復活の教義は、おぞろしく彼等を当惑させるのです。山上の重訓は、おう
ことなく何度でもよみかえし、生活の中にそれを具現しようとつとめます。……私はク
ーパー夫人が（若い日本人をハリスの許に導くという）この「道のための も くろ み」
missionary enterprise のため、熱心に貴君に協力をだそうと期待しています。それ
はもっとも崇高な成果をもたらすでしょう。そして貴君と彼女は黄金時代が過ぎ去って以後、世界がかつて見たことのない高い文明のため、その基礎を築くのを助けることになるのです。

日本本来の心術の学問

1867年12月29日附の手紙の中でオリサントは、日本人が「みな彼等の研究をはじめた」ことを報告している。この時期から日本人たちは、本格的にthe advanced Japaneseとしての任務に没するための訓練をうけはじめたと考えてよい。それは「日本の予言」が書かれた時期に比して、当然内容が幅広い拡張があったと考えてよい。王政復古によって国家回復の一歩が大きくふみ出されたからである。彼等に期待されるものは今や一藩を拠点としての戦いではない。彼等は直接に新しい国家建設の中で、それぞれの任務を引き受けることができるのである。日本人がそれぞれに彼等の studies をはじめたという語は、私には、彼等がそれぞれに主とする分野を定めて、その分野の研究に着手したことを意味しているように感じられる。森はここですでに教育を己の研究の主題として択んだであろう。木村は、

先生等は（ハリスに）先だって米国に航じボルトトンなる彼の宅に寄り、彼は葡萄園を所有し其を養する所の学生をして各々労役に服せしみるを常とする。而して先生はパン焼きに従事したりと詠む。局線類藤苦薄を苦辿るが如し。然れども先生は其処の元老に塊へたるのみならず、余暇があれば同国教科書を蒐覧するを勉めたり。

と述べているが新生社の生活原則を考えると、この教科書集収は、the Useによって、自己に課せられた「用」の中でにおいてしかしながらるものではないかということは明かである。永井は大前（吉原）とともに政治の学を択んでいたと思われる。我々はこの学校をただちに「日本の予言」の中に指されている「知ることの望ましいすべてを教える学校」に推すべきではない。The advanced Japaneseがもし、それに関係をもつ場合は、その中で何らかの分野の学問を教える teaching staffとしてである旨であった。

（注） 永井は1869年10月27日附（工藤）十郎他宛書簡（吉田文書262）の中で「大前（吉原のこと）と私とは政学を志し同学生同窓」とのべているが、同日附江藤介次宛書状（吉田文書263）には、「同両兄発来以来より僕には政治の学を相学度志相立候ま第今日に至り。ある。この「両兄」がもし沢井、野田を指すとすれば、彼等が政治の学に志したのは新生社在社中のことになる。しかし、新生社の日本人中、沢井野田以外にも一足先に帰国した人がいた。松村の「洋行談」によれば仁礼と谷元がそうだが、その時期は判らない。また吉田文書1453及び2521に名左之は若川先生の帰国が指している。これが誰を指すか不明だが、その帰国は1869年7月27日（横浜着）のことであった。さらに同文書。2895によれば1868年9月9日の便船によって、宛名名立賀（島田。久松、村上、永井、松村）が帰国することに決まったことがうかがわれる。杉浦の名が見えないが、彼が永井とともに一旦帰国の決心をしたことは、後引永井杉浦宛の花房書簡（1868年7月5日附、吉田文書2452）に
よって明かである。もっとも、永井、松村、松村は帰国を思い止まって、その後間もなく、ラトガース大学に入学した。島田、久松は1868年7月6日現在でモンソンにいたが、1869年8月2日にはモンソンにいない。その後彼等の消息は絶えているが、あるいは彼等は、1868年に予定とおり帰国したのかもしれない。1869年4月5日付のロレッソ・オリファントの手紙に「また日本から書くが」の文がある。我々の4人の日本人は依然とカドの側近にあって高い地位を占めている。あるのは、沢井、野田の外に2人の「我等の日本人」が帰国していることを示す。これが久松、島田であるかもしれない。彼等はモンソンとのうちの2人であることはわかるが、そのうちの誰であるかはわからない。もしこの推定が正しく、「両兄」と久松、島田を指すとすれば永井たちの政治的学問への志は、やはり新生社当時からのものになる。

もっとも、永井は杉浦、松村と共にラトガース入ったときは、理科のコースをとった。これがあっても、入学期の永井がラトガースを選学して、ウィルブローム・アカデミーに転じた理由であったかもしれない。

勿論、新生社における本来の学は、この種の「研究」ではなく、「進んだ日本人」をつくる基本の学は別に存した。彼等は何よりもそれぞれの程度において「再生の」でなければならなかったからである。新生社入りをしてしばらくの間、彼等は新生社の客であったであろう。前引1869年1月9日付永井書状が、前年11月末に新生社に入ったモンソンの三士について語っているところは、ある時期までは、程度の差はあれ、社中の日本人すべてに共通の生活のかたちであったろう。モンソンの三士は、前にも記したように、500余里を離れせず、ハリスを訪れてブロックトンに到った。ハリスを見ると「その大徳に感じて立ところに門弟らを本書信」と云われ「翁の愛養を懐ることもっても尊し」とのべた永井は、つづいて「シカシテ当分挙兄弟骨肉之まじわをなし相楽み、翁の心に講習、勉学罷在」という。これがある時期までの三士の生活であったのである。これはまた、ある時期までのすべての日本人の生活であったろう。ロレッソ・オリファントの手紙で見せた新生社の生活に、よろこびに面を輝かせながらきびしい労働に従い、まだ、はじめて人生の幸福を知ったと述懐する日本人と同じ姿をここに見ることが出来るのである。彼等は勿論労働を課せられていた。しかしこの生活の前面に出ているのは、社中の人々（彼等はbrothers and sistersと呼ばれていた）との「骨肉の交り」をインジョイしながら、ハリスの心に講習し、また勉学に割るという、むしろ新生社中の中分の姿である。そこでは新生社は「愛の気」と労働の生活に代表されている。我々が次稿に引用する新井逆流書簡の中に見るものもままに同じような新生社の「客分」として社中に入っただ人間の目に映ったハリス会社の姿である。しかし学校設置の目的が「個々の日本人と日本全体の再生」の事業における、いわば「前衛」をつくることについて以上、やがて日本人たちも新生社中の凡ての人々と真に「兄弟」の関係に入るために、何が求められるかを学ばねばならない時がくる。それは彼等が新生社の学問のような進んだ階級に入る事であり、真に「新生の真理」をうけるために通じぬければならないきびしい関門にさしかかることであった。そこに新生社の生活の根底を支えている

* Oliphant, do, Sept. (1867)
諸原理あるいは倫理との対処がはじまるのである。

我々は幸せに導かれた在米一年の経験の中に、新生社の学問についての沢井、野田の証言をもっている。そこには、そのきびしい関門の前にともすればどちらもとる彼等の姿がある。

エルハリスは退間村居、門人30人余り、相共に賛して講師せり。其教えるや書を探むを主とせず、講論を貴ばず、尊ず良心を磨き、私心を去る実行を主とし、日課作業間断無し、猶は霊然なる春風の室に入りたる心地せり。然しながら私心を挾む人は1日も塩へがたく、偶々慕い来し人でありらず帰り去る者のみにて、遂にその堂を窓うこと不能。藤の両人も初は中々構がたりしが僅に接続の力を得て、本来心術の學問に入りたり。

この手紙の中ではこの経験は、藤の両人をみることとなっている。他の両人にふれる必要がないとこの二人は判断したか、あるいは話が永井松村におよぶのを適当でないと判断したか、そのつれが否かはわからない。あるいは、彼等は、二人だけが僅かに接続の力を得て、ハリスの本来心術の学問にふれることを得たと考えていたのかもしれない。いずれにせよハリスの教の堂奥にいたる道には、うまくかのか関門があった。そのどこかで藤藩留学生の中のある者は読ず、あるものはそれに通じず。その関門は何であったか。新生社の日本人間に分裂が生じ、あるものは去り、あるものは残った。このきっかけとなったのは何であるか。これをさぐることが、沢井野田の報告にしたがって小橋が新生社の本来心術の学問と呼んでいるものの内容について兼及の手がかかりを提供するであろう。新生社は愛の気の故に「霊然なる春風の室」であったが、それは同時に私心を挾むものには1日も止りがたいきびしい社会であった。日本人たちはその資質と、特に武士として身につけているモラルと錬練によって、「愛の気」をたしかにうけとめ、絶対の「自己の殺滅」によってオリファントやハリスをよろこばせ驚嘆させた。しかしこの否定するべきものとされる「私」や「己」の中に、彼等の倫理意識が甚だしい途和を感ぜずにいられないものに出会うことになる。これは沢井の経験に即していえば、かねて帯然と予感されていた汚魂洗濯の正念場にさしかかったことを意味している。

ハリスとオリファントに関する唯一の学問的な研究書である A Prophet and A Pilgrim*の中で。著者は

*By Herbert W. Schneider and George Lawton, Columbia Univ. Press, 1942

ブロックトンにおける最も珍らしい客は、20人ばかりの日本人クリスチャンである。その大部分は侍階級のものであり、あるものはオリファントの影響によってハリスの「二面ー」の福音を学ぶために新生社に来た。

とのべ、このうち長沢を含む四人は正規のメンバー(permanent members)になったと
書いている(p. 154)。彼等が「二面一」(The Two-in-One)の福音を学ぶためにもいわれているのはまさに唯一の日本の守りとしての「愛と協同の力 Power of love and cooperation」の福音と同じものである。新生社の日本人の客たちが約20人といわれているのも、オリファントの手紙や68年1月9日付永井書簡の告げるところと一致する。この四人を直ちに分裂のさい新生社にのこった四人を見るわけにはゆかないが、しかし英国から米国に渡ってハリスの許に身をよせた六人中永井、杉浦、松村の3人が新生社を去り、野田と沢井、長沢が野村一介と共に新生社に残ったから、分裂ののちに残った日本人はまさに4人であった。ハリスの教義を信条的にどうかとめぐっておきた「分裂」事件において、沢井が野田、長沢とともにハリスの許に残った人間であるという事実は小さくない意味をもつ。ではこの「分裂事件」とはどういう事件であったのだろうか。

まずローレンス・オリファントの、この事件についての報告を聞こう。この事件のおきたのは1689年5月の、おそらくは中旬のことであった。結城が英国から米国にきてプロクトンの新生社を訪れたのが5月22日のことと推定されるからである。オリファントは長い間この事件をラクストン家の追放事件と共に、クーパーに伏せておいた。そのたびには彼はクーパーにたいし、半年におよぶ異例の沈黙を守らなければならなかった。クーパーの手紙に返事をとく事さえ出来なかった。この沈黙は明らかに二つの事件の結果である。それははこの二つの事件は彼等にふかい傷痕を残した。ハリスもダビも病気になった。その間にラクストンからこの追放事件についての報をきき、さらにその真実の実現のために一方ならず尽力した結城に関して報告のないのをいぶかかったクーパーは、ラクストンと結城のことに関して説明を求めた。オリファントは返事を余儀なくされた。

11月6日付の手紙でオリファントは、じめてこの二つの事件について語った。日本人の事件に関するオリファントの記事は、極めて発表である。彼は結城に関してその報告の義務を果すためにだけこの事件にふれる。出来ならば彼はこの事件に完全にふれずにすませたかったにちがいない。発表であるのは、それだけ彼の心の痛手のふかさを物語る。それも当然で、オリファントとハリスの日本人による期待は大きく。又それは報われつつあるよう見えたのである。事件前に書かれた最後の手紙（4月12日付）の中でオリファントはOur Japanese are such precious treasures to us here。といた。そして日本人の存在は外部の人目の注意をも惹きつつあった。その変貌は彼等の目にも鮮かに映ったのである。4月30日付のニューヨークのThe Sunは、新生社中の日本人について次のよう記事をかかげた。

我々はその一人に短い会を見た。1日の労働を終えて彼は書斎（といっても実は作業場の一隅にすぎないが）で聖書を勉強していた。この褐色の異教徒は精神的にも肉体的にも生まれ変わった（born again）ように見えた。彼は幸福で一杯であった。正義の太陽の

* Oliphant, do, 5th Oct. 1866
ジェウナイダーの引用によれば1860年4月30日付 The Sun の記事となっているが、新生社の発足は1861年であり、かつ、1867年以前には日本人メンバーはなかったから、この日付の「年」は誤植であるとならない。新生社の日本人が世間の注目を集めてこの記事となったとき、そこに12人の日本が揃っていた1868年の4月の誤と見るのがおそらく正しいであろう（追記参照）。そうだとすれば、ラクストン事件のおきる前後のことで「分裂」直前の時期の日本人の生活をこの記事は伝えておりることになる。この分裂ラクストンの新生社からの退去あるいは追放がきっかけとなっておきたと私は想像する。ラクストン一家は1868年春新生社に来くて短い期間住んで再び英国に去ったのである。

ハリスもオリファントもさらにクーパー夫妻も特別の愛着と期待をもっていた土佐の少年結城と新生社の縁もうすいものであった。

結城について申しますと、彼は「日本人の事件の決定的な瞬間（at the critical moment of our Japanese affairs）に到着しました。12名の中の8名が愛国的な理由で退去することになった、そのうちのあらるものはすでに新生社を去り、他がまさに去ろうとしていた。彼等がつくり出した圧迫が余りにつよくのしかかったため、彼はフェイスフルに会うことさえ拒んだ。そしてダビと私が熱心に頼んだけれども、そして一時は困難にうつつかないように思われたけれども、遂にももちこたえることが出来ず、1週間の滞在のち、彼等と共に去り、次の便船で日本に帰ってしまいました。

この「愛国的理由によって」といわれている事の内容については、誌津尺魔の「長沢記伝」（未刊、米国リッチモンド市伊地知幸介氏蔵。なお、同氏は長沢の甥伊地知共喜氏の令息で長沢の後継者と定められている）の伝えるところによれば

ハリス門下の日本人たちの間に、ある日、日本と米国との間に戦争が起きただろうようなかということが問題になった。あるものは、中立の立場をとるという、あるものは、米国を敵として戦うと主張し、議論が果てなかった。彼らはハリスの裁断をもとめた。ハリスの答えは——私は日米両国の間に戦争が起きると信じない。しかし仮にそれが起きたとすれば、我々は神のために、その義のために戦うべきで国籍は何問べきでない、というものであった。

これはこの事件に立会った長沢から聞いてつくれられた記事である。ロレンス・オリファントの証言にも合致する。しかしこの事件の根底には、根のふかいい原理的な問題がひそんで

* Schneider-Lawton, p. 224
いた。この事を我々はオリファントが同じ手紙の中でラクストン事件を説明することを通じて認めるのである。オリファントはラクストン問題の核心が、the Use の中におけるハリスの the pivot（権軸）としての地位と権威をめぐるものであったことを示唆して次の如く語るのである。

ラクストン夫人はここに来る前にフェイスフルの「神聖な使命」を認めた記憶がないといいたいようです。しかし「彼」(神) がここで建てつある（と我々は信じています）「彼」自身の新しい王国の、内なる紀律（internal discipline）に関しては「彼」はその意志をフェイスフルを通じて語るということを信じない人は、勿論ここに来るべきでなかったのです。

ラクストン夫人をしても、ハリスの権威にたいする反抗に駆られたものは、親と子の間の倫理——親の子に対する愛情と責任の問題に関するハリスの苛酷な要求であった。ハリスはラクストン夫妻がその鉱たちと一緒に暮らすことを許さなかったのである。新生社の中では、成員はどこに誰と——どのグループと住むかを決めるのはハリスであった。またその組み合せは、ハリスのその成員の心的状態についての判断にしたがって、頻々と変えられた。

夫と妻、また親と子は、必ずしも自分に離れて住むことを要求されることはかぎらなかった。しかし神の愛は血縁の愛 love of kin よりも高いということを教える必要があるとハリスが感じると、その愛情が私愛であることを止めて普遍のものになるまで、彼等は引きはなされた。

子供たちは、しかし通例子供たちだけで生活し、特に選ばれた人が、その世話に当った。親はその子、子はその親に、特別の愛着を抱くことを制すると共に、親からの悪い感化をも防ぐためであって、親と子が引き離されて生きることは、オリファントにとっても実は嫌えないことであった。しかし、神への愛を己の中にたしかにするため、これをも嫌えなければならないと彼は思い定めていた。ラクストン事件と日本人の問題を報告した書簡の中で、オリファントは、主の命ずるところは文字通り従われるべからざるとして、次のように記している。

母のことについていえば、私は「彼」(神) のことばにたじろがずに、絶対的にこれに従うことを欲します。（我々にもっと近しいものはいないことを教えてくれるこれらの聖句は、単なることばのあやとして受けとられはいけないのである。）「わたしの母とは誰のことか。私の兄弟とはだれのことか。ごらんなさい。ここに私の母、私の兄弟がいる。天にいます私の父のみここを思うものは、誰でも私の兄弟、また姉妹また母のもである。」我々が旧い状態の中で、我々の最善かつ純粋の愛情を見失してきたものが、実は剣錯したものであることが示された。自然の愛情は止揚 (regeneration) され

(1) Schneider-Lawton; P. 159
(2) マタイ伝 XI, 46〜50
なけれはならば。凡ての地上ものへの愛はキリストに向って 切りかえられなければ
ならない……。これを成就する道を教えることの出来るのは、ここ生の生活だけです。私
は、これだけでもこの生活を真実だと信じます。

オリファントはまた他のおぞるべき聖句を引く。これも亦きびしく文字通りに解されねば
ならないと彼は考える。

私のために、また福音のために、家あるいは兄弟、あるいは姉妹、あるいは父、あるいは
母、あるいは妻、あるいは子、あるいは土地を捨てるものはいない。しかし、もしあ
れば彼はこの世で幾百倍の家、兄弟、姉妹、母、子、および地を、迫害と共に受け、そ
して来るべき世において永遠の生をうけるであろう。

オリファントはこれを自分の身の上に文字通りにおきつつある事実として受けとめている。
右に引かれている聖句はオリファントの読みにしたがったもの、アンダーラインは、オリフ
ァントの施したものである。特に、この世で幾百倍の家、兄弟、姉妹、母子、等を「迫害とと
もに」うけるであろうと記すところは、ハリス的な福音の性格を現しに表現したものといえ
る。子は父母を、父母はその子を「彼」以上に愛することは許されない。キリストのこの戒
めが、新生社ではその生の生活を律する「根本律法」であった。私愛はその根源において断た
れる。新生社（The Brotherhood of the New Life）は、かくしてキリストによって新造さ
れた人間が、brothers and sisters として生きる「小世界」である。ハリスは世界と人類
にこの brotherhood を拡充することによって世が救われ新しい文明が成就すると信じた。

オリファントはブロックトンの新生社を This vital germ of our Lord's New Kingdom
(註) と信じたのである。

（註）ハリスはBrotherhood of the New Life, its Fact, Law, Method and Purpose（Santa Rosa, 
1891）というパンフレットの中で「私は半世紀の間、New Harmonic Civilizationを夢みてきた。
キリストの時代が到来して、凡ての恐慌、敵対行為、更に凡ての悲惨と貧乏がなくなり、ここに世界
が平和をたるし新し、新しい黄金時代がくる。」ハリスはこの新しい黄金時代が実現するために科学の進
歩は瞬次のものであり、一義的に求められるものは、すべての人間が神を父母として、じきじき
に、そして絶対的に、(filially, personally, absolutely) 知って、神において、一つの社会体として
一つになることだと信じたのである。（同書1～3頁）

「二面一」なる愛が成就されるために、私愛が根源から断たれねばならない。新生社はこ
のことの成就のために道をそなえる。それは生活的体系であった。ハリスは教会でなく「共
同体」を組織した。それによって「心をつくし精神をつくし、力をつくし思をつくし、神を
愛すること」と「自分を愛するように隣人を愛すること」とその二つの大いしいしめ（律

(1) do, 6th Nov. (1868)
(2) do, 17th Feb. 参照1868
(3) マタイ伝 XIX, 29 参照
(4) Oliphant, do, 6th Nov. (1868)
法）の実行を保証しようとするのである。人はそれによって生命をうける。世界も人類も一体となり、救われる。こうして実現すべき新しい神の王国のための死活的重要性をもつ観念、あるいは拠点として新生社会が維持されるためには、ハリスがその中で神聖な使命をもつ the pivot として特別の地位をとることが必要であった。新生社会の「法」は、ハリスによって課せられたものとしてでなく、神からのものとして受け入れられなければならない。そして「内向的意識はそれを疑わないこととして認め、そして良心はこれに従うことを命ずる」とオリファントは信じた。

「二面一」の福音が、最初日本人留学生たちをよく捉えたのは、それのみが「国家の一体性」を確立させると信じられたからであった。しかしその前提として、自然的なときわによると倫理的表現は一旦「私」として否定されなければならない。それは容易でない問題であった。ハリスの教義の中では、「二面一」なる愛の原型として夫婦愛 Conjugal love が説かれていた。それについてのオリファントの訳解を引用して見よう。それはハリスの愛の福音の根拠に、如何にきびしい私愛の否定があったかを明かにするであろう。国家への愛もそれ自体としては、私愛あるいは私欲にすぎないというのがハリスの教であった。

もっとも高い、そして純粋な種類の愛に到達するためには、彼等はお互いを絶対に神に選ばることからはじめなければならぬ。彼等は、全く副次的になし、お互いに相手に属するとか、このことから許されない。彼等が結ばれるのは、自分たちを満足させるためではない。それは、隣っているよりも、結ばれることによって、より有用な（神の）下僕であるためである。しかし、もしそれが、「用」をとげるためであるならば、神は彼等をしばらく引き離すことをよろこび給う。彼等が離れてあることによって、神の業がすすむと感じられるようには、離れている苦痛を補って余りがある。彼等の神により近づくにつれ、お互い相手の中にいる、神からのものと彼等が見るものを愛しはじめる。そして二人の中にある神的なものが、いわば合体する。そのときその結びつきは、われわれの思考を越えたものになる。……我々は神の下僕となるのだから、神に奉仕する行為の中においてのみ、相互に愛し合うのである。一言にすれば、我々が、お互いに他を愛する以上に神を愛することを、つとめなければならない。我々のある人への愛は、その人が神への愛を増しその程度に応じてしか、増すことが出来ないからである。

（註）のちにオリファントは新生社会のため、タイムズの特派員として普仏戦争下のパリに駐在中、Alice le Strange と恋をおこし、ハリスは容易に二人の結婚を許さなかったが、最後に夫と妻として同様しないことを条件として結婚を許した。二人は1872年にロンドンで挙式した。彼等は12年の間恩実にこの約束を守ったといわれる。

* Olfphant, do. 3rd Jan. (1868)
* Schenider-Lawton, p. 264, 415n
森 有 礼 研 究

(2)

新生社中の日本人の間に、「分裂」をもたらしたものは、オリファントによれば、「愛国の問題」であった。長沢志雄の中にそれを裏付ける証言がある。しかし杉浦の手紙と、沢井、野田の告白の書簡を照合してみると、争点となったものはさらに原理的で、ハリスの教義と新生社中におけるハリスの地位と権威にかなりかかっていたことが、推測されるのである。婆や、子に対する愛情が私愛として否定されることに日本の武士たちは殆ど抵抗を感じなかったかかもしれない。しかし子を親から引離すハリスの命令に抵抗して、社を逐われたラグストン一家（彼等は財産を社に献げて入社した）の同情が、ハリスへの絶対信従という鉄則への疑念を生んだことは十分に考えられる。これはやがてハリスの「神聖なる使命」を前提とするthe pivotという地位への懐疑につながった。そこに「愛国の問題」がおきた。神以上に国を重視するが、明白に否定きるべき私愛を断じられたことで、新生社に止ってその理想に献身すると共に、あるいは不可能と感じる心の状態が、日本人の多くのものの中で動かないものになったのである。

新生社からの退去は、杉浦にとってはある意味で英附でハリス従学を決意したとき以来の動機が貫かれることであった。彼一引の彼の手紙がこれを見逃すに、しかし沢井にとっては、はっきりとそれは再転向であった。彼はかつて仲間の先頭に立って新生社に入り、また一人で多くの人を新生社に誘引しようとした。今度は先頭にたてそこでを出、また日本人を最後の一一人までそこから連れ出すことに全力を傾けた。彼のこの行動にハリスもオリファントもふかく傷ついた。オリファントはクーペに次のような言葉を書き送っている。

永井を貴兄は多分御記憶のことと存じます。ここに来た人間のうちもっとも将来有望でかつ信仰のもっとも深く愛着していると感じた人でした。また、私がもっとも信頼し、もっとも深く愛着した人でした。私共はじめてアメリカを訪れたもので、この人でした。ところがこの人が、今では同国人を最後の一一人まで、我々から引き寄せるため、もっとも熱心な動きをつづいているのです。彼はうわべではこの上もない友情を示しながら、もっとも親しみをなしつつあるのです。

(1) 二通の永井杉浦宛結城書簡（吉田文書2514、2852）参照

(2) do, 28th May, 1949

ここで結城の足どりを調べて見よう。彼が新生社に到ったのち、杉浦も杉浦もすでに新生社を去ったのちであった。彼をもっとも混乱した新生社に誘ったのが永井であったから、永井の退去を知ったのは、彼をひどく混乱させたのにちがいない。ダビッドオリファントに強いて引止められて結城は一週間だけ新生社に泊った上、そこで去った。それが5月29日である。30日にモンソングに付き、藤原の吉田英郎方に二泊、他に藤原留学生たちとも会っただけ。彼はここで初めて、杉浦と杉浦がニューブランスクウィックで研究中であることを知った。6月15日付のモンソングに書いた結城は12時にボストンに去った。ここには岡山藩の花房虎太
郎と摂植がいた。土佐藩に係わるあるフレンチ方に身を寄せて帰国の便船を持ちうち、結城はモンソンの吉田からの手紙で、野田、沢井の帰国を知った。彼は杉浦、永井に宛てた手紙（1868年6月31日附、吉田文書2852）の中に、

吉田氏の書中に、野田、沢井二氏当月6日速かにブロトン発車にて日本之様御帰国之
暹子受玉り候得共如何之神教にて詳詳かに開知せず、定めて大なる神教と奉楽候、何卒
右之両状次下御寄せ度奉願候。

と書いていた。神意にしたがった行動のみが正しいとする思想の、新生社風の表現だとい
ってよい。

結城は7月7日にボストンを出発してニューヨークに赴きそこで永井、杉浦に会って、9
日に出帆、サンフランシスコ経由、日本に向かった。この時結城に託して花房が永井、杉浦に
贈った手紙（7月5日附）が残っている（吉田文書2452）。この手紙は二人の新生社退去がど
のような印象をこの人に与えたかを物語って興味がふかい。その一部を引用しておく。

御両所様より御発書先＝拝見仕候、此節之御進退振りの儀＝仪 不顧矢敬卒忽相伺候処御
叮嚀＝御書通被成下、尚結城子よりも承り御心事委細拝承仕候。前後之御苦慮嘆かしと
奉答候。小生儀も先頃湖辺之雪を衝て参候節、可処之々候故御承知の通歳々疑問を
も発し尚且て落ずることの不少候故 不得止一旦立帰り候事＝御座候得共、每々貴兄方の
御決意之急も存出し今一度は是非とも参り候て尚雅宛候半と存じ居候処＝御座候得共
此節諸君之御識論之趣を以ては愈々不可信也のと決定致候故、最早存留りし事＝御座候。

この手紙によってみても花房も亦、一旦は新生社入を考慮していたことが窺われる。し
かしハリスの教について疑念をとくことが出来なかったため、わざわざ雪をおかしてブロク
トンを訪ねながら、「止むを得ず」立帰った。そのときひたすら説得にとめたのが永井と
杉浦（おそらくもっぱら永井であったろう）であった。それは、「先頃湖辺の雪を衝いて」
とあるところから見て年の明けからの冬、すなわち1868年の1月か2月か3月のことであ
ったろう。エリ湖畔という土地を考えると、場合によっては4月であったかもしれない。
一旦立帰っては見たが、永井等の「決意の急」を思って、なお再訪を花房は考えていた。そ
れだけに、永井たちの「進退振り」が納得出来ず、手紙を書き、その返書とさらに結城の補
足説明を得て了解したというのである。

永井と杉浦のこの時の返書が見られないのは遺憾だが、幸いこの事件があってから1年余
り経った1869年8月2日附の、杉浦のこの新生社退去事件の際と現在の心事をのべた長文の
手紙が残っている。松村淳蔵との連名で宛名人はモンソンの三人、すなわち吉田（彦）、大原
工藤である。ここに引用するのは原書稿の約4分の3にあたる。省略した部分には、函館に
拝って王様に抗した桜木のことが、かなり詳く論評されているほか、昨年8月以来フェリス
から永井と松村と3人の費用洋銀765枚を借用したこと、永井が7月27日にモンソンの近く
の Wilbrahm Academy に移ったことが記されている。
この手紙は名をつらぬ松村洋蔵は、いつも、もっとも冷然て「即物的」であったらしい。六人の仲間のうち、彼一人だけがついに最後までキリスト教に入信しないで通したらしい。しかも「分裂」の際も、退去の意志はハッキリ表明しながら、沢井、野田が帰国するときには、まだ新生社にとどまっていった。これが、後引の沢井、野田の「留別の書」の宛名の中に、彼の名だけが出ていない理由であろう。彼は政治的でも、感情的でもなく静かに己が理と信すところにしたがって進退した人間であろう。沢井、野田がブロックトンを発ってから間もなく、彼も永井、杉浦の手を追って、7月にはすでにニューブランスウィックに移り、9月に3人揃ってラトガース大学に入学した。しかしこ彼は結局初志を貫いた。1899年春にアノポリスの海軍兵学校に入学許され、その最初の日本人卒業生となる。次に紹介する手紙は筆記から見て、杉浦の手に成ることはたしかだが、その内容も明らかに杉浦のものである。これが松村との連名の手紙であることは興味深い。松村は永井をも含めてモンサンの三人（吉田、大原、工藤）にたいし、いわば副署して、宗教天教義上の問題とは別に、人間として杉浦の立場に支持を表明しているように見えるのである。私が永井を含めてとるのは、杉浦が昨年新生社を去る際「少数の友人は別として except a few friends 別段悪声も放たなかったし、はげしい譚論のやりとりもしなかったという場合の、その少数の友人に殆んと確実に永井が含まれていると思われるからである。これは、のち外僧募集問題の際の森にたいするはげしい個人攻撃を考えると極めて自然の推測である。

杉浦弘蔵の手紙

長沢義信付者先比呂、吉田兄江渕杉浦②御拝申上華遊通、日本ヨリ送財之都合相調び次第
ニハ早速彼方江縫越シ「ハリス」井「フリハント」江面会ヲ得箇と彼置大政府 appointment
之御所開向且ハ、彼ノ修学ノ経程ヲ継続談論ヲ破ノ及ビ充分ノ道理ヲ述べ彼方合点ソ、断然ト長沢
ニハ直ニ彼地ヲ出立セシメ伴と来リ申度切志ヲ既ノ此迄達ヘ忍ビ事ヲ得候。折柄此節ニハハ
乍不肖ノ之、金相達候得ハーヨモ速ニ彼方江縫越。此任ヲ相勤メ、急而ハ右之官 財 此地ノ
mail ヨリハ定而相付キ可申候バ格別間ヲ無ノ故、彼ノ間合書ハ其時一号ニ「ブロックトン」江
持参致シ右之ヲ談判ニ及ビ是非此志ヲ遂ゲ度決意ニ御坐候。尤杉浦彼地昨年出立ノ際別段悪
声ヲ出且ハ、彼ノ勧論ヲ破ニ除ナ日々ニ友ニ共ハ江縫越相持相勤メ、急而ハ右之官 財 此地ノ
Corresponding ヨリ取り候候ニ理會セラレ或る友之至リトシテ其部ハ寛直切ニ杉浦之 case イ於
ヒテハ互ニ love 之有様ニ彼地ヲ出立ニ後 Harrision 杉浦ガ名ヲ呼デ尚ホ New life of
brotherhood ヨーニ之仲ケ間致候議理会相成候候、急而ハ未ヲ何カ彼方ト Connection ノ
様ニ候命「ハリス」江対シ弥彼レハ敗従ノ者ト穹封デキ達シタラ彼氏オヨ程可然宜敷カトカ延リ
親敷 persuasion ニ預り候得共、愚存ニハ数ララス不肖ニ対シケリ之ヲ迄気ヲ取リ親切身

* 摘編、森有礼研究第1(東北大学教育学部研究年報第15集)19頁
feeling フ以テ他外ノ信神ヲ怨敵之如ク誅誅怒声スル等ノ義ハ愚存ニ於テ perfect right トハ至従モ心得不亜師神命ニモ "Love enemy" 又 "Every Kingdom divided against itself is brought to desolation and every city or house divided against himself shall not stand"。According to my view that there are so many different opinions among Christian sects, threfore I wish not to have any argument for creeds of different churches; but to study the Word of God earnestly, and to understand the real meaning & to be taught by the Spirit of God by continual prayer. Christ Himself says—They "that seek me shall find me" W emust work together for the Lord no matter whatever our denominations or duties may be. Each different members ニ依テ大同小異之説有之候〜パ方今ク all Christianity 合心同意ト云フハ甚ダ難キニ似タリ故ニ僕ノ切ニ祈願渴望スル処ハ右ノ小異説枝葉末派ニ抱ハラス只管五〜大道ノ源ヲ克ク探学致シ唯Pure & true teaching of Christ just as it is in the Gospels without any narrow sectarian or selfish feeling so I wish such a simple Christian religion will be introduced into our native land, while we reforming our laws into the universal in the World 左様我邦ニ於テ改革相全候〜ハ最初ヲハ千戈ノ難モ可有ノカ然レドモ其後ニ至リ上ミ天子ヨリ下モ庶人ニ至ル迄「一士ニ皆以修身為本」万民各其道ヲ踏ミ共職ニ附キ遊民モ少ク相成リ全国凡テ唯如一家騒謡ニ政ヲ以治メ付ケル大先生ミ出世在レカシト志願在ル事ニ御座候何レ当時60余宇ニ於テ大小学校ノ設ケ有ノ国民ノ心眼ヲ明開スルコト最モ当務ノ急タリ然レバ後年ニ到リ When children of God are guided into the Strait-gate the world itself could we live true Christian life will become one loving family in God forever more。陳而長沢モ何レ 始終農業而已相備居候而は不相思追々良医ト相成リ夫々国用ニ相立度。就而は池業ヲ不顧己レノ職挙ニ一向差ハマリ成学有之度蔵願之次第御座候得共速ニ是 School ニモノ入校勉学相調候様都合度儀ニ希望顧候。先ハ愚存之形行御相談申上候ママ是ニ付御賢説モ有ノラバ如何様トホ承知仕度奉伏願候〇先比「フリハント」ヨリ 亀江一封御承候願ニ少々例ノ如ク査撃之跡ニ当分ハ日本人僅カ1,2ノ間ダ「ブロック」江脇留致シ就而ハ長沢義「ハリス」之望ニ己レノ子同様ニ養育致度候間、先ッ彼方江滞在相叶候様々江illatorヨリ形行申上奥儀ニ相叶間數略併テ若シ其上〜公之御免モ無之候ハハ無致しても如何様トモ時宜ニ応シ望通リ所置可致トノ義ナリ、故ニ此節ハ直ニ差越シ全ク利蟹無道ニ諦判スル沢ニテハ無之最モ重ナル我主命 Love, Faith & Patience 之三戒ヲ克々保有姫ニ比方之趣意大巻ヲ充分相述ルニ於テハ「ハリス」ニモセ「フリハント」ニモセヨ they have no right to say any thing against it in the world (以下略)。

グリフィスは杉浦について、彼は日下部のように brilliant ではなかったが noble な人間であったと述べている。温和で誠実なその人柄は、この手紙の中にもじりに現れている。ハリスという特異の存在によってはじめてキリスト教にふれ、のちその許を離れてオーソドックス
のキリスト教に入り、受洗もした。（1870年ニューブランスウィックのThe Second Reformed Churchにおいて。牧師はHartranftであった。）というキリスト教に関する多角的な経験が、いろいろの問題を提起している。しかし今はその問題を追っている余裕はない。ただ一言っておきたいのは、霊霊の六人の留学生中この杉浦がもっとも純粋に信仰を信仰の問題として受けとめ、これをつきつめようと努めたことです。彼の経験は日本プロスタント史の見地からも相当重視されるべきものであろう。グリフィスのThe Rutgers Graduates in Japan, Albany (1886) 付載の日本学生 in Rutgers Collegeの中に杉浦に関して次のような記事がある。
「杉浦弘蔵（亀山義成の変名）は薩摩の英国留学生団の一人であるが、……Dunkirk 附近のある社会主義的狂信者の手に落ち、そこでの事態で、無視視の劣るに従事していた。これは彼等の言うところによると「肉体を十字架つけることによって、真の知識を求けるため」であった。彼は彼等から迫られてニューブランスウィックに到り、1867年（68年の訳り）ラトガース大学の理科に入り、1871年まで止った。それから岩倉使節団に通訳として随行することを命ぜられた。彼は世界を廻ってヨーロッパの殆ど凡ての元首に会い、1873年秋日本に帰った。彼は内務、文部、外務の各省に歴任、開成学校（東京帝国大学の前身）の校長となり、その発展に寄与した（下略）。なお日下部太郎は福井藩士で1867年ラトガース大学に入り、最優秀（特に数学）の成績で、4年で進級したが結核で客死、卒業者の扱いを受けた。（注）1871年10月23日附の吉田の永井大成少丞宛森少弁務官書状（吉田文書11）に「杉浦来る28日間帆、欧を経、帰朝に決す」とある。
Dunkirk 附近の社会主義的狂信者がプロクトンの新生社を指すことはいうまでもない。悪評のたかいこの一団に絶縁状を書くことを一友（米人か？）があって親切にすすめてくれた。それを杉浦は拒んでいる。はっきりした信仰の理由で袂をわかつて、再び復帰する意志が自分にない以上、自分の立場を救うために旧友に復帰を放つのは無用だというのである。彼が新生社を出たのは次ぎの理由に「本道（当）＝耶稣基督上帝之御敬意ヲ学パントノ切志」によるのであった。この状況の中で、彼はむしろ、ハリスのために弁護の労をさえとっている。ハリスは狂人でもなく、詐欺師でもない。ただ天性超自然の傾向がある。その素質にもとづく奇談を唯一の純粋で真実のキリストの教と自ら確信して、世界が皆彼の門に入れば、そこに万人が純粋の兄弟として共に生きる世界が成立すると信じているのだとする。彼はハリスを誠実な人間と認める。しかし「何千の誠実な人が彼の信じて教えることにおいて誤っている」とする。ハリスの誤ちを杉浦はどのような点に見ているのであろうか。
その第一は、「常人と異って深遠無形（穏？）の道に立ちぬ」天性から出た奇談あるいは空説であり、第二は、「この空説を唯一絶対の真理或はキリストの真説と信じて、他外の信仰を怨敵の如く罵る一種の宗派的反抗（Sectarian feeling）、そして第三に新生社においてハリスが the pivot として、これに絶対的信従を要求したその事実にかかわっている。これ
は明かに ラクストン事件との連関で大きくクローズアップされたのであろうが、もっとも本質的でバイタルな問題であった。杉浦は、クリスチャンは（その行動に関して）新約聖書によって導かれるべきであって、人間の意見によって導かれるべきではないと主張する。ハリスを通じて神が語り、また働くとする信の否定である。ハリスの神聖な使命を信じることのできなくなった杉浦にはこの新生社の生活は一旦も嬉しいものになった。そこを去ることはただちに生活上の危機を意味する。さらに多くの同志との袂別も堪えがたいものであった。しかし、彼は、自由になって本当にキリストと神の意志を学ぶために、新生社を去った。これが杉浦についての真実であったろう。杉浦の去就是一貫していた。しかし永井の場合、それは再転向であることを免れなかった。
(3)
分裂のあったのち、沢井と野田は、新生社に残った。彼等を踏み止らせたものは、何であろうか。幸いその心事を窺うための根本資料ともいうべき、沢井、野田の退去した同志7人に宛てた「留別の書」がコロンビア大学パトライ図書館のSpecial Collection 架蔵のHarris-Oliphant Papers中に発見された。これはオリンパスがクーパーに送ったコピーをさらに写したもので、筆跡によって筆者を推定することは出来ないが、これは杉浦、松村の場合と違ってまさしく二人の意志の表現であると見てよい。宛名は、久松、島田、大原、吉田（彦磨）工藤、永井、杉浦の7名で松村の名の見えない理由は先にのべた。これが書かれたのは、1868年6月17日で、バナマ海峡の海港Aspinwall（今のColon）に入港中の郵船H. Chauncey号の船中であった。二人はハリスの勧めにしたがって、その素志をひらがえして帰国の途上にあった。木村はハリスは「神託と称して二人に帰国をすすめた」と記している。カスパートの「ハリス伝」の中に二人の帰国に関して次のような記事がある。
ハリス氏は、彼等がその「内面的誘導」によって为主体に発せしてthe Useに残って直接にそのためにつくすよりも、彼等が身につけることの出来たかぎりでthe Useの精神そのものにしたがって、祖国の人民につくすのが適当であると思めたのである。
ハリスが熱心にその教義につとめていた日本人12人中8人が新生社を去ったことは、ハリスの日本再生計画に大きい打撃であった。しかし、ハリスは日本のために出来るだけのことをしようとした。彼等は残った四人の中から、沢井と野田を選んで、これを日本に送ったのである。彼等は「新生の真理を受け容れつつある」程度における「進んだ日本人」であった。彼等が独立でなしろのが極めて限られていたことをハリスは見ぬていたにちがいない。しかし「彼等が身につけることが出来たかぎりで」新生社の精神にしたがって新しい国家建設のために働くことが、彼等の祖国にたいして負う義務であるという判断がハリスにあったのであろう。いずれにせよ、彼等は決して大きな抱負をもって帰国したのでないことは注目さ

(1) 「森先生伝」31頁。
(2) Cuthbert, A. A, The Life and World-work of Thomas Lake Harris, Glasgow, 1908, p.192.
なるべきであろう。「知識のために、そのような祖国の現状に無知である我々を必要とし、言う
に足るほどへの寄与をなし得る見通しは殆どない。しかし我々はゆくことにきた、騒乱と
闇黒の中に身を投げ入れるために。そうすべきだと我々は信じるからである。王国の回復さ
れるための、もっともささやかな犠牲になることができるならば、我々は満足する。」これ
が帰国しようとする沢井と野田のハングルな願いであった。
本書状にしたがえ、二人が（ハリスのすすめにしたがって）帰国を決意したのは1868年
6月7日で、その翌日には二人はプロジェクトを離れている。この慌ただしい帰国にさいしても
二人は、新生社を退去した仲間の批判にたいして、ハリスとその教及び事業を擁護せずに
別れることができなかったのである。この手紙によっても、我々は彼等の間の争点がハリスの
「宗派」性と Divine Mission を中心とするものであったことがわかるのである。一年余りの
中に書かれた杉浦の手紙にたいして、この二人の手紙がそのまま回答となっていることは、
彼等の間で、ハリスの教義についてかなりの期間、論争が行われて争点が次第に明かになっ
ていたことを示すものであろう。
沢井と野田はオリファントと同じく、ハリスの聖使命を信じ、神がハリスを通じて人類の
救いのために働きつづけていることを感謝する。彼等は一言にすればハリスが新生社の「枢
軸」the pivot であることの必然性を認めるのである。この問題は改めて立入った考察を要す
る。もう一つ彼等が主張するのは、ハリスを通じて示されるような高次の実実については、「地
的人間的な」証明が成立しないということである。それは「主」の中に己れの生活を見出す
ことを飢え渇く如くに追い求めて、その子となる、再生の人にたいしてのみ開示される。こ
うして彼の内部に成就される状態こそ、神が人間のために定めた、本来の清浄の状態である。
それへの復帰によらないで真理を知るべきはない。
沢井と野田が旧同志に宛てた「留別の書」を、原文のまま引用しておく。翻訳によって彼
等の心情をそのまま伝えることは難しいからである。これが当時の二人の「内的情態」であ
った。これは公人として出発しようとしていた時に、彼等が何を信じ、また志していたかを
示す重要な原材料である。

沢井と野田の「留別の書」

Steamer H. Chauncy
June 17th, Aspinwall

We ought to have written even a few lines before we left Brocton, but on account
of our having been so much pressed for time, that we could attend only to some
very important and essential matters we could not do so. We expect however that
you have already heard of it from Matsmoola and the others. We made up our
minds on the 7th inst. and took our departure from Brocton on the 8th and arrived
at New York about 9 o'clock on the morning of the following day 9th. And at 12 we sailed out thence for Panama. The object of our going this time is nothing very special, but is simply to discharge our duty to our country. Though we know full well that we such ones, and with such a scanty knowledge, and moreover being so ignorant about the state of the affairs of the day; cannot anticipate, or even suppose to do much good to it, we concluded to go, throwing ourselves into the midst of disturbance and darkness, because we have felt we should. We should be exceedingly glad and fully satisfied if we could only be worthy to become even the very smallest prey for the sake of the restoration of the kingdom. We still feel, yea more and more, inexpressibly grateful towards the Lord our Heavenly Father, for He is through His beloved servant T. L. Harris working so infinitely and so mercifully for the salvation of all the inhabitants on the globe. It is a very possible thing that one who has not fully understood or who has never tried truly and generously to embody the Divine Life may fancy or may form some immaterial imaginations by his prejudices, that Mr. Harris' teachings are founded, not on the true Divine and universal, but rather on a small sectarian and earthly element. We have no wish to enter into this question at this moment, but would however beg leave to say a word or two in vindication of his teachings. Those who in reality hunger and thirst to find their life in the Lord, and to become his children, or rather to return to their proper and pure state originally ordained, shall doubtless arrive at the state in which they shall be able to bear the true acknowledgement concerning the teaching through Mr. Harris. And since it embraces within itself such an unwonted, wonderful, and influential element and activity, it will bear no earthly human testimony, and should of course no longer be within the compass of unregenerated human minds. Yet it will assuredly undergo the conviction of every unpredisposed and Godly principled character. It will convince every heart and mind of those who have put every test to prove it, and who have carefully examined and analyzed its elements.

The purpose of telling you all these things is but to make what we acknowledge clearly known to you, lest that you might have taken some untrue impressions, and that you might thereby have felt somehow badly towards the teachings. We may perhaps have gone in some expression or other, beyond the limit of our dignity, but we are very sure that if so, you will freely or generously pardon us.

May the most high guard you against every temptation and attraction of the
Prince of the World.

To Messers. Hisamatsu
Shimada
Obara
Yoshida
Kudo
Nagai
Soogiwoola

私はここでもう一度杉浦、永井のハリス批判においてもっとも決定的な争点をなしていた、ハリスが新生社において the pivot としてそのメンバーの絶対信従を要求した問題について考えてみたい。私の見るところでは、杉浦、永井をして新生社に止ることを不可能ならしめた原因は、彼等が新生社の the pivot としての地位をいわば「実体的に」ハリスに帰属するものを見つけていたと思われる。

しかし、新生社は、すでに再生をとげた人たちの Brotherhood であるよりは、むしろ基本的には自然的な自己の発展を目指す、生活の全面面における、四六時中の訓練の組織であった。はげしい労働とハリスへの絶対信従はこの目的に結び付く側面をもつ。シュナイダーもこの点を指摘していない。

新生社に入社をゆるされたメンバーはハリスにたいして、絶対の信従 unconditional obedience を約束した。彼が信者に為すことを求めるものは、その是非善悪を問うことなくそれはなされなければならない。彼が要求していたのは、メンバーがその精神的な転生 Spiritual transformation をとげられるまで判断を停止することであったらしい。

と書いてい。この解釈によれば、絶対信従は人間再生と高次の真実にたいする間隔を即ち己見の離脱を、究極的には私己の殺滅を、目指す訓練に結び付いた教育的な意味をもつ。

注 様威はハリスにではなく、ハリスを通して語りつつ植え付けるものであった。私はこの間の消息をもっともよく伝えるものとして敷紙（知識）の仏語修行においても役割に関連元の言葉とところで引用して、ハリスが本来新生社においてもっていた the pivot の任務についての脚注として用いたたいと思う。道元によれば、学道第一の目的は、「我が心にたがえども門の言はたび数の言理ならば、悪しそれに従って末の我見を改める」とのことだというにあった。さらに彼は真実の知識（師）へと到達を説いて次のように語るのである。

若者に神話をとことへる故実は、我が末より知り着け心、次第次第に知識の洞ばに隨ひて改めもてゆく。仏矣仏とと云ふは私が本より知りたちるやは相好光明具足と法名利生の消ありし駆逐払疎を仏と知識りも、知識若し仏と云は時調若數ぞと云へば、贈る若と云は仏と瞑に仏とし仏と子の知に親しみて末の言をしめる。次の仏の上上の仏の相好光明、種々の仏の所在の態を求むるも猶盲見あらたまらざるも、只当時の見ずる処を仏と知るなり。若し仏の知の異に隨ひて信見本

* Schneider-Lawton, p. 151
執をあらためて行かば自ら身命とあるべきなり。

「留別の書」の中でも、ロオレンス・オリファントの書籍の中でも、ハリスの聖使を信ずることは神のみが唯一の主、善きものの、教師であるとする厳しい原則に決して触らざるものでなかった。彼の教は、権威をもつのは、それが彼を「通じて語られるもの」だからである。しかし、彼は新生社とそのメンバーのために定める「法」や指示が、絶対的に従われなければならないのは、メンバーの内面意識がそれを神からのものと認め、かつ良心がこれに従うべきことを自己に命ずるからである。それ故にそれへの背反は不可避的に精神の後退と顕著をきたすのである。

すなわち、そこでの絶対信従は実は彼を通じて語りたる働くものにむけられている。人はそれを通じて自身と私々からの離脱をそれぞれの程度において成就し、キリストにおいて新たに生きる。そして再生の人は各自が自ら自己のpivotとなる。この全過程を通じて見て、はじめてハリスへの絶対信従の要求と彼自身の詩句*が調和をもって理解されうるのである。

杉浦は、直接に神の霊の導きを祈求しつつ聖書を読むことを通じて「主」に関する天的な知識に裕ることを期待している。しかし彼は人間の新に生活するところにじめて開示される真実を信じたいわけではない。又ハリスと共にキリスト教の真理は、世界が一家となるところに成就されることを信じている。杉浦が沢井や野田やオリファント等と決定的に異なるところは、ハリスの教の中にだけ純粋で真実のキリストの教を認めようとする態度を宗派的としても示すものである。彼は各宗各派はその宗教的感性を捨て、小異を捨てて大同につくることによって、単純で真実のキリストの教をさぐり当たるが出来ると、とても考えているかの如く一種の祈願主義の立場に近づいている。これにたいして、沢井は、人間が真実に生きるために再生の必要であることを信ずる。そしてキリストに於て、旧我が死に、再造の人となるきびしい過程の成就のために pivotとしてのハリスとそれへの絶対信従がその条件であることをふかく感じている。しかし、この pivot（枢軸）という地位はつねに実体化の危険につきまとわれている。そして事実、新生社の中にハリスを崇拝に「神の代理人」を見ると（註）傾向も生っていた。杉浦は敏感にこれを感じており反発したのであったかもしれない。

しかし pivotの否定は、もしがら、私を除けたきびしい全過程を通じての「人間再生」へのきびしい意志の喪失につながる。杉浦なしにはがった危険の道を歩んだ。そしてこれを歩み切らうとした。

この相異なる鑑別はのちに、彼等の信仰と公私の生活の上に何か見るべき影響を残してい

* Oliphant, do, 6th Nov. (1868)
* Harris, God's Breath in man and in Human Society, Fountain Grove, 1891 p. 54
ルだろうか。これをそれぞれの個人の生活の中に追跡することは容易ではない。私は主として、森の私生活の中に、いわば「沢井」の経験がどういう形で生きのこったか、あるいはあとかたもなく消えていったかを、追求してみたいと考える。

（注）オリファントのち、ハリスに不信を抱くようになって、彼をかかつつになるが、ハリス批判の中にこの枢軸人 pivotal man という観念があった。彼は「神がそれを通じてのみ人間に働きかけるという枢軸人を立てる神義ほど危険なものはない。それは初期教会にはじまりローマで典型的なもののがつくられ、今に至っている。それは人間の情熱と意志を理性を覚醒して、その前に階級人間をみじめな奴隷にする」というものである。しかしこの観念の本来の役割は、オリフィント自身の指摘するように、すべての人を、道義的にも、理的的にも、身の回り、教会や人間への役割から解放し、自分を自己自身の pivot からしめることにあったのである。（Schneider-Lawton, pp. 401 参照）

結章 必死苦学

森と鰐島（帰国とともに二人ははや沢井と野田でなくなる）は帰国することを神意（それ即ち祖国への義務）と信じて帰国した。彼等はそこで彼等が待っているものが何であるかについて何も知らない。また何が出来るかについても、抱負も見通しもなかった。ささやかな犠牲として役立つことができれば満足だというのが正直な彼等の気持ちであった。

だが、彼等を待ち焦がれていたものは、思いも寄せない「歓迎」であった。日本は近代的な国をつくる仕事に追われていた。指導者たちは手早くで働いていた。設計図らしいものを描く力は誰も持たなかった。こういう不祥のところに、3年の間欧米の社会に生活して帰った二人は、それだけで最新の知識の持ち主であった。二人はあらゆる分野でやっぱりだこになった。帰国後1年余りの森の履歴を一見すればそのことは明瞭である。それを福沢は、「幸運らしい不幸」とよくしているが、森自身はおそらくこれを少しも好運とは感じなかったであろう。その意味はやがて明らかになる。

明治元、二年中の森有礼の履歴

明治元年7月25日 徹士外国官領事事被仰付（22才）

" 年9月19日 議事体裁取調御用被仰付
" 年11月4日 学校取調兼勤被仰付
" 年12月4日 東京在勤被仰付

明治2年正月18日 軍務官裁判被仰付並＝外国官領兼勤（23才）

" 年3月12日 学校取調兼勤依頼被免
" 年7月23日 本官ヲ以テ当分議長同様可和心得旨被仰付
" 年4月17日 境ヲ職務被免制度案撰修被仰付
" 年7月19日 当分処制度案総裁ノ心得ヲ以テ可和勤務被仰付
" 年5月18日 境ヲ職務被免学校裁判被仰付
森 有 礼 研 究

年10月17日 本官ヲ以テ制度取調御用掛被仰付
年10月23日 学校判事被免制度取調御用掛是迄ノ通知被仰付
年6月20日 従士弁正迄ノ職務被免，但位記返上
年7月21日 勤仕中格別励情ノ事ニ依リ随布二百金百両下賜

次々に引受けることになった任務に必要な知識を森が持合せていなかったことはいうまでもない。だが，仕事が主に調査研究である間はよかった。この時期の彼の手になるもっとも実のある仕事は，公議所法則案の起草であったろう。12月にはこの作業が終った。森はその後第1条に，会議は律法を定めるもって第一要務とするとして，公議所を立法の府と規定した。法則案や公議所（明治2年3月7日開院）については語るべきことが多いが，すべて次稿に説く。3月に彼は公議所の議長の職務をとることになった。彼は英国留学中に，英国の合理的かつ人道的な法律制度の整備にふさわしい印象を受け，立法による国家の改善へのつよい志向を育てていた。森は公議所に五つの議案を提出した。その中注目すべきものとして「租税の議」と「刑罰はその一身に止まるべき議」，それに「御国体の議につき問題4条」がある。3件とも，4月中に提出されたらしい。前の二つ議案は，会議には付議されなかったが，3案とも日本を近代国家たらしめるための，もっとも本質的な改革を目指すもので，森の見解が時人の覚醒をはるかに抜いていたことをよく示している。「租税の議」において彼は，公議所の議を絶ずに，新法の課税や定額の増減を禁ずべきことを提案した。国家の体制に関して，森の望むところは，封建の体制を廃して，中央集権の制を確立するにあった。

そのことは明治2年1月に大久保に寄せた書簡の中で「今後皇国の大本を立てるは，是非郡県の制度に改革し，藩々の政権を一定に囲む，全国の権力を一手に握り，海外に応じずばんら皇国の維持，迹も六ケ政」とのべて，藩が，藩政奉還の先駆をなすよう藩議の指導を望んでいるのである。彼の集権国家構想の中で，各府県にそれぞれ議会をおくこなが，中央に国議会を考えていないことは注目に値する。さらに私の注意をひくのは，藩が国家の存立の絶対要件であるとする堅い信念を有していたから，この提案が，現在の封建と郡県と相半ばしている状態をもし改めるとすれば，封建制をとるべきか，あるいは郡県制をとるべきか，又，その理由得失如何，また変更する場合，どう措置すれば，人情時勢に適当することが出来るかという，極めて客観的な問題の提起に止まっていることである。

ここでは森は，決して急進の改革者ではない，むしろ啓蒙家の趣があり，また政治家的な成熟をも感じさせる。人情によって民度に応じた方向をさぐると共に，時勢の潮の下に彼は客観的歴史的な時代の要求を考慮にいれるべきことを要請しているのである。

これだけ慎重であった森だが，「廃力」案，厳密には「官吏兵隊の外帯刀を廃するは随意たるべきこと」を提案して一時は政治的命を絶たれるにいたった。これは，本質的には，国家体制の変化や近代化税制の原則の採用のような重大な問題ではない。しかも，これを顕末の問題と感じたところに，森と一般の武士たちとの間に埋めようもない意識のギャップが
あった。これは生涯にまつわって、森にも日本にも悲劇を被した意識のギャップである。
「御国体の議」については、きわめてラジカルな国体の変更構想にたいして224人中にかくも41人の支持があった。しかしこの「穏和な」帯刀を廃止する自由を認めではどうかという提案に対して、議会全員が一致して反対した。のちに森はその提案にたいして執行までも責任を求められたのである。切腹を禁ずる提案が賛成3にたいして反対200人で否決されたこととともに、御一新時の武士の意識の態度を示して興味がふかい。

（注） 諭諭政治においては、「国体の」ラジカルな改革は到底可能ではなかった。だが、この問題が議会の会合に附された直後に、まず議論奉還が、さらに4年7月に議論置きが執行された。後者は議長から敬意された1万人の親兵と議長の実力が背景となって実現したのである。議会において到底不可能な改革が、2、3の強藩の実力に背景して強行されたことは、その後の歴史の歩みに長く大きな影響を残すことになった。

森の廃刀提案は、実は廃藩、したがって武士が文武の常態を解かれ新しい体制の出現を前提していた。新しい国家や社会の体制の中で、武士階級は自己をつくり変えなければならない。その必要を帯刀を捨てるという形に託しての提案であった。しかし一般的武士にとっては、藩の消滅することは抵抗しごうない事態であったとしても、自ら刀を捨てることは、許せなかったのである。この種の「人情」を理解出来ないところから、森は時々難くあるのである。この傾向は生れつきのものであったろうが、同時に人情（しばしばそれは私情である）の否定されたところに成立する愛を人間至高の価値とする新しい教育が、この傾向を助長しているかもしれない。

森の廃刀案が議会所の会議に附されたのは明治2年5月27日のことであった。この議案を議長に提出したのは4月中のことだから1と月ばかりの間それは議長の手許にとめておられたことになる。大久保利通は4月中に（おそらく議長からそれを示されて）この議案の内容を知って、森をきびしく戒めた。それに答えた森の手紙が残っている。日附は5月2日である。全文を引いておく。

昨日御懸請之帯刀一条或就云々、共後尚再三熟者仕候処、真拝明示之通し彜而、時之人情或詳ならず要等相發し、今更後悔無益、実拝進退之至不不堪候。以来之処も斯る為体彜而代理を課るハ勿論、従而世害を醜るハ必然彜而、誠拝進退因縁、幸へ此度夢御懸請之趣彼を以、信貞之次第も最少、今後尚必死に反省も可仕覚悟ニハ候得共、御存之通俗至面面にて一向之豪情を抑懸勒候様有之、常々注意ハひと仕候得共、動すれば心懸相邀ミ真ニ苦痛、如此一身サヘも不取締之事を彜而ハ、来た従而世害を為未所からず、之を著ハハ即今一日も依然職を務る能ハス、サレハ不能卜申而退き候而も誠に薄情怯弱彜相似、质押帰着する処ヲ失し大ニ窮苦極在候得共足至学問上最意を用べ候かと申し同おもし直し、苟ニ因縁ながら今仰切励を尽し、セメテ世之邪魔と不相成丈ニハ

* 大久保家文書（大久保利通「森有礼」による）
力行する覚悟＝侯付，其城＝相卓＝侯迄ハ，何卒始終之父監御引立之程至願至望，先ハ
右等懇願仕候まで，乍不遅以書中拝啓仕候也，不備

5月2日

森 錦 之 丞

尚々御懇情之程深厚奉伏謝侯

森の反省は，さしあたりは「時の人情に詳ならずして妄に相発し」た幅卒な行為に向けられ
ているが，真の問題はその根底にある「至誠の性」にある。これは一身を誤るのみではない。
彼の地位がそれを国害に結付けずにない。この事件による蹟は森を改めて自己造造と
いう新生社以来の学本来の課題に立ち向わせることになった。

森は，はじめ日々の任務を遂行する過程の中で，この困難な課題に取り組む決意を堅めた。し
かし5月27日にこの議案が会議に附議されたことでこの方針は捨てられねばならなくなった。

この事件の経過には一つ理解しにくい点がある。この議案の提出は4月中のことだが，
制度審議の層書きがついているから，それは17日以前のことではない。大保がこの議案
について森に厳戒を加えたのはおそらくその内容が物議をかもすのをおそれた議長が大保
にその処置相談した結果であったろう。公議所に提出された議案はすべてが会議に付議さ
れるわけではない。現に森の提出した重要2案件はついに付議されずにいる。しか
し魔刀案は議長のこの憂慮にかかわらず5月末に会議に付された。森に取り下げる意志
さえあれば，たとえ議案案に掲載された議案であっても，付議を控えることは議長の裁量で
可能であった。これを思うと，森は大久保にたいして，必死反省を誓ったにも拘らず，それ
を取下げる意志はなかったと見る外らない。おそらく森は，為された事は為された事として
敢てその結果を甘受しようとしたのである。そこから学問を出発させようというもののは，彼
の意志であったであろう。6月20日附で彼は辞表を書いた。私はここに森のもっともハンブル
ルで正直で美しくかつ剛毅な心情の吐露を見る。これには前にあげた沢井，野田の「留別の書」
と読み合せる必要がある。またこれから3年足らず経ってから書かれた駐米代理公使を辞任
する際の辞表をも読み合せる必要がある。6月20日の辞表の全文を引いておく。

辞表（明治2年6月20日）

臣某誠恐議面奉达願候，臣去時六月米国より帰航，同七月不図も外国官職義事の命を拝し
而後移任敬度既に叙位之宜をも尊ぶし，微弱短才之身を以厚なる重大之職任を蒙り謙儀，実
以畏縮之至に於て，元より実任に不適は申述も無之候即共，何分国家多難之秋故，聊なりとも
鴻恩に報答一念に於て，更に不肖之身をも不顧，折角忘身勉勴仕来候。然処近末熟々既往之事
を省察仕候に，是繊素為筋と存込尽力仕懷候も或は精神之不貫微，或は考慮之義違いたし候
儀も許為有之，今更悔悟叩頭之至に不堪，殊に当今之職務は皆国家之大本に関渉いたし候重

1）森有礼文書。（木村翁，森先生伝，39—40頁）
2）木村の引用では英語となっている。
大之事情、然るに未過未熟短才之身を以ては其任に不能端のみならず、尚此上新従従を懺し候候之有之名候は真に国家之大罪、最是至之罪過も甚だ軽、宜く死を以其罪を贖ふべき筋にも有之候へ共、尚深考仕候へは是唯に我之害物と相成り更に報恩之寸志をも不遂相候次第に而真に生涯之遺遺と存候。就而就は此箇非常出格之恩食を以、官位共都而御免被仰付被下度、然れば、今一応四、五ケ年間必死苦学仕り更に再び何なりとも身分假合之御奉公を仕り、専心前進を懇し且報恩之素志をも相違候様仕度候間、何卒此便速に御開済被成下度恐伏奉至願候、誠恐謙言。

詳しい分析は省くが、私はこの辞表にかなり頑著な特色のあるのを注意をひかける。そこには、非難された行為にたいして責任をとって身をひくという消極的な姿勢をとらった、積極的な意志がある。それが何であれ、与えられる任務に堪える自分を養うために四、五ケ年間必死苦学を許されることへの要請が、むしろこの辞表の核心をなしている。これを5月2日附の大久保観の手紙と比べると、そこでは佐倉のままその苦学を決意していたのが、今は一切の職務から自由になることが必要という判断がある。相違は、状況に応じた「学問」の方法にかかわるもので、本来の学に向けられた意志は一貫して変わっていない。

彼は四、五ケ年の必死の苦学を通じて改めて「身分似合の場」での奉公を期している。それを通じて前過を償いもし、報恩の素志をも達したいとするのである。鹿児島に帰った森は英学塾を開いた。彼は入塾志願者の多く倫に悩まされながら、飽くまでも正直に素志を貫徹しようととめた。明治3年7月7日附の兄宛の手紙はこの間の消息をよく伝えている。

取掛の箇も顧人過分に有之、実以至臣却居申候。御承知通の性質故、折角悪避8、9年間なお学問も仕立了箇も固り為人も邪魔ならんだけやりつけ候上は、臣子の分だけは元より十分尽す事に候。

その期間は八、九年にのびたが、まさしく辞表通りの覚悟が表明されている。失脚を学問専念の機会にしようとする意志が明である。ここでの学問は世害をかす根を己れの中に断つことを目指している。それは新生社風の自己再造の事業にほかならない。そしてこの時期においても森が入間再生への志向をすべてていないことには証拠がある。彼が東京を捨てて帰郷する途次、長崎から名和道一にかき送った手紙（明治2年7月9日附）がそれである。これも全文を引用しておく。

其後如何町朝暮想念之至ニ不堪、弧客も共路之苦情散々、御愼察下さるへし。東京発足之御前ハ美貴之遊物誠ニ遠路迄之御見送誠ニ恐入候。共日ハ定刻揚遅海路平穏、去ル6日当港着、今四、五日滞留居家之候ニ御座候、御役者君も甚御勤明御勉強、折日等も案外戒守厳敬事ニ候。ハリス之事当地ニ而ハ一層豊栄ニ至若情之悲憤感之至ニ不堪、嘔呼何日から天此人等（を）して再生之域ニ至らしむるやト悲惨之余り黙祈も仕候。乍去是も已ニ

(1) 原田実氏所載、写真（森有礼全集、第2巻）
(2) 片野一郎氏著（森有礼全集、第2巻）
一身之責を忘れ倗事故，更に苦慮を増し倗。御辛察下さるべし。尚細書を不日後便より
押呈至すべし。任便宜倗幸寸信を寄ス

木村国は『森先生伝』の中で，森が鰤髄やこの宛名人の名号と共に，当時の地に懸けた道
義の拘回を策して「公暇あれば三相相提携して道徳論を談ずるを楽しむとせり」，と述べてい
る。だがこの手紙は，この三人の間には単に道徳論を談ずるを楽しむに止らない結びが存し
たことを示唆するのである。
（注）

ハリスのことが此の土地でも物議を醸したという以上，東京でもその事があったにちがい
ない。これは彼等の手でハリスの名に結びつく運動がすすめられていたことを思わせる。森
は長崎でもハリスについて語ったのかもしれません。折田は木村国『森先生伝』のための資料
提供者的一人，折田彦市であろう。私はそれ以上この人について知るところはないのだが，
彼も亦森，鰤髄等の運動の同志の一人であったのであろう。「折田等も戒守云々」という語
はこの事を暗示する。この運動が人間再生を目指すハリスの教に結び付いたものであったこと
は，この手紙の文面によって殆どと疑う余地なく証明されると私には思われる（追記参照）。
（注）ハリスという名は珍らしい名ではない，長崎勤務の米国領事にもHoward Harrisがいた。彼も
ラトガース大学出身（1873年頃）だが，その長崎在勤は1884—85年の間である。「ハリスの事当地に
ては一層紛云」という語について，人間の処分を喫いては直ちに他人を責める自己を反省し，さら
に「喫呼何れの日か天比人等をして再生の道に至らしむるや」と結んでいるのは，このハリスが或も
なく「新生のハリス」であることを示すものである。

森は四，五ヶ年の必死苦学を誓って，鹿児島に帰った。彼はここでさらに八，九年の「避難」
再学の志を堅めた。ここでしばらく，彼は自己再造を志向して学問三昧の境涯を自己に課
したのである。だがこの生活は意外に早く中断を余儀なくされた。森は鰤髄とともに明治政府
に派遣する最初の在外使節として起用されたのである。明治3年10月6日に東京に着いた森
は，鰤髄方に寓居，11日に鰤髄名号とともに，墨田の秋を描のしんでいる。彼は来国に赴
任する際，従者という名義で仙台の新井常之進（奥進）を伴った。森ははじめからハリスに
ついてキリスト教を学びさせるために，彼を米国に連れていったのである。これは森とハリ
スとの間に，心が通っていた一つの証しとなる。しかし新井について，また森とハリスの
「再会」について語ることも次第に譲らなければならない。

ここで私の考えておきたいことは，この起用によって，森の四，五ヶ年の間必死苦学の誓はど
うなったかの問題である。一切の職場から自由になった避難の生活は，八，九年どころか一年余
りで終止したがそれは，ただに必死苦学の願いそのものが果たすように捨てられたことを
意味するものではない。事実アメリカの2年余りの生活は，疑もなくはげしい学習者の生活で
あった。私は第二次アメリカ滞在は森の第二の Lehrjahre（修業時代）であったと見てよい

(1) 同書，42頁
(2) 「森先生伝」凡例 2 頁。
と考える。その学習のあとは、彼の在米中の3冊の編著、なにせ“Life and Resources in America”（1871）、“Religious Freedom in Japan”（1872）、“Education in Japan”（1873）に明かである。その学習が如何なるものであったかは、やはり次篇に譲るほかはない。私が学ぶに当たっておきたいのは、前記三書中の最初の一書をのぞいて、それが森の公使辞任後に成ったものだということである。ある意味でこの二冊の本は、森の公使辞任とふかいかかわりをもっていた。（1）

森代理公使の辞任については、前稿で、一応究明を試みた。若干補足を要する点もあるが、今はその余裕はない。彼が自らあげている辞任理由は、自分のような「不穏の雑誌物」をかくの如き枢機の重責に充てられるとするのには選用いまだその道を得たよりと為すべきからず」というにあった。Dimon のいわゆる sinn of being young の自覚が辞任の理由である。明治2年2月の森も、やはり同じような理由で辞任を決断した。相違は、少弁務使森には、外的には止めなければならぬ理由は何一つなかったことである。それだけに、逆に、明治2年のそれをも含めて、森の出所進退の論理がそこで明確になる。森は正直に自己がその重任に堪えないことを感じている。ここでは森には現在の職務とは別に自己の本来、服務すべき場が見えはじめていた。明治2年6月の彼は、四五ケ年も必死苦学生のうえ、何なりと身分似合いの奉公の場に復帰することを期していた。その「奉公の場」について二度目のアメリカの生活を通じて、次第に明確な自信が形づくられているのである。2年余りの決して長くない二度目のアメリカ滞在の間に、森はハリスの影響から次第に自由になる。もっとも彼がハリスの許で身につけたものは失われてしまうのではないか。それは、長く森の中に生きつづける。それが何であったかは、今後の職業を通じて明になる筈である。第二の辞表を書いている時点の森は、はっきりと「日本の再生」あるいは国家の回復にたいする自己の責任を自覚している。それはしかし、もはやハリス的な神における人間の再生を通ずる道ではない。森の個人的、内生の中で、神が生きつづけていたかどうかは別として、この日本の再生の仕事の中でキリストの神によりたのむことは、森には許されなくなっている。彼は、社会が真に堅固であるためには、キリスト教の信仰とモラルを欠くことが出来ないと信じている（『日本における宗教の自由』）。しかし彼が自らに課している任務は「国民教育を組織することによってネーションの歴命を形成すること」である。この仕事の中で、彼がキリスト教に関してなしうることは、日本に宗教の自由を確立すること、それをキリスト教にたいして道を聞くことだけであった。（2）

森が公使辞任を決したとき、彼は文部省に入ることを希望していたと私は推測した。この希望は実現を阻まれたが、彼はあくまで辞意を貫こうとした。そして、「日本における宗

(1) 森有礼研究第一、森代理公使の辞任（東北大学教育学部研究年報第15集）
(2) 植植森有礼研究第一、森駐米代理公使の辞任、18頁
教の自由」を書き、「日本の教育」を編み終えて帰国した。彼は独自に「日本の国民教育を組織する」仕事に着手したのである。

彼は、明治6年3月中旬から下旬の頃米国を離れ英国経由で帰国の途にいた。英国を訪ねたのはハーバート・スペンサーに「日本の諸制度の再組織」について意見を求めるためであった。

彼の帰国は明治6年7月23日で、旧暦に直すと6月29日に当る。四五年間の苦学を喫して一切の職務を辞し、位記を返上してから丁度4ヶ月目であった。それはまさしく必死苦学と呼ぶにふさわしい学習の四年であった。森の第二次修業時代はこれで終る。しかし、学政家森が形成されるためには、なおかなり長期にわたり、第三次修業時代を必要とした。

— エピローグ

—吉田と森と鰐島—

野田、沢井と袂をわかつて、まつ先に新生社を飛び出した永井は、1868年9月には杉浦、松村とともにラトガース大学の理科に入学した。だが永井はその年の12月にラトガース大学を退学し、翌年7月末、彼はニューブラウンスウィックを去った。モンソンの近くにあるWilbraham Academyに入学するためである。これはおそらく将来に見ればイエール大学で政治学を専攻するための用意であったろう。モンソンには同じく政治学志望の大原令之助（吉原重俊）がいた。彼は1869年9月にイエール大学の法学部に入学した。

当時永井は二つの悩みをもっていた。一つは1869年10月現在で、なお両三年は来国に止まって専門の学術を修めた上で帰国したいと思っているのに、国許からはきりに帰国を求めてくることであった。彼は専門の学術を修めて帰ることこそ、国にとくに所以であるとかたく信じている。だからこのままでは死んでも帰りたくないと考えている。もう一つは、帰国後のことで、政府に立て国の大事を負担する上に、キリスト教信仰が妨げになるだろうというおそれであった。1869年10月23日傍、江藤篤介（？）宛書簡の中で永井は、

兄も知る通り此道を真信する之徒即政府に在て大事之局を司るにあらずや。然るに我輩の此の信用（仰）をのみ御答メ被成時＝ハ Justice の道如何相立可申哉と苦心書在申候。（訳）

と書いている。永井は1871年2月森が着任する直前帰国の途にいた。森にも専門の学術を修めたい希望がなかったわけではない。しかし彼は鰐島とともに、くりかえしのべたように、ハリスの勧めるままに、それが祖国への義務だと信じて帰国した。何か彼等をまちチェしているかは分かれないし、また抱負とよぶべきものもなかった。何を為すべきかの知とそれを為す力とは「彼」が与える（「日本の予言」），信じていたのである。だから彼等は、永井の悩みと、右顧左顧を知らなかった。

* 吉田文書，2463
森のこの度の帰国は彼の生生涯への第一歩であった。彼がこうした帰国をした人であることは、彼の人格と行動の理解に大切な事実だと私は考える。この初心を彼が生涯失わず名ちつけたとは、私も考えない。しかしこういう帰国をした人であるという面は、彼の生涯の終りまで変らず切りつけられたのでなかったか。少くも再度の辞職の中には、この「初心」はまままざと生きている。だが世間の人には森のこのような面影は全く知られていなかった。

森とともにプロトンから帰国し、またともに最初の在外使臣として明治政府に起用された濱島は、二度目のフランス公使在任中胸を痛んでパリに客死した（1880年12月4日、37才）。遺体はモンマルトルの墓地に葬られた。次に引用する一文は、悲報をきいてロンドンから駆けつけた森が、生涯の心友濱島をいたんでの別告別の辞である。

Sameshima! Ever since you began your uses in this world righteousness has found you a most faithful servant. You worked hard and well thirty-seven years worthily spent. No more, O precious soul! no more, O noble labourer! no more, O bright star! still you live, still you work, still you shine in the bosoms of your friends. You know me well!

最初の一行に明かに新生社 (the Use) の用語が見られる。濱島は新生社にとって the truest hearted of our Japanese で、最後の息をひきとるまで、ハリスと the Use への忠誠を変えなかったといわれている人である。森はここでおそらく濱島だけが知っている二人の過去を思い出し続けているが、彼の中に、濱島だけが知っている漱山のものがあることを、誰に語ることも出来ない多くのもののあることを、思っていたのであろう。それのがこの結びの言葉 "You know me well." を発せしめたと私は感じられるのである。—未完—

おわりに

本稿起案の目的は、森とキリスト教の関係、より厳密には森にとって、キリスト教は何であったかの疑問を解くことであった。しかしここれだけの紙幅を費しながら、ついに結論に至らず筆をおおくことになった。結論を取り出すためには、2度目のアメリカで森の経験したものですと、彼の著書の立入った呪文が必要である。しかし私は本稿で、森のキリスト教経験の基底をなすものは何故明かにすることを余儀なくされたので、この基礎の上に、次稿でこの複雑な問題について私なりの結論をつけたいと考えている。

* "The London and China Telegraph" 8 December, 1880, (Ivan Hall 氏提供)
終りに吉田清成文書を、自由に使わせて下さった京都大学国史研究室にたいし、またその検索複写のため格別の労をおとり下さった同研究室の黒田公氏、及び種々の配慮を惜しまれなかった同大教育学部の木山幸治氏にたいしぼかく御礼を申し上げたい。

追記

校正の進行中に Ivan Hall 氏から The Sun の記事全部（タイプで27頁）のコピーを賜られ一読することができた。日附は私の推定ともかがって1869年の4月30日であった。したがって、森、鯱島の帰国後のこと、新生社に残っている日本人は長沢と野村の二人だけである。しかしインタビューが、一年前におこなわれたとしても、日本人の与えた印象は変わらなかったであろう。

なおこの記事には、本論考の主題にとって重大なかかわりのある情報がふくまれていた。それは、帰国した「もっとも有力な日本人メンバー」からの最近の通信の一端への言及である。彼は、「国家の諸問題の検討と解決のための委員 Commissioner」をつとめている。詳しい証証は次の機会に譲るが、これが明治元年九月以来「議事体裁取調御用」を仰げられていた森か鯱島を指すことは明らかである。この「彼」の手紙の中に

彼を通じて新生社の宗教と生活に関心を持つにいたった日本人の大きい集団（a large company）が、そこでキリスト教について学び、キリストの教にしたがって日々を生きるために、エリイ湖畔に移住する用意をすすめている。

ことが記されていたというのである。日本側にこれ等を裏付ける資料が見出されない間、この情報そのまま鯱島にするとわけにはゆかないが、森の名和道一宛書簡にてらしてこれを読むと、森や鯱島の推進していた道義挽回の運動が、ハリスの教に結びつくものであったことはたしかで、それはまさしく世上に物議を醸すだけに反響があったと考えてよいであろう。